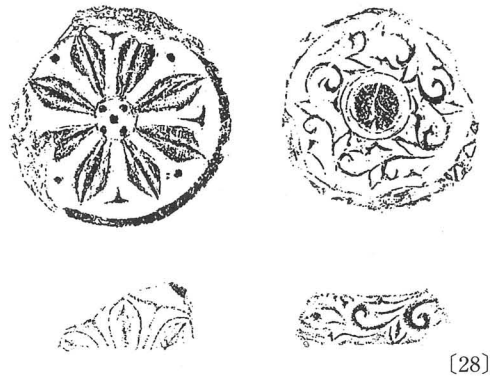
28. 廃長宝寺（交野郡衙跡）　交野市郡津

【存続年代】　白鳳時代～



〔28〕

河内国茨田郡

29. 龍光寺跡（蹉跎廃寺）　枚方市南中振１

【存続年代】　飛鳥時代～

【同笵関係】　九頭神廃寺（複弁８葉・外縁剣頭紋）

【備考】　蹉跎神社の境内から古瓦が出土

「□光寺」文字瓦

瓦窯の可能性もある

〔31〕

30. 高瀬寺跡　守口市高瀬町

【存続年代】　白鳳時代～

【備考】　複弁軒丸瓦（平城宮式の様相も）

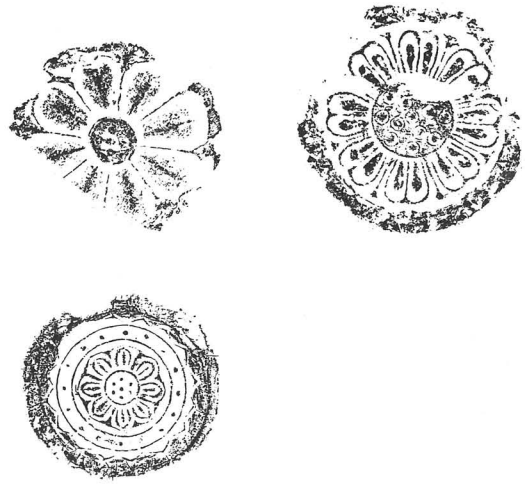
31. 高柳廃寺跡　寝屋川市高柳

【存続年代】　奈良時代～

【備考】　長栄寺境内に奈良時代の古瓦が散布

（完形の均斉唐草紋軒平瓦を所蔵）

茨田寺である可能性もある



河内国讃良郡

32. 高宮廃寺跡　寝屋川市高宮

【存続年代】　白鳳時代～平安時代

【伽藍配置】　薬師寺式か？

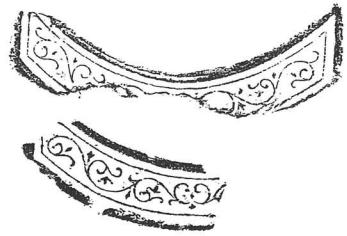
【検出遺構】　中門：北側の一部を検出

南大門：一辺約１ｍ四方の正方形ピット４基

回廊：（東）４.８ｍ（北）４ｍ、高さ０.３ｍ

金堂：東西13ｍ×南北12ｍ、高さ０.６ｍ、礎石

講堂：花崗岩石列、東西16×南北12ｍ



〔32〕

東塔：10.3m四方基壇、

花崗岩塔心礎、直径40cm、深さ８cmのホゾ穴

掘立柱建物、瓦溜

【集落】　高宮遺跡

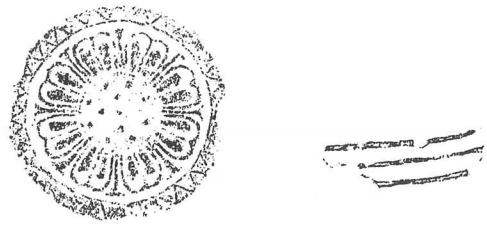
【同笵関係】　讃良寺（複弁８葉）

【備考】　府指定史跡

「隆平永宝」（皇朝十二銭）

廃寺跡の御祖神社境内に心礎、礎石

西塔跡に社殿が建つ



〔33〕

33. 讃良寺跡（更荒寺跡）　寝屋川市国守・四條畷市岡山４丁目

【存続年代】　白鳳時代～

【検出遺構】　瓦敷遺構、平瓦による導水施設

【集落】　三味頭遺跡（三重弧紋軒平瓦が出土）

【同笵関係】　高宮廃寺（複弁８葉）

34. 正法寺跡　四條畷市清滝

【存続年代】　白鳳時代～室町時代

【伽藍配置】　薬師寺式か？

【検出遺構】　中門基壇

塔？：一辺12ｍ乱石積基壇、

西側築地塀、区画溝（北・南）、

井戸、礎石

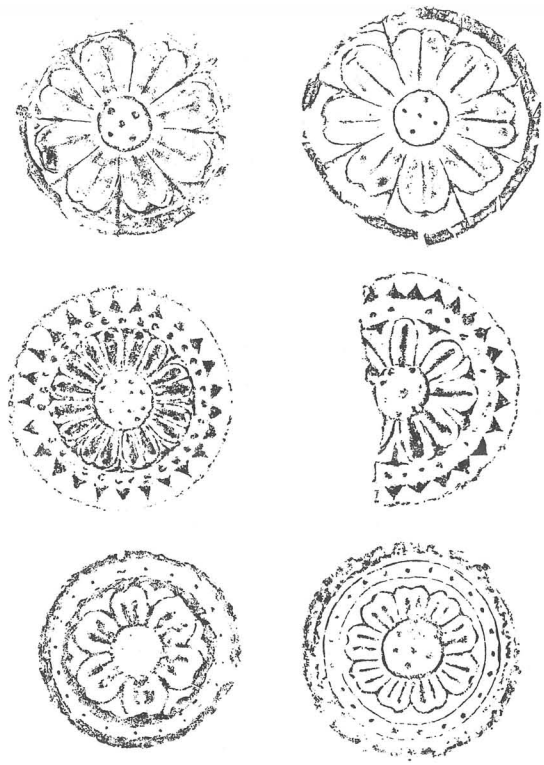
【集落】　正法寺跡北側

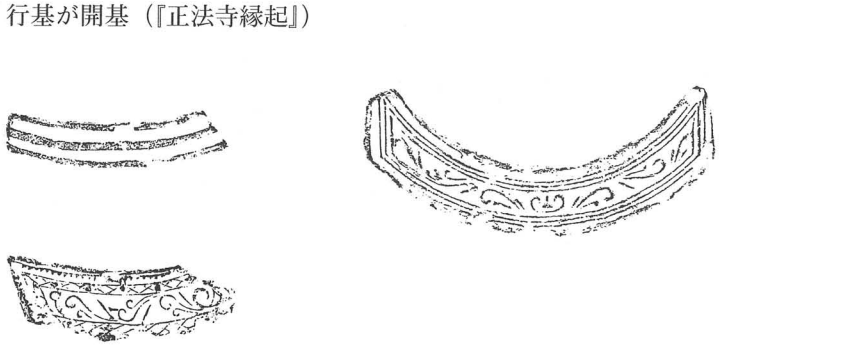
【備考】　丸瓦、平瓦、墨書土器「正囝寺」、

鞴羽口、塼

天平11（739）年聖武天皇の勅願により

行基が開基（『正法寺縁起』）





〔34〕

35. 瓦堂寺院跡（瓦堂遺跡）　大東市野崎３丁目

【存続年代】　白鳳時代～

【備考】　奈良前期瓦

36. 太秦廃寺　寝屋川市太秦中町

【存続年代】　奈良時代～

【備考】　熱田神社境内に礎石？

〔36〕

河内国河内郡

37. 河内寺跡　東大阪市河内町

【存続年代】　白鳳時代～

【伽藍配置】　四天王寺式

【検出遺構】　講堂：東西22ｍ×南北14.５ｍ（乱石積）

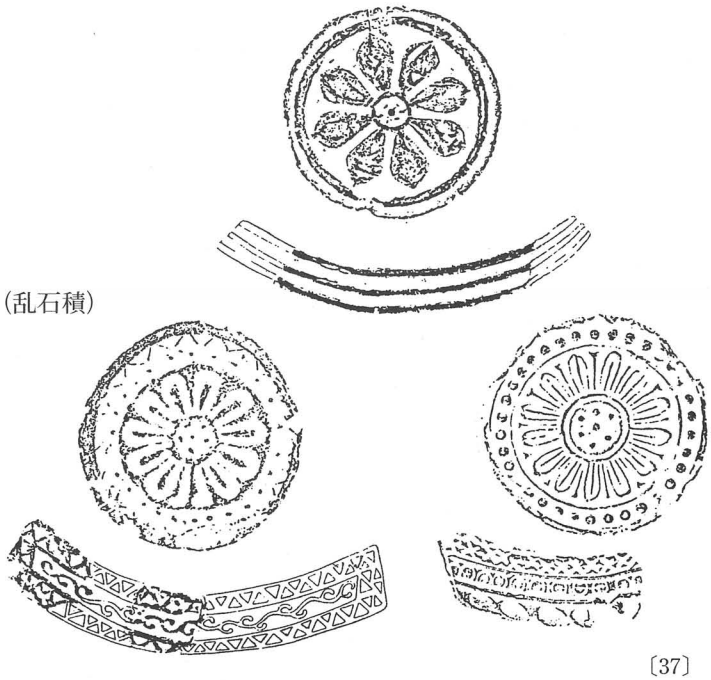
回廊：柱間２.95ｍ

【同笵関係】　太田廃寺

【備考】　丸瓦、平瓦

付近に河内郡衙が存在したと

考えられている



〔37〕

38. 法通寺（穂積寺）跡　東大阪市東石切１丁目

【存続年代】　白鳳時代～室町時代

【検出遺構】　建物１：東西12.６ｍ×南北11ｍ

（乱石積・南側中央に階段）

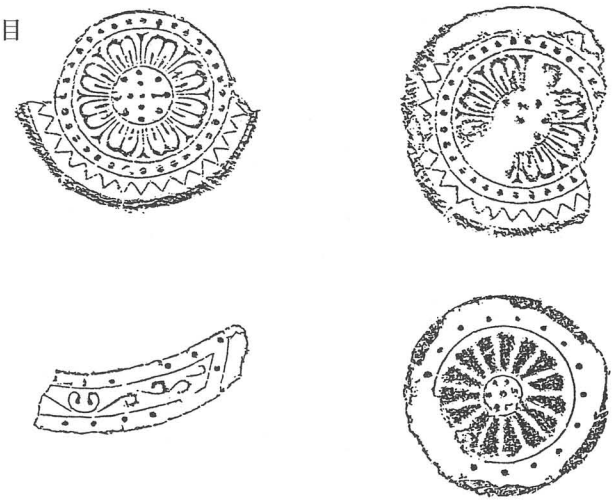
建物２：東西約12ｍ（乱石積？）

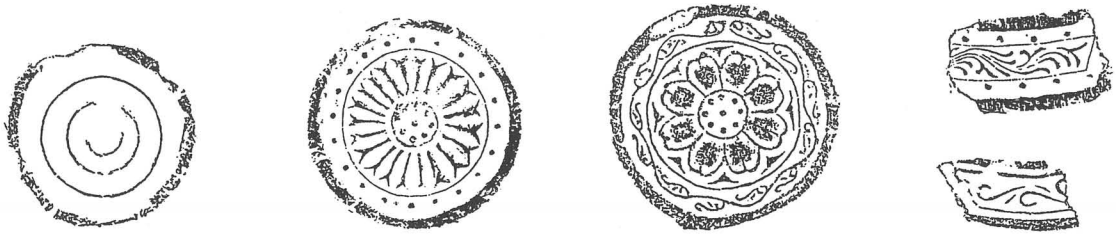
回廊状遺構

【備考】　丸瓦、平瓦

西側へ伽藍が広がる可能性がある

（礎石を確認）





〔38〕

39. 石凝寺跡　東大阪市北石切

【存続年代】　奈良時代～

【検出遺構】　基壇

【同笵関係】　若江寺跡（雷紋珠紋縁）

【備考】　丸瓦、平瓦

行基建立四十九院のひとつ（『行基年譜』）

〔39〕

河内国若江郡

40. 若江寺跡　東大阪市若江北町、若江南町、若江本町

【存続年代】　飛鳥時代末～室町時代

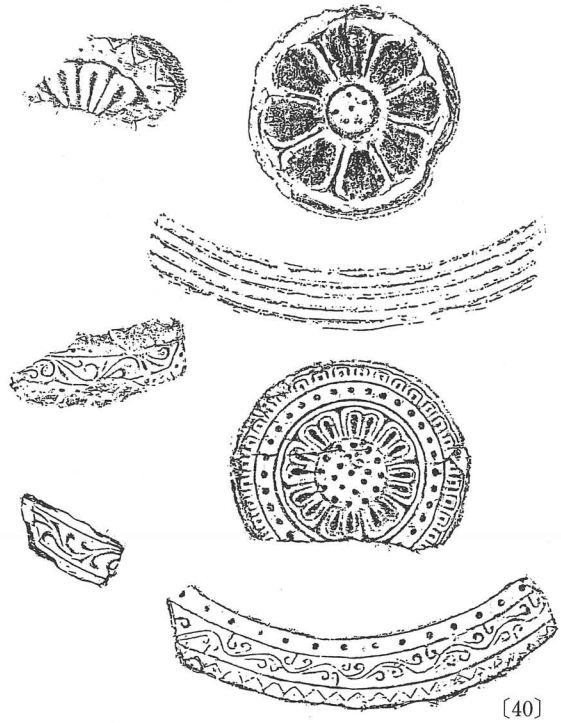
【同笵関係】　石凝寺（雷紋珠紋縁）

【備考】　若江城跡とは範囲が重なる

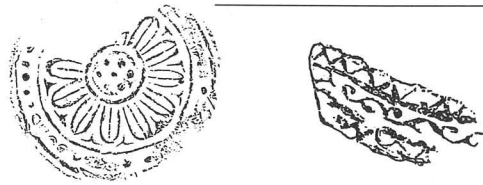
41. 西郡廃寺　八尾市泉町、幸町、桂町

【存続年代】　白鳳時代～中世

【備考】　天神社境内に白鳳時代心礎が現存（付近で出土）



〔40〕



〔41〕

42. 東郷廃寺　八尾市光町、東本町、荘内町、桜ヶ丘

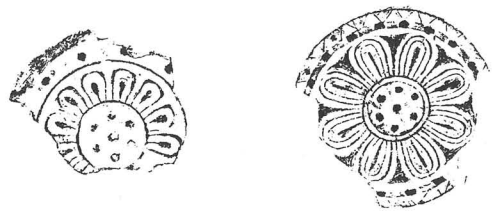
【存続年代】　白鳳時代～

【伽藍配置】　不明

【検出遺構】　未検出

【備考】　方形状の高まりで礎石をひとつ確認

平瓦、鉄滓状の塊



〔42〕

河内国渋川郡

43. 渋川廃寺　八尾市渋川町、春日町

【存続年代】　飛鳥時代か？～

【検出遺構】　心礎：長辺約１.９ｍ、短辺約１.５ｍ、
高さ約０.９ｍ 長楕円形

【備考】　太子堂４丁目（大聖勝軍寺の旧地）
から礎石、屋瓦が出土

〔43〕

44. 鞍作廃寺　大阪市平野区加美鞍作１、２

【存続年代】　白鳳時代～

【同笵関係】　野中寺・善正寺（単弁８葉）

【備考】　鞍作寺境内に礎石

〔44〕

45. 長楽寺廃寺　大阪市平野区加美鞍作１

【存続年代】　奈良時代～

【備考】　丸瓦、平瓦

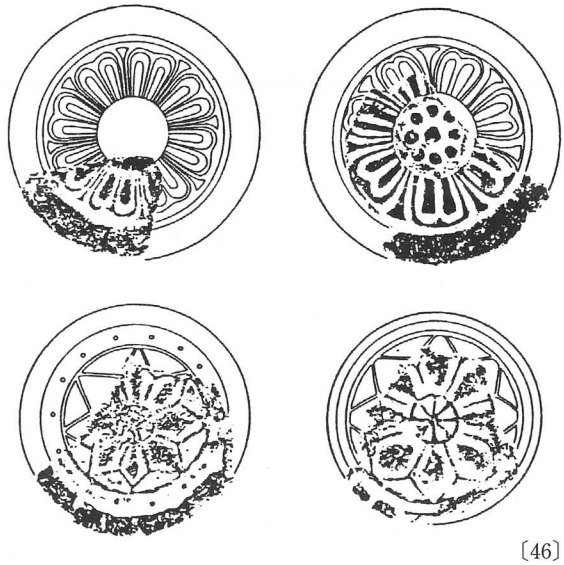
河内国高安郡

46. 心合寺跡（大竹廃寺・秦興寺跡）

八尾市大竹

【存続年代】　白鳳時代～室町時代

【備考】　平瓦、面戸瓦
心合寺山古墳南西の濠から心礎が出土
一辺１.00～１.65ｍ、高さ０.３ｍ
中世に堂塔を大幅に修復したと
考えられている

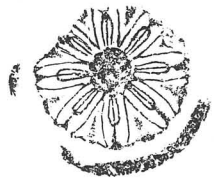


〔46〕

47. 高麗寺跡　八尾市服部川

【存続年代】　白鳳時代～中世

【備考】　丸瓦、平瓦、付近の水田・畑の石垣に礎石あり



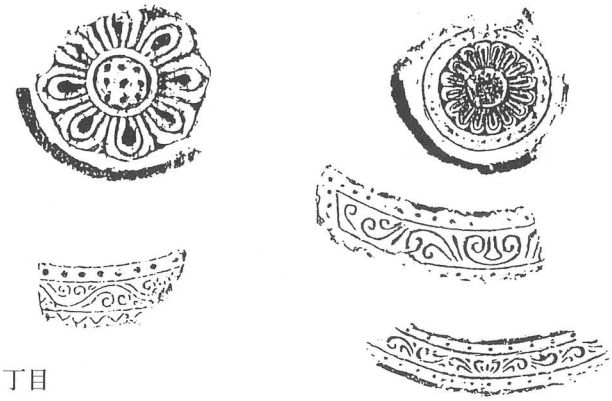
〔47〕

48. 教興寺跡　八尾市教興寺

【存続年代】　奈良前期～現代

【検出遺構】　飛鳥時代～奈良時代の遺構は未検出

【備考】　鎌倉時代西大寺叡尊が再興



〔48〕

河内国大県郡

49. 智識寺跡（太平寺廃寺）　柏原市太平寺２丁目

【存続年代】　白鳳時代～

【伽藍配置】　薬師寺式

【検出遺構】　東塔：一辺16.８ｍ、溝

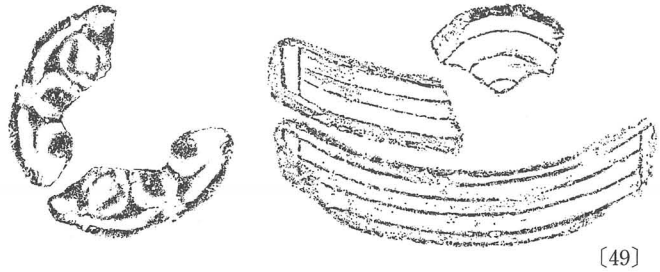
【同笵関係】　鳥坂寺（重弁８葉）

【備考】　府指定史跡

丸瓦、平瓦、鴟尾（葡萄唐草紋）

東塔心礎は石神社に移されている

東西両塔心々距離約50ｍ



〔49〕

50. 家原寺跡（安堂廃寺）　柏原市安堂町

【存続年代】　白鳳時代～

【備考】　軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦

51. 鳥坂寺跡（高井田廃寺）　柏原市高井田

【存続年代】　白鳳時代～平安時代

【伽藍配置】　四天王寺式

【検出遺構】　塔：一辺８.66ｍ

金堂：東西約18ｍ×南北約15ｍ

（壇上積基壇）

講堂：東西32.３ｍ×南北約20.３ｍ

掘立柱建物（僧坊・食堂か？）

【集落】　高井田遺跡

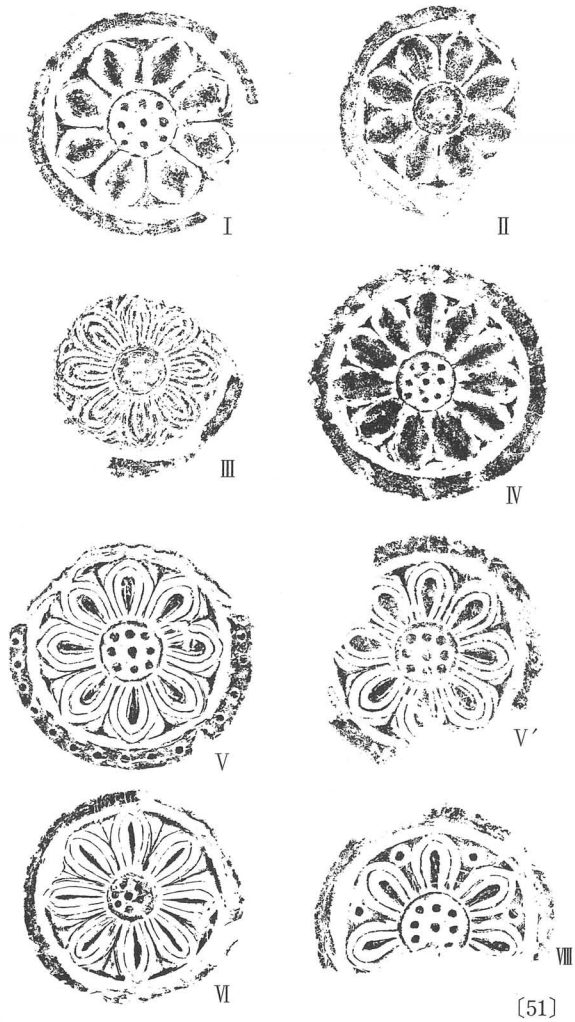
【同笵関係】　智識寺跡（重弁８葉）

【備考】　丸瓦、平瓦、鴟尾、塼仏、塼、

金銅仏片、金銅製金具類、鉄釘、

鉄製金具、施釉陶器

周辺から墨書土器が出土（「鳥坂寺」、「寺」、「三昧」）



〔51〕

52. 三宅寺跡（平野廃寺）　柏原市平野２丁目

【存続年代】　奈良時代～

【備考】　平瓦片

〔51〕

53. 山下寺跡（大県南廃寺）　柏原市大県４丁目

【存続年代】　白鳳時代～中世

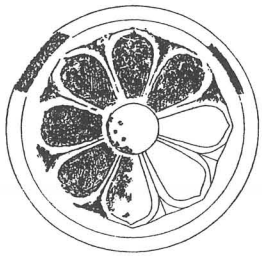
【集落】　大県南遺跡（鉄器・ガラス工人が居住）

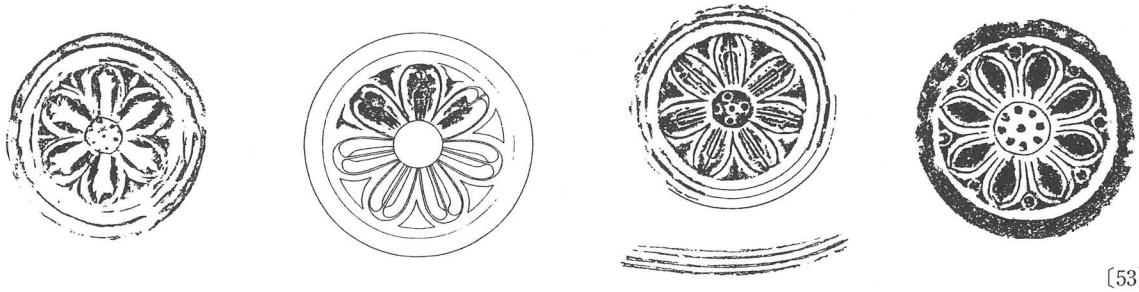
【備考】　丸瓦、平瓦、緑釉丸瓦（採集）

大県南遺跡から「山下脊川」の墨書土器が出土、

山腹に掘立柱建物、基壇状遺構、土釜利用の

地鎮遺構がある





〔53〕

54. 大里寺跡（大県廃寺）　柏原市平野２丁目、大県４丁目

【存続年代】　白鳳時代～平安中期

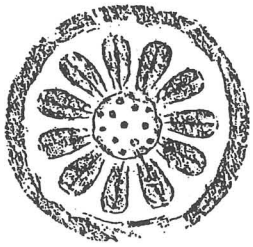
【伽藍配置】　法起寺式

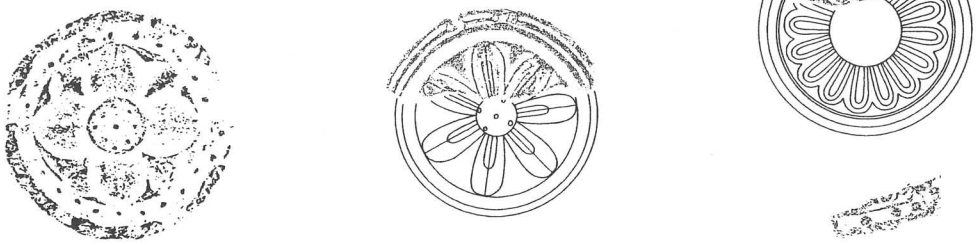
【集落】　大県遺跡（古墳時代以降、鉄器生産集団が居住）

【同笵関係】　四天王寺NMⅥｄ型式

【備考】　鬼瓦、寺域北側井戸から「大里寺」の墨書土器が出土

寺域南側は大県郡衙跡と推定されている





〔54〕

河内国志紀郡

55. 土師寺跡　藤井寺市道明寺２丁目

【存続年代】　飛鳥時代～現代

【伽藍配置】　四天王寺式

【検出遺構】　溝、石列（僧坊基壇の根石か？）

【集落】　土師の里遺跡

【古墳】　土師の里遺跡

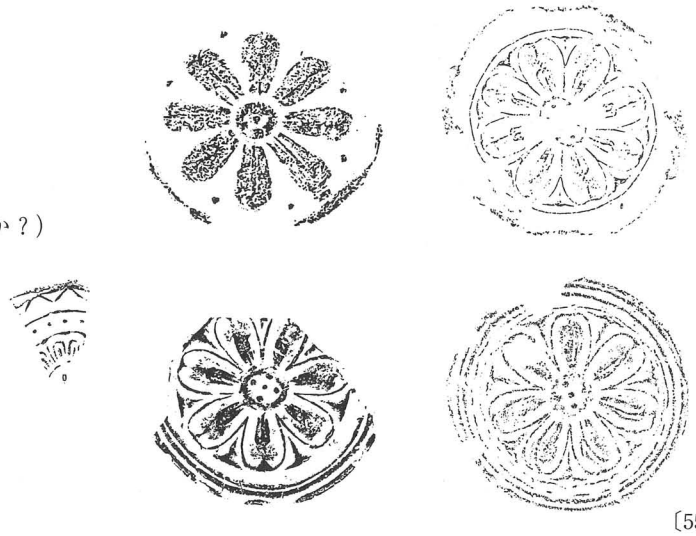
【備考】　丸瓦、平瓦、製塩土器

心礎・礎石が伝えられている

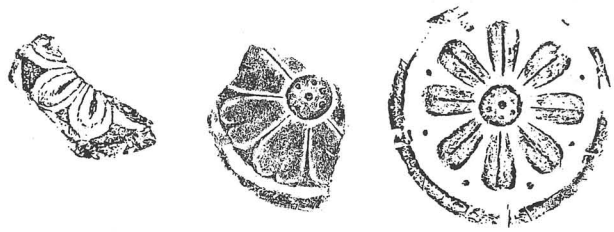
寺域周辺から「寺」、「土寺」

の墨書土器が出土

伽藍は奈良時代～平安時代に一度崩壊



〔55〕



56. 衣縫廃寺　藤井寺市惣社２丁目

【存続年代】　飛鳥時代～

【伽藍配置】　法起寺式か？

【検出遺構】　塔：一辺約12ｍ

（凝灰岩・地下式心礎）

東面回廊：幅４.６ｍ

（塔心礎から14ｍ東）

【同笵関係】　船橋廃寺、飛鳥寺Ⅱ型式

【備考】　丸瓦、平瓦、鬼板、塼

心礎が碑の台座に転用されている

長辺3.15ｍ、短辺2.16ｍ

〔56〕

57. 船橋廃寺　藤井寺市船橋

【存続年代】　飛鳥時代～平安時代

【伽藍配置】　四天王寺式か？

【検出遺構】　土壇、塼列、溝状遺構

【同笵関係】　衣縫廃寺、飛鳥寺Ⅱ型式、
新堂廃寺ⅣA12型式

【備考】　丸瓦、平瓦、官衙跡とも考えられている

〔57〕

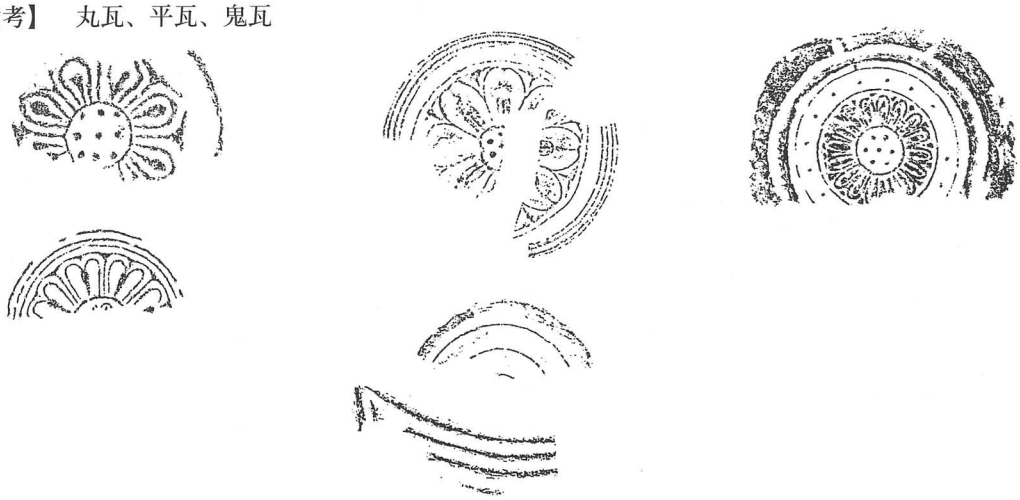
58. 葛井寺跡　藤井寺市藤井寺７丁目

【存続年代】　白鳳時代～現代

【伽藍配置】　薬師寺式か？

【検出遺構】　創建期のものと思われる基壇痕跡

【備考】　丸瓦、平瓦、鬼瓦



〔58〕

59. 拝志廃寺　藤井寺市林３丁目

【存続年代】　白鳳時代～

【瓦窯】　寺域北約20ｍで瓦窯と思われる遺構検出

【備考】　丸瓦、平瓦、鴟尾、獣面紋鬼板

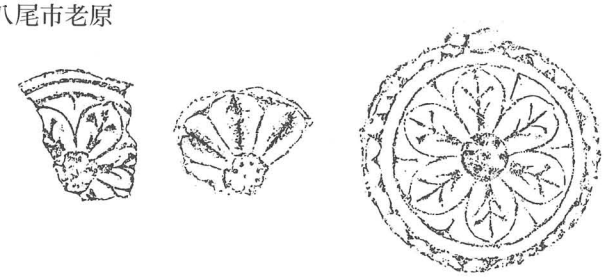
心礎が碑の台座に転用されている

長辺1.36ｍ、短辺1.33ｍ

〔59〕

60. 老原廃寺（五条廃寺、五条宮寺跡）　八尾市老原

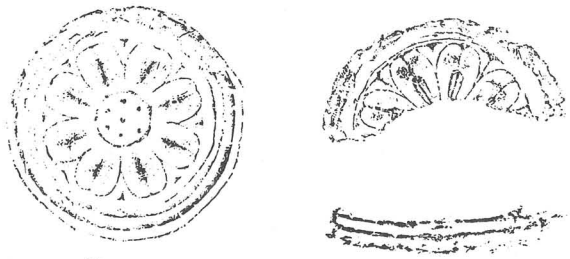
【存続年代】　奈良時代後期か？～



河内国丹比郡

61. 津堂廃寺　藤井寺市津堂１丁目

【存続年代】　白鳳時代～



62. 野中寺　羽曳野市野々上５丁目

【存続年代】　白鳳時代～現代

【伽藍配置】　川原寺式

【検出遺構】　中門：東西15ｍ×南北12ｍ（3×2間）

塔：東西13.62ｍ×南北12.9ｍ、高さ1.5ｍ

（凝灰岩乱石積）

金堂：東西４間、南北５間

炉（真鍮鋳造）、掘立柱建物

【瓦窯】　下田池瓦窯跡

【集落】　野々上遺跡

【古墳】　羽曳野丘陵一帯

【同笵関係】　四天王寺NMⅡｆ型式、

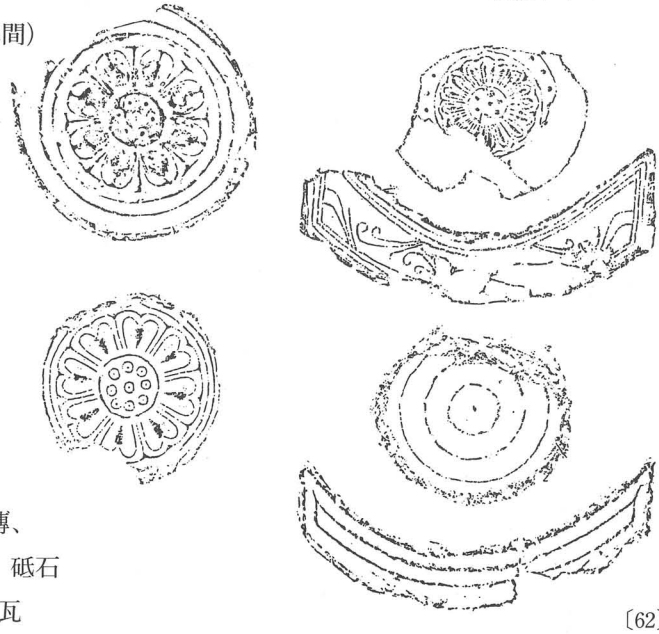
善正寺、鞍作廃寺（単弁８葉）

【備考】　国指定史跡

丸瓦、平瓦、鴟尾、熨斗瓦、鬼瓦、塼、

釘、不明金銅製品、硯、一字一石経、砥石

「康戌（650）年正月…」紀銘ヘラ描き瓦



〔62〕

63. 善正寺跡　羽曳野市はびきの２丁目

【存続年代】　白鳳時代～平安時代

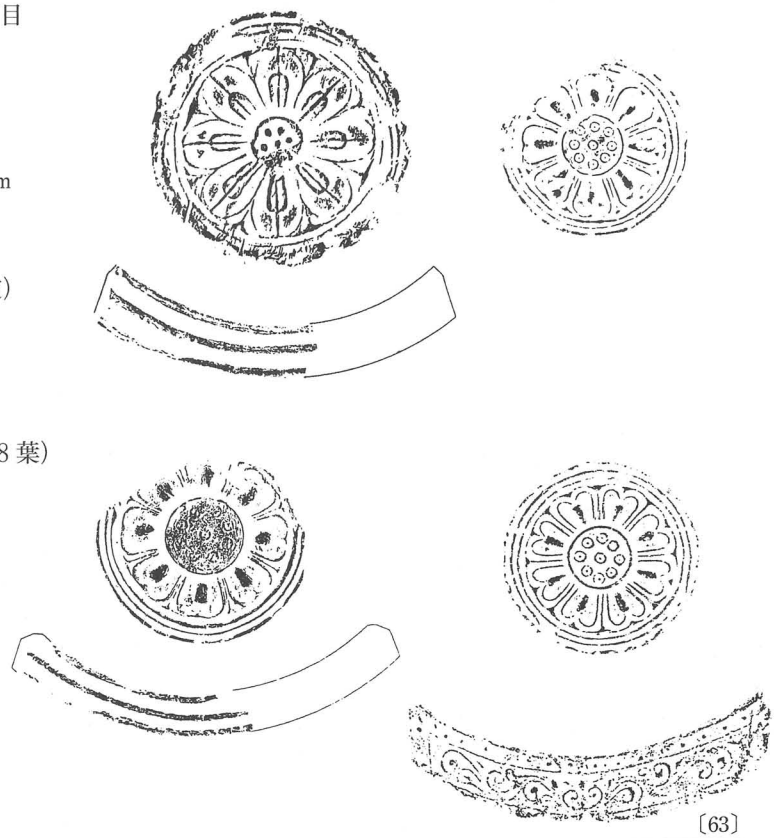
【伽藍配置】　薬師寺式

【検出遺構】　東・西塔基壇：一辺約10ｍ
（凝灰岩切石積み）
金堂基壇：約17.９ｍ×12.７ｍ（推定）
（凝灰岩切石積み・礎石は白瑪瑙）

【集落】　石曳遺跡

【同笵関係】　野中寺・鞍作廃寺（単弁８葉）

【備考】　丸瓦、平瓦、鴟尾、
鉄製飾り金具、鉄釘
金堂礎石に白瑪瑙の
白色大理石を用いる



〔63〕

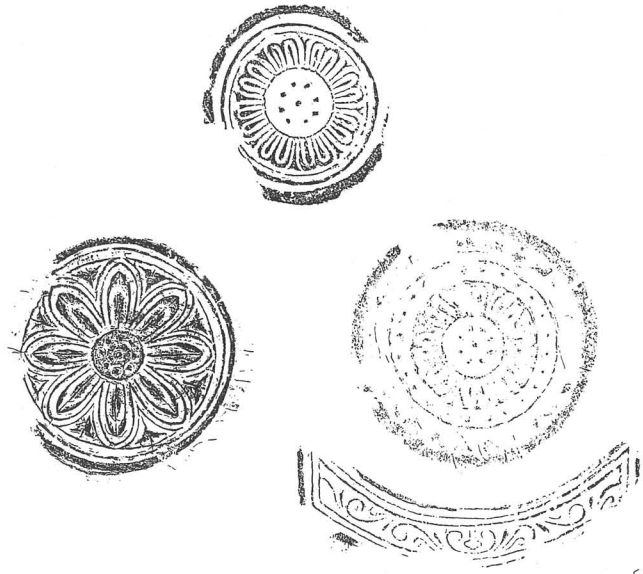
64. 黒山廃寺　美原町黒山

【存続年代】　白鳳時代～

【瓦窯】　真福寺遺跡

【集落】　真福寺遺跡

【備考】　丸瓦、平瓦、鬼瓦、鴟尾、
瓦塔、金銅仏手、塼
伝黒山廃寺出土心礎が四天
王寺国際仏教大学に存在



〔64〕

65. 丹比廃寺　美原町多治井

【存続年代】　白鳳時代～

【備考】　丸瓦、平瓦
後に徳専寺（平安時代）、
徳専寺城（室町時代）が築かれた

〔65〕

66. 泉福寺（大保廃寺）　美原町大保

【存続年代】　白鳳時代～

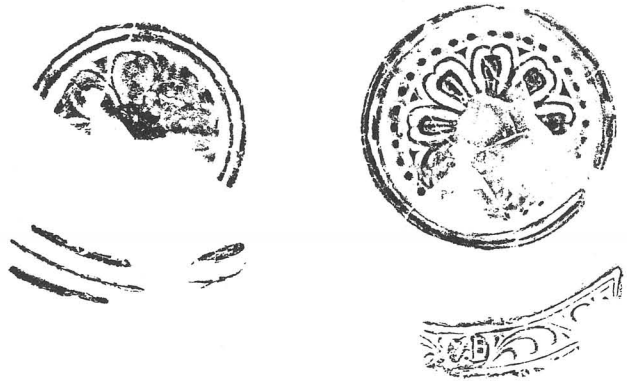
〔66〕

67. 東野廃寺　大阪狭山市東野

【存続年代】　白鳳時代～

【備考】　丸瓦、平瓦

蓮光寺境内（現廃寺）



〔67〕

68. 野中満願寺　藤井寺市

【存続年代】　白鳳時代～

【瓦窯】　下田池瓦窯か？

【同笵関係】　野中寺Ⅰａ型式

69. 成本廃寺　大阪市平野区瓜破東４

【存続年代】　奈良時代～平安時代

【検出遺構】　南限区画溝

【備考】　飛雲紋軒丸瓦は「一本造り」

70. 瓜破廃寺　大阪市平野区瓜破東４

【存続年代】　奈良時代～

【同笵関係】　長岡京7802Ｂ型式

71. 住道廃寺（須牟地廃寺跡）

大阪市東住吉区住道矢田８

【存続年代】　奈良時代～

〔70〕

河内国安宿郡

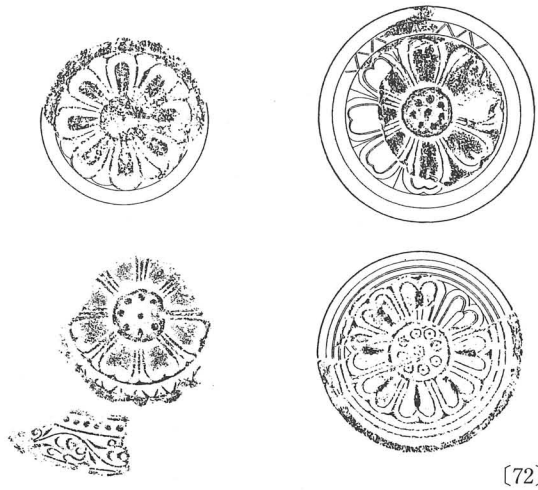
72. 五十村廃寺　柏原市旭ヶ丘２丁目

【存続年代】　白鳳時代～

【検出遺構】　基壇（規模不明）

【同笵関係】　田辺廃寺

【備考】　丸瓦、平瓦、凝灰岩、鉄釘、瓦塔片



〔72〕

73. 原山廃寺　柏原市旭ヶ丘３丁目

【存続年代】　白鳳時代～

【同笵関係】　田辺廃寺

〔73〕

74. 片山廃寺　柏原市片山町

【存続年代】　白鳳時代～

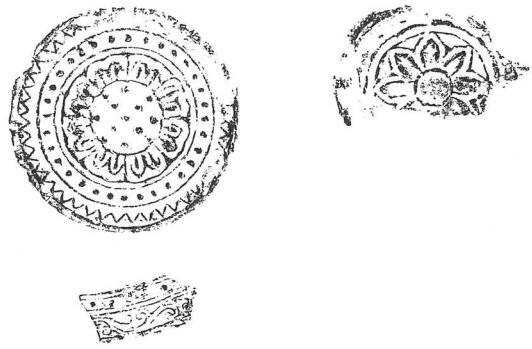
【検出遺構】　塔：一辺11.87ｍ

（凝灰岩壇上積み基壇

を瓦積で補修）

【同笵関係】　藤原宮跡、別所廃寺

【備考】　丸瓦、平瓦、塼



〔74〕

75. 河内飛鳥寺　羽曳野市飛鳥

【存続年代】　白鳳時代か？～

【伽藍配置】　円形柱座心礎：長軸３.14ｍ、短軸２.47ｍ

厚さ１ｍ以上

柱穴：直径約０.93ｍ、深さ０.33ｍ

舎利孔：直径14㎝、深さ15㎝

【同笵関係】　小松里廃寺（単弁12葉）

【備考】　軒平瓦（平安時代）、瓦片

聖徳太子建立四十六寺院の飛鳥寺説、

飛鳥戸郡の郡寺説、飛鳥部氏の氏寺説

76. 田辺廃寺　柏原市田辺１丁目

【存続年代】　奈良時代～平安時代前期

【伽藍配置】　薬師寺式

【検出遺構】　東塔：塼積み基壇、一辺約10ｍ（平安前期？）

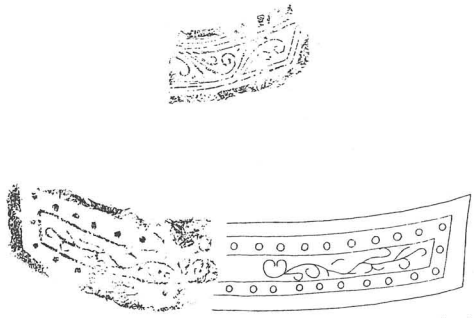
西塔：瓦積基壇、東西10.32ｍ×

南北10.08ｍ（白鳳時代）

金堂：瓦積基壇、東西17.８ｍ×

南北11.51ｍ（白鳳時代）

南大門：瓦積基壇



〔76〕

【瓦窯】　原山廃寺付近に存在したといわれている

【古墳】　譽田山古墳群（塼敷石室を持つ古墳含む）

【同笵関係】　原山廃寺、五十村廃寺

【備考】　国指定史跡

丸瓦、平瓦、塼、鉄釘

平安前期に焼失、金堂のみ再建され室町時代まで存続

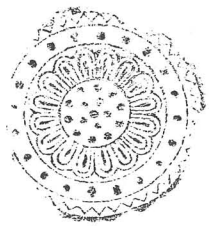
77. 河内国分寺跡　柏原市国分東条町

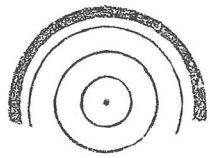
【存続年代】　奈良時代～

【検出遺構】　塔：東西18.77ｍ×南北10.36ｍ

（壇上積み基壇）

中門（推定）：凝灰岩延石列





〔78〕

【備考】　軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、塼、

相輪関係銅製品、鉄釘、「冨寿神宝」（皇朝十二銭）

78. 河内国分尼寺跡　柏原市国分東条町

【存続年代】　奈良時代～

【備考】　軒丸瓦、瓦片、銅製品

小字に「尼寺」

河内国古市郡

79. 西琳寺　羽曳野市古市２丁目

【存続年代】　飛鳥時代～現代

【伽藍配置】　法起寺式

【検出遺構】　回廊

円形柱座塔心礎：長辺３.２ｍ、

短辺２.８ｍ、高さ１.95ｍ

柱穴：直径０.73ｍ、深さ０.41ｍ

四方に添柱穴

舎利孔：幅15㎝、高さ11㎝、奥行き19㎝

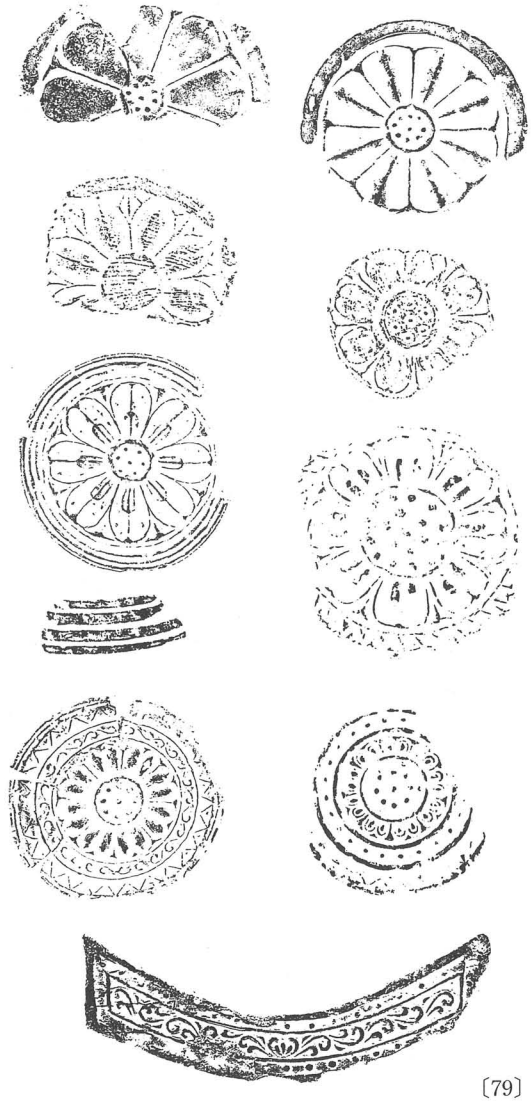
【備考】　丸瓦、平瓦、鴟尾、鬼板、塼、塼仏、

80. 譽田八幡宮神宮寺跡　羽曳野市譽田３丁目

【存続年代】　奈良時代～

【備考】　古室遺跡、譽田御廟山古墳外堤から

同型式の瓦が出土（平安時代）



〔79〕

河内国石川郡

81. 新堂廃寺（烏含寺）　富田林市緑が丘町

【存続年代】　飛鳥時代～中世

【伽藍配置】　四天王寺式か？

【検出遺構】　塔、金堂、講堂、西方建物、中門、

南門、宝幢遺構、南限・北限区画溝

【集落】　寺域北東（奈良時代～平安時代）、中野遺跡

【瓦窯】　ヲガンジ池瓦窯（飛鳥時代～奈良時代）

【古墳】　お亀石古墳

【同笵関係】　細井廃寺・龍泉寺（川原寺式）、

船橋廃寺（ⅣＡ12）、興福寺（ⅣＢ06）、

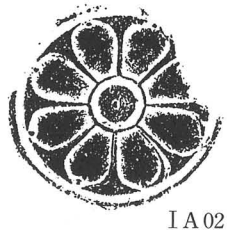
法華寺下層（ⅣＢ06）、飛鳥寺（垂木先瓦）

〔80〕

【備考】　丸瓦、平瓦、金銅製帯金具、「寺」墨書土器、奈良三彩、塼仏、螺髪、鴟尾（「瓦張ヵ」刻書）、鬼瓦、「石川郡大」刻書文字瓦、面戸瓦、熨斗瓦、鬼面紋隅木蓋瓦、垂木先瓦、土製瓦当笵、塑像、塼、石製銙帯、鞴羽口、鉄釘、鉄斧、凝灰岩

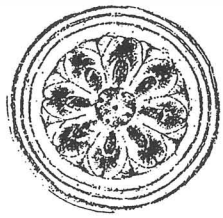
ⅠA04

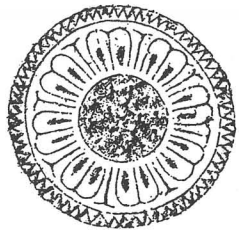
ⅠA13

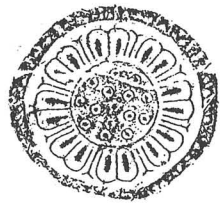

ⅠA02

ⅠA03

ⅡA07


ⅡA06


ⅡA09


ⅡA10

ⅤA12〔81〕

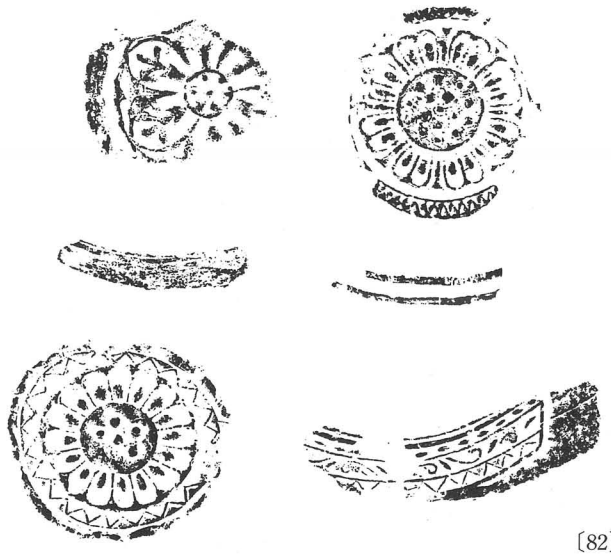
82. 龍泉寺　富田林市龍泉

【存続年代】　白鳳時代か？～現代

【同笵関係】　細井廃寺・新堂廃寺（川原寺式）

【備考】　国史跡

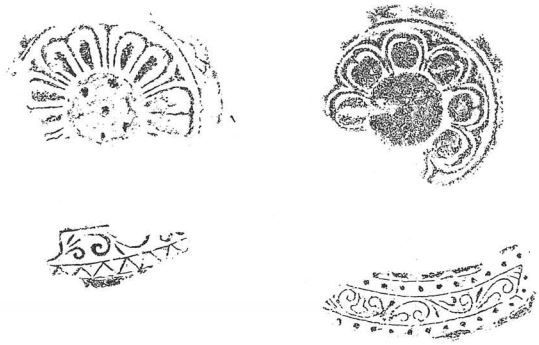
丸瓦、平瓦、鬼瓦、硯、銅銭、鉄釘、銅・鉄製品


〔82〕

83. 山城廃寺　河南町山城

【存続年代】　白鳳時代～

【備考】　丸瓦、平瓦


〔83〕

河内国錦部郡

84. 細井廃寺　富田林市錦織

【存続年代】　白鳳時代～室町時代

【検出遺構】　柱列、掘立柱建物

【集落】　錦織遺跡

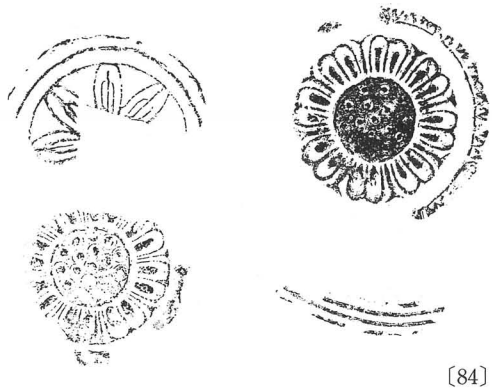
【古墳】　南坪池古墳

【同笵関係】　龍泉寺・新堂廃寺（川原寺式）

【備考】　丸瓦、平瓦

鴟尾、同心円タタキ塼（錦織廃寺に類例）、

斜格子タタキ塼



〔84〕

85. 錦織廃寺　富田林市錦織

【存続年代】　奈良時代～

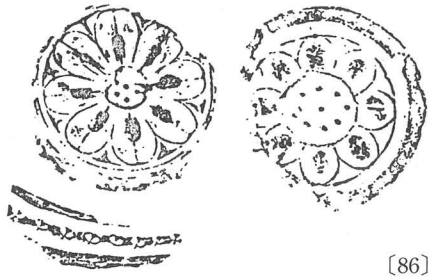
【備考】　同心円タタキ塼（細井廃寺に類例）

和泉国大鳥郡

86. 塩穴寺　堺市石津北町

【存続年代】　白鳳時代～近世

【備考】　桧塚古墳に古瓦散布
この古墳が、寺院基壇の可能
性があると指摘されている
瓦器・須恵器他出土



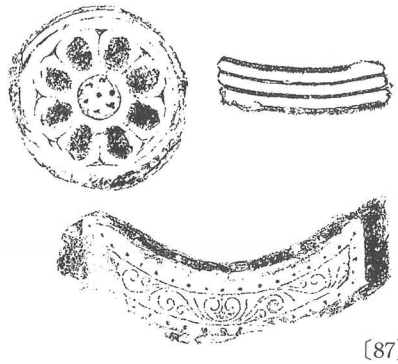
〔86〕

87. 百舌鳥陵南廃寺　堺市百舌鳥陵南町２丁

【存続年代】　白鳳時代～

【瓦窯】　荒坂瓦窯（奈良県）か？

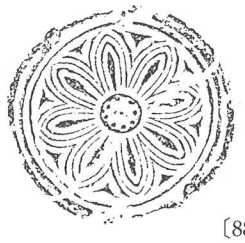
【備考】　684年銘平瓦、二重弧紋軒平瓦
円筒埴輪、蓋形埴輪



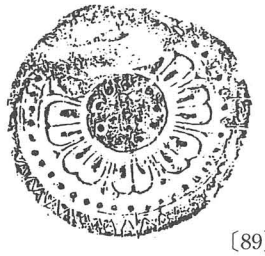
〔87〕

88. 華林寺（蜂田寺）　堺市八田寺町

【存続年代】　白鳳時代～



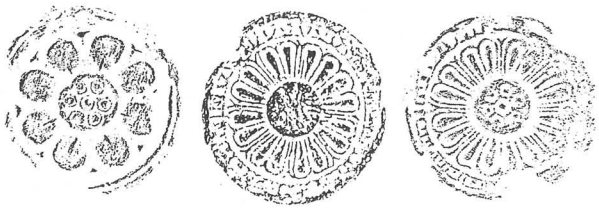
〔88〕

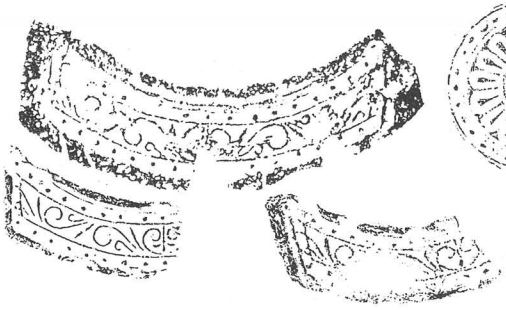


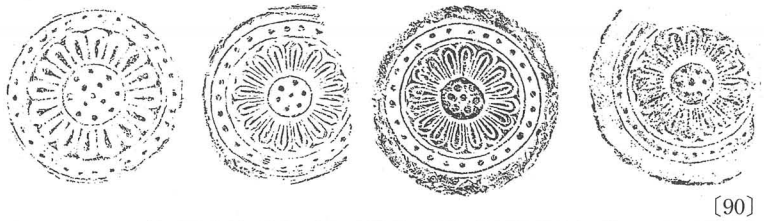
〔89〕

89. 長承寺　堺市鳳東町３丁、鳳南町４丁

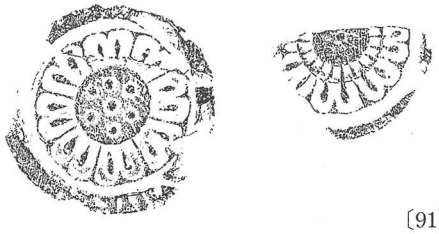
【存続年代】　白鳳時代～







〔90〕



〔91〕

90. 和泉土師廃寺（土師観音廃寺）　堺市土師町

【存続年代】　白鳳時代～平安時代

【備考】　丸瓦、平瓦

白鳳時代創建の寺院が別の場所にある

可能性あり

91. 家原寺　堺市家原町

【存続年代】　白鳳時代～

92. 仏光寺跡　堺市八田寺町・毛穴町

【存続年代】　白鳳時代か？～

【検出遺構】　西面する基壇建物：

東西10ｍ×南北12ｍ、

高さ０.５ｍ礎石（平安時代）

【同笵関係】　信太寺（素弁８葉）

【備考】　検出遺構は平安時代のもの

出土瓦の一部に白鳳時代の瓦あり

93. 大野寺　堺市土塔町

【存続年代】　神亀４年（727）～現代

【伽藍配置】　法起寺式か？

【検出遺構】　土塔

【備考】　国指定史跡

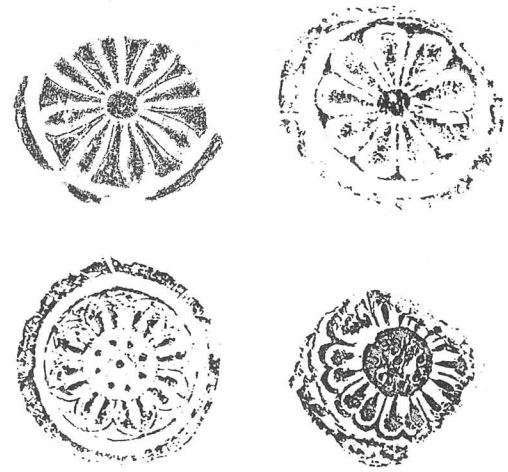
礎石が大野寺境内に残る

平城宮6304系軒丸瓦、平城宮6689系軒平瓦

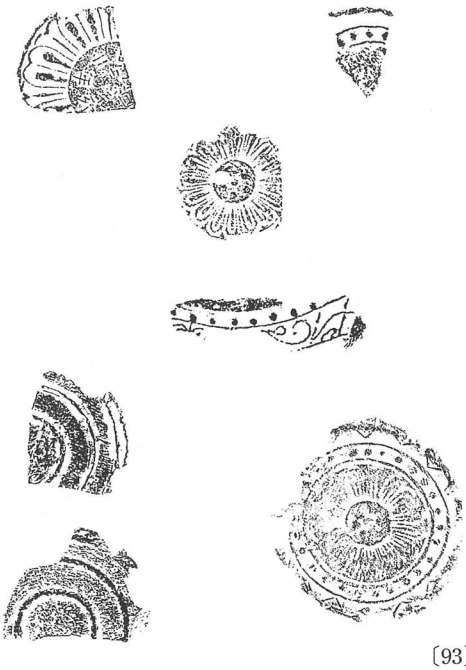
土塔と江戸時代再建の本堂が残る

土塔は一辺54～59ｍ、高さ９ｍ、日干しレンガを枠として内部に土を盛る

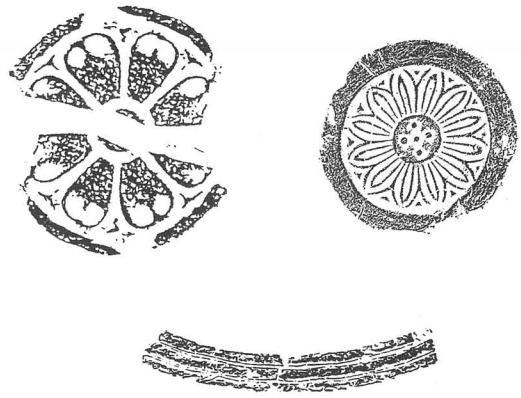
年号を記した軒丸瓦、文字瓦多数、丸瓦、平瓦



〔92〕



〔93〕



〔94〕

和泉国和泉郡

94. 小松里廃寺　岸和田市小松里町、下池田町

【存続年代】　飛鳥時代～

【同笵関係】　河内飛鳥寺（単弁12葉）

【備考】　池田寺と同紋の軒丸瓦（単弁12葉）、鴟尾片

95. 信太寺跡（上代観音寺）　和泉市上代町

【存続年代】　白鳳時代～現代

【伽藍配置】　法起寺式か？

【検出遺構】　３時期の重なりがある

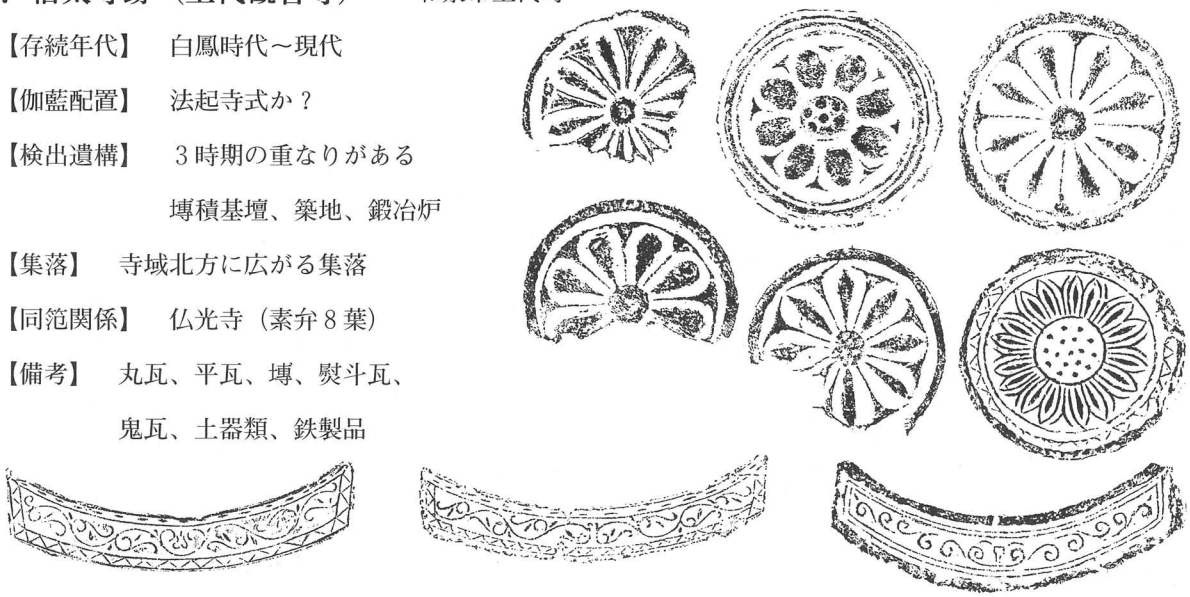
塼積基壇、築地、鍛冶炉

【集落】　寺域北方に広がる集落

【同笵関係】　仏光寺（素弁８葉）

【備考】　丸瓦、平瓦、塼、熨斗瓦、

鬼瓦、土器類、鉄製品



〔95〕

96. 和泉寺跡　和泉市府中町

【存続年代】　白鳳時代～中世

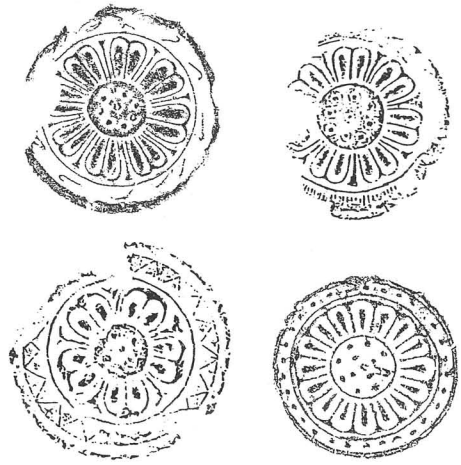
【検出遺構】　削平

【集落】　府中遺跡

【備考】　礎石が泉井上神社境内に移る

川原寺式軒丸瓦、法隆寺式軒丸瓦、

池田寺Ⅰ式軒丸瓦、岡寺式軒丸瓦



〔96〕

97. 池田寺跡　和泉市池田下町

【存続年代】　白鳳時代～現代

【検出遺構】　推定寺域北限とほぼ一致する

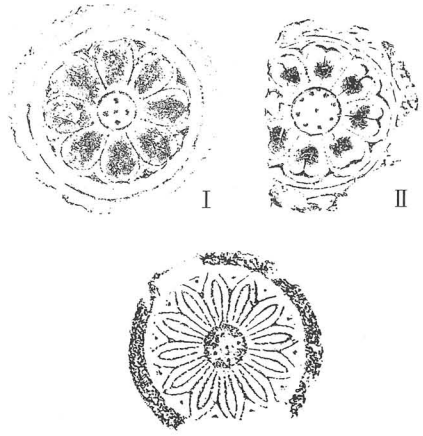
中世大溝、築地

【瓦窯】　４基検出

【集落】　寺域北方に集落

【備考】　「池田」・「池田堂」文字瓦、丸瓦、平瓦

現：明王院



〔97〕

98. 坂本寺跡（禅寂寺）　和泉市阪本町

【存続年代】　白鳳時代～室町時代

【伽藍配置】　法隆寺式

【検出遺構】　塔基壇　一辺12ｍ、高さ１ｍ
各辺中央に幅２.４ｍの乱石積の外装を
持つ階段
講堂：乱石積基壇　７間×４間の建物
回廊：幅約４.５ｍの単廊　地廊は
講堂背面の庇通りに取りつく
金堂：南北16ｍ×東西20ｍ、高さ１.３ｍ
心礎：現禅寂寺本堂前に移る

【同笵関係】　伊賀・夏見廃寺三尊塼仏

【備考】　川原寺式軒丸瓦、土器類

99. 松尾寺　和泉市松尾町

【存続年代】　白鳳時代～

100. 春木廃寺　岸和田市春木若松町

【存続年代】　白鳳時代～

101. 別所廃寺　岸和田市別所町

【存続年代】　白鳳時代～

【同笵関係】　片山廃寺（藤原宮式）

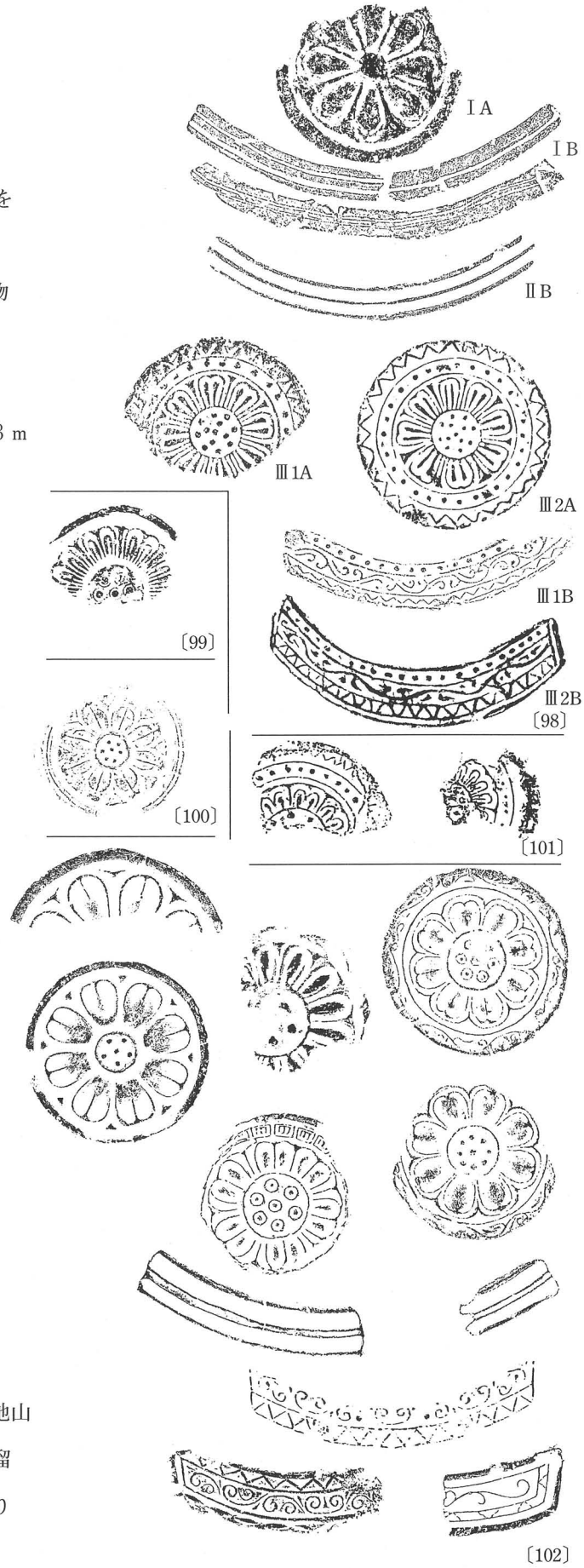
102. 秦廃寺（半田廃寺）　貝塚市半田

【存続年代】　白鳳時代～

【検出遺構】　寺域南限、土坑、溝、竪穴住居、
掘立柱建物

【集落】　半田遺跡？、麻生中下代遺跡

【備考】　堀遺跡（貝塚市）で同紋瓦（高句麗系）
小字に「南臺」・「堂ノ後」とある境界の地山
を成形した段を検出、その段の南側に瓦溜
地山を成形した段が寺域南限の可能性あり



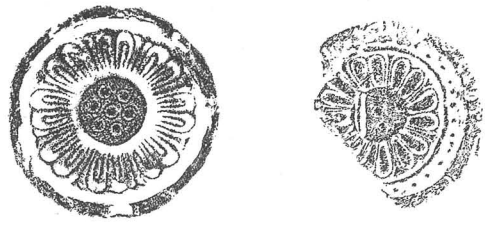
103. 和泉国分寺　和泉郡国分町

【存続年代】　承和６年（839）～

【備考】　丸瓦

前身寺院は白鳳時代創建と

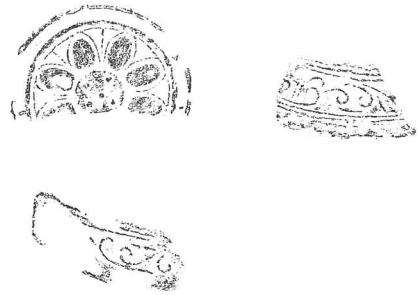
考えられる安楽寺



〔103〕

104. 田治米廃寺　岸和田市米治米町

【存続年代】　奈良時代～



〔104〕

和泉国日根郡

105. 地蔵堂廃寺　貝塚市地蔵堂

【存続年代】　白鳳時代～

〔105〕

106. 禅興寺廃寺　泉佐野市長滝・南中樫井

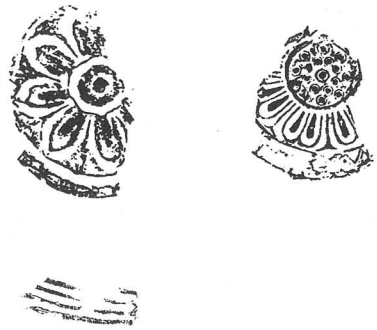
【存続年代】　白鳳時代

【検出遺構】　一辺0.6ｍ方形柱穴

【備考】　寺域南の諸目遺跡より山田寺式軒丸瓦、

三軒茶屋遺跡より川原寺式軒丸瓦、

丸瓦、平瓦



〔106〕

107. 海会寺跡　泉南市信達大苗代

【存続年代】　白鳳時代～室町時代

【伽藍配置】　法隆寺式

【検出遺構】　塔：一辺13.2ｍの乱石積基壇

建物柱間２.４ｍの３×３間

金堂：基壇南北21.0ｍ

乱石積基壇

講堂：基壇東西21ｍ南北13.8ｍ、

建物柱間２.４ｍの７×４間

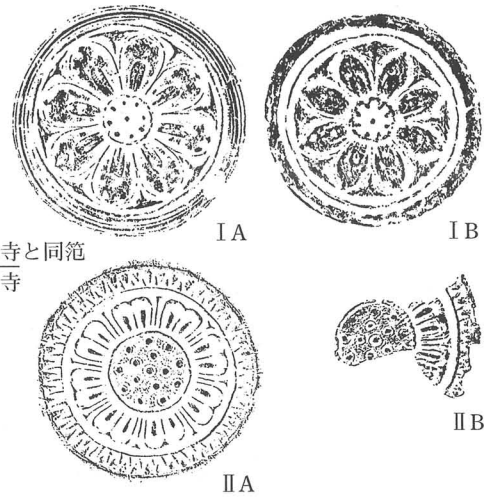
回廊：礎石

【瓦窯】　講堂下で１基、寺域南側で３基

【同笵関係】　百済大寺（B）→四天王寺ＮＭⅡａ２型式

【備考】　丸瓦、平瓦、鴟尾、塼、独尊塼仏、三尊塼仏、

土製如来像、塑像、風鐸、鉄釘



〔107〕

〔108〕

108. 大庭寺遺跡　堺市大庭寺、小代

〔109〕

109. 大園遺跡　高石市西取石５～７丁

〔110〕

110. 堀遺跡　貝塚市堀

〔111〕

111. 加治神前畠中遺跡　貝塚市加治、畠中、石才

主要参考文献

藤澤一夫　1941「摂河泉出土古瓦の研究—編年的様式分類の一試企—」『仏教考古学論叢』東京考古学会

奈良国立博物館　1970『飛鳥白鳳の古瓦』

京都国立博物館　1990『畿内と東国の瓦』

奈良国立文化財研究所　2000『古代瓦研究Ⅰ—飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで—』

香芝市二上山博物館・埋蔵文化財研究会　1997『古代寺院の出現とその背景』
第2分冊資料（西日本編）

能勢町史編纂委員会　1981『能勢町史』第4巻

高槻市史編纂委員会　1973『高槻市史』第1巻・第6巻

大阪府教育委員会　1962『大阪府の文化財』

大阪府　1990『大阪府史』　第2巻　古代編Ⅱ

茨木市役所　1969『茨木市史』

豊中市史編纂委員会　1961『豊中市史』

池田市史編纂委員会　1997『新修　池田市史』第1巻

吹田市役所　1990『吹田市史』第1巻

交野町　1963『交野町史』1

交野市市史編纂委員会　1981『交野市史』

枚方市　1951『枚方市史』

四条畷市史編纂室　1972『四条畷市史』第1巻

大東市教育委員会　1973『大東市史』

寝屋川市役所　1966『寝屋川市誌』

八尾市　1977『八尾市史』文化財編

藤井寺市　1986『藤井寺市史』

柏原市　1969『柏原市史』第1巻

柏原市　1973『柏原市史』第2巻

柏原市　1975『柏原市史』第3・4巻

羽曳野市史編纂委員会　1994『羽曳野市史』第3巻資料編

富田林市史編集委員会　1988『富田林市史』第1巻

狭山町史編纂委員会　1966『狭山町史』2狭山町役場

和泉市役所　1965『和泉市史』第1巻

泉南市　1982『泉南市史』　資料編

岸和田市市史編纂委員会　1996『岸和田市史』　第2巻

竹原　伸仁　1997「北河内地域における古代寺院の諸様相—飛鳥時代後期創建寺院をめぐって—」
『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会

東大阪市教育委員会　2000『東大阪市の寺跡』

東大阪市立郷土博物館　1995『仏教伝来—その後』

大阪市教育委員会　1976『大阪文化誌』　第2巻2号

柏原市歴史資料館、柏原市教育委員会　1985『特別展　柏原の古代寺院址』

柏原市立歴史資料館　1995『河内六寺』

上田睦　1994「渡来氏族の造った河内の寺院」『歴史考古学研究部会 第100回記念　渡来氏族と古代寺院』
帝塚山考古学研究所

吉岡哲　1985「生駒山地南端西麓の古代寺院—河内六寺と竹原井頓宮・智識寺南行宮をめぐって—」
『末永先生米寿記念献呈論文集　坤』末永先生米寿記念会

摂河泉古代寺院研究会「三宅雄一氏所蔵古瓦の調査」　1992『摂河泉会報第19号』

藤井寺市教育委員会　1987『藤井寺市及びその周辺の古代寺院（上・下）』

（財）小谷城郷土館　1997『和泉古瓦譜』　増補版

大阪府　1929『大阪府下史跡名勝天然記念物　第4冊』

堺市教育委員会　1989『土が語る堺』

北野耕平　1989「華ひらく仏教文化」『古代を考える河内飛鳥』吉川弘文館

羽曳野市教育委員会1986『考古遺物にロマンを求めて“三木精一氏収集考古遺物展”』

近藤　康司　1994「和泉の渡来氏族と古代寺院」『歴史考古学研究部会 第100回記念渡来氏族と古代寺院』
帝塚山考古学研究所

堺市役所　1971『堺市史』続編第1巻

泉南市教育委員会『第1回摂河泉古代寺院フォーラム　摂河泉の古代寺院とその周辺』

芥川廃寺　高槻市教育委員会　1985『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要９』
高槻市教育委員会　1992『嶋上遺跡群16』
島谷 稔　1941「摂津芥川廃寺の研究 —高槻上代寺院跡の研究（二）—」『大阪文化誌』第１巻第１号（財）大阪文化財センター
森田克行　1991「芥川廃寺出土の瓦について（報告と若干の予察）」高槻市教育委員会『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要15』
梶原寺跡　名神高速道路内遺跡調査会　1998『梶原瓦窯跡発掘調査報告書』
高槻市教育委員会　1988『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要12』
高槻市教育委員会　1988『高槻市文化財年報ＸⅡ』
高槻市教育委員会　1975『高槻市文化財年報　昭和51年度』
高槻市教育委員会　1976『高槻市文化財年報　昭和52年度』
高槻市教育委員会　1992『高槻市文化財年報　平成４年度』
高槻市教育委員会　1993『高槻市文化財年報　平成５年度』
太田廃寺跡　茨木市教育委員会　1997『平成８年度発掘調査概報』
大阪府教育委員会　1997『総持寺遺跡発掘調査概報』
穂積廃寺　大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター　1996『東奈良Ⅲ・郡遺跡』
茨木市教育委員会　1978『郡遺跡概報—上穂積—』
茨木市教育委員会　1997『平成８年度発掘調査概報』
金寺山廃寺（新免廃寺）　豊中市教育委員会　1993『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　平成４年度』
豊中市教育委員会　1976『豊中市の指定文化財』
安曇寺跡（阿曇寺跡）　（財）大阪市文化財協会　1989『昭和62年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
法円坂廃寺　八木久栄　1972「大極殿院出土の新型軒瓦二点」『難波宮跡研究調査年報』難波宮址顕彰会
四天王寺　（財）大阪市文化財協会　1996『大阪市天王寺区四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告書』
大谷女子大学　1985『四天王寺 —西門とその周辺Ⅱ— 大谷女子大学資料館報告書　第12冊』
大谷女子大学　1988『四天王寺 —引声堂とその周辺地区の調査Ⅰ— 大谷女子大学資料館報告書　第20冊』
大谷女子大学　1989『四天王寺 —引声堂とその周辺地区の調査Ⅱ— 大谷女子大学資料館報告書　第22冊』
網伸也　1997「四天王寺出土瓦の編年的考察」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会
菱田哲郎　1986「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第69巻３号337号　史学研究会
総本山四天王寺　1986『四天王寺　—食堂跡—　食堂再建計画に伴う発掘調査報告書』
百済尼寺跡　（財）大阪市文化財協会　1999『大阪市天王寺区細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』
津守廃寺　（財）大阪市文化財協会　1989『昭和62年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
九頭神廃寺　竹原伸仁　1997「河内・九頭神遺跡（廃寺）と周辺の地割りについて」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第36回）資料』（財）大阪府文化財調査研究センター
（財）枚方市文化財研究調査会　1995『枚方市文化財年報15』
枚方市教育委員会　1997『枚方市埋蔵文化財発掘調査概要　枚方市文化財調査報告　第32集　1996』
西田俊秀・菱田哲郎　1986「九頭神遺跡（第３・第４次調査）」『枚方市文化財年報７』（財）枚方市文化財研究調査会
百済寺跡　（財）枚方市文化財研究調査会　1981『枚方市文化財年報２』
枚方市教育委員会 1971『禁野車塚古墳周濠　鷹塚山遺跡範囲確認特別遺跡百済寺跡調査概要報告』第４輯
大阪府教育委員会・枚方市教育委員会　1967『特別史跡百済寺跡公園』
大阪府教育委員会　1965『河内百済寺跡発掘調査概報』
大阪府教育委員会　1934『百済寺址の調査　大阪府史跡名勝天然記念物調査報告書』第４輯
（財）枚方市文化財研究調査会　1995『枚方市文化財年報15』
百済王神社　1975『百済王神社拝殿修復工事落成記念百済王神社と特別史跡百済寺跡』
高宮廃寺　寝屋川市教育委員会　1980～1985『高宮廃寺発掘調査報告書Ⅰ～Ⅵ　寝屋川市文化財資料』
正法寺跡　大阪府教育委員会　1970『四条畷町・正法寺跡発掘調査概報』
大阪府教育委員会　1995『正法寺跡発掘調査概報Ⅱ』
河内寺跡　上田睦　1994「渡来氏族の造った河内の寺院」『歴史考古学研究部会 第100回記念　渡来氏族と古代寺院』帝塚山考古学研究所
東大阪市教育委員会　1973･1974『河内寺跡』Ⅰ・Ⅱ

若江廃寺　東大阪市遺跡保護調査会　1981『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』
法通寺跡(穂積寺)　(財) 東大阪市文化財協会　1985『法通寺』
西郡廃寺　大阪府教育委員会　1992『萱振遺跡』大阪府文化財報告第39輯
東郷廃寺　八尾市教育委員会　1992『八尾市内平成3年度発掘調査報告書』
渋川廃寺(宝積寺)　山本昭　1983「河内竜華寺と渋川廃寺」『藤沢一夫先生古希記念　古文化論叢』古代を考える会
心合寺跡(大竹廃寺)　八尾市教育委員会　1998『八尾市内平成9年度発掘調査報告書Ⅱ』
教興寺跡(高安寺)　八尾市教育委員会　1992『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ　八尾市文化財報告26』
智識寺跡(太平寺廃寺)　柏原市教育委員会　1996『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1995年度』
家原寺跡(安堂廃寺)　柏原市教育委員会　1993『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1992年度』
鳥坂寺跡(高井田廃寺)　柏原市教育委員会　1986『鳥坂寺―寺域の調査―』
柏原市教育委員会　1987『高井田遺跡Ⅱ』
柏原市教育委員会　1989『高井田遺跡Ⅲ』
柏原市教育委員会　1990『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1989年度』
大阪府教育委員会　1968『河内高井田・鳥坂寺跡』大阪府文化財調査報告書第19輯
山下寺跡(大県南廃寺)　柏原市教育委員会　1985『大県南遺跡―山下寺跡寺域の調査―』
大里寺跡(大県廃寺)　柏原市教育委員会　1985『大県・大県南遺跡』
柏原市教育委員会　1984『柏原市史埋蔵文化財発掘調査概要　1983年度』
土師寺(道明寺)　大阪府教育委員会　1982『土師の里遺跡発掘調査概要Ⅳ』
大阪府教育委員会　1983『土師の里遺跡発掘調査概要Ⅴ』
大阪府教育委員会　1985『土師の里遺跡発掘調査概要ⅩⅡ』
藤井寺市教育委員会　1988『土師寺跡発掘調査概要』
藤井寺市教育委員会　1994『石川流域遺跡群発掘調査報告ⅠⅩ』
衣縫廃寺(井上寺)　藤井寺市教育委員会　1994「Ⅳ国府遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告ⅠⅩ』
藤井利章　1984「河内国府と衣縫廃寺」『龍谷史壇』　第85号　龍谷大学史学会
大阪府教育委員会　1971『国府遺跡発掘調査概要』
船橋廃寺　大阪府教育委員会　1958『河内船橋遺跡出土遺物の研究1』
大阪府教育委員会　1962『河内船橋遺跡出土遺物の研究2』
葛井寺跡　藤井寺市教育委員会　1988『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅲ』
藤井寺市教育委員会　1989『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅳ』
藤井寺市教育委員会　1991『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅵ』
藤井寺市教育委員会　1993『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅷ』
藤井寺市教育委員会　1994『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅸ』
拝志廃寺　大阪府教育委員会　1981『林遺跡発掘調査概要Ⅱ』
大阪府教育委員会　1981『林遺跡発掘調査概要Ⅲ』
大阪府教育委員会　1982『林遺跡発掘調査概要Ⅳ』
大阪府教育委員会　1983『林遺跡発掘調査概要Ⅴ』
大阪府教育委員会　1982『大水川改修に伴う林遺跡発掘調査概要Ⅱ』
大阪府教育委員会　1983『林遺跡発掘調査概要Ⅴ』
野中寺　河内一浩　1997「河内野々上遺跡周辺の寺・館・古道・運河」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第36回）資料』(財) 大阪府文化財調査研究センター
羽曳野市教育委員会　1986『野中寺塔跡発掘調査報告』
羽曳野市教育委員会　1987『地中レーダー探査報告“史跡　野中寺”羽曳野市埋蔵文化財調査報告書15』
羽曳野市教育委員会　1988『古市遺跡群Ⅸ　羽曳野市埋蔵文化財報告書16』
大阪府水道部　1963『史跡野中寺旧伽藍跡の調査』
羽曳野市教育委員会　1986『考古学のロマンを求めて　三木精一収集考古遺物典』
下田池瓦窯跡　羽曳野市教育委員会　1997『古市遺跡群ⅩⅧ　羽曳野市埋蔵文化財調査報告書34』
善正寺(埴生廃寺)　羽曳野市教育委員会　1980『古市遺跡群Ⅱ』
羽曳野市教育委員会　1992『古市遺跡群ⅩⅢ　羽曳野市埋蔵文化財報告書26』
近藤康司他　1988「馬野繁蔵氏寄贈採集資料報告 ―瓦編―」『関西大学考古学等資料室紀要』　第5号

黒山廃寺　（財）大阪文化財センター　1986『真福寺遺跡―調査の概要』
大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター　1997『真福寺遺跡』
丹比廃寺　大阪府教育委員会　1980「南河内郡美原町丹比廃寺発掘調査報告（1）」『節香仙』　第29号
泉福寺　大阪府教育委員会　1993「伝大保廃寺出土の軒瓦」『岡２丁目所在遺跡発掘調査概要報告書』
東野廃寺　狭山市教育委員会　1991『狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書　狭山市文化財報告書４』
狭山市教育委員会　1994『狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書４　狭山市文化財報告書12』
大阪府教育委員会　1990『池尻城発掘調査概要Ⅳ』
五十村廃寺　柏原市教育委員会　1984『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1983年度』
原山廃寺　柏原市教育委員会　1988『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1987年度』
柏原市教育委員会　1994『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1993年度』
片山廃寺　柏原市教育委員会　1983『片山廃寺塔跡発掘調査概報』
柏原市教育委員会　1993『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1992年度』
大阪府教育委員会　1972「玉手山廃寺跡試掘調査概要」『節香仙』　第３号
柏原市教育委員会　1987『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1986年度』
田辺廃寺　大阪府教育委員会　1972『田辺廃寺跡発掘調査概要』
河内国分寺跡　大阪府教育委員会　1970『柏原市国府東条町河内国分寺跡発掘調査概要』
河内国分尼寺　柏原市教育委員会　1987『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1986年度』
柏原市教育委員会　1988『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1987年度』
柏原市教育委員会　1984『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1983年度』
西琳寺（古市寺）　羽曳野市教育委員会　1995『古市遺跡群ⅩⅥ　羽曳野市埋蔵文化財報告書32』
大阪府教育委員会　1959『大阪府埋蔵文化財資料Ⅰ』
大阪府教育委員会　1955『河内西淋寺の研究』
大阪府教育委員会　1978『西淋寺跡発掘調査概要・Ⅰ』
譽田八幡宮神宮寺跡　羽曳野市教育委員会　1980『古市遺跡群Ⅱ』
大阪府教育委員会　1990『大水川改修に伴う発掘調査概要Ⅷ』
新堂廃寺（鳥含寺）　井西貴子　1997「河内新堂廃寺遺跡と東高野街道」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第36回）資料』（財）大阪府文化財調査研究センター
大阪府教育委員会　1961『河内新堂鳥含寺の調査』
大阪府教育委員会　1996『新堂廃寺発掘調査概要』
大阪府教育委員会　1997『新堂廃寺発掘調査概要Ⅱ』
大阪府教育委員会　1999『新堂廃寺発掘調査概要Ⅲ』
富田林市教育委員会　1986『ヲガンジ池瓦窯現地説明会資料』
龍泉寺（石川寺）　宗教法人龍泉寺　1993『龍泉寺　―僧坊院および瓦窯跡群の発掘調査報告書―』
宗教法人龍泉寺　1981『龍泉寺　―坊院跡および瓦窯跡群の発掘調査報告書―』
宗教法人龍泉寺　1982『龍泉寺Ⅱ　―坊院跡および瓦窯跡群の発掘調査報告書―』
大阪府教育委員会　1974『龍泉寺千手院跡発掘調査概要』
山城廃寺　大阪府教育委員会　1982「山城廃寺（一須賀廃寺）出土古瓦」『節香仙』
細井廃寺　大阪府教育委員会　1985『錦織細井廃寺跡発掘調査概要　大阪府文化財概要 1984年度』
塩穴寺跡　堺市教育委員会　1993『堺市文化財調査概要報告　第36冊』
近藤康司　1991「摂河泉の古代寺院跡（三）和泉国大鳥郡塩穴郷塩穴寺」『摂河泉会報16号』摂河泉地域史研究会
華林寺　藤澤一夫　1960「和泉蜂田寺」『和泉志二十一号』和泉文化研究会
和泉土師廃寺（土師観音廃寺）
堺市教育委員会　1986『堺市文化財調査報告　第26集』
堺市教育委員会　1995「土師観音廃寺・日置荘瓦町窯跡群立会調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告第48冊』
堺市教育委員会　1997「付　土師遺跡内の寺院址」『土師遺跡発掘調査報告Ⅱ―百舌鳥綾南廃寺（21街区）51年度』

仏光寺跡	近藤康司　1992「摂河泉の古代寺院跡（二）和泉の国大鳥郡蜂田郷仏光寺」『摂河泉会報第14号』摂河泉地域史研究会
	堺市教育委員会　1982『堺市文化財調査概要報告第10冊』
大野寺跡(土塔)	堺市博物館　1986『堺の文化財（指定文化財編)』
	堺市教育委員会　1999『堺市文化財調査概要報告第80冊』
	堺市教育委員会　1999『大野寺跡』
	堺市博物館　1998『没1250年記念特別展行基生涯・事跡と菩薩信仰』
	堺市教育委員会　1995「大野寺跡発掘調査概要報告書」『堺市文化財調査概要報告　第53冊』
小松里廃寺	岸和田市教育委員会　1986『昭和60年度　発掘調査概要　岸和田市文化財調査概要11』
	岸和田市教育委員会　1995『平成６年度　発掘調査概要　岸和田市文化財調査概要20』
	岸和田市教育委員会　1984『昭和58年度　発掘調査概要　岸和田市文化財調査概要10』
	岸和田市教育委員会　2001『平成11年度　発掘調査概要　岸和田市文化財調査概要26』
信太寺跡(上代観音寺)	和泉市教育委員会　1979『信太寺跡発掘調査概要』
	大阪府教育委員会1982『観音寺遺跡発掘調査報告書』
	藤澤一夫　1976「和泉信太寺と寺名刻印屋瓦」『大阪文化誌２―１』（財）大阪文化財センター
池田寺跡	近藤康司　1992「和泉池田郷　池田寺（一）（四）八葉単弁蓮華文軒丸瓦」『摂河泉会報第14号』
坂本寺跡(禅寂寺)	乾哲也　1991「摂河泉の古代寺院跡（一）和泉の国和泉郡所在禅寂寺（坂本寺)」『摂河泉会報第２号』摂河泉地域史研究会
松尾寺	和泉丘陵遺跡分布状況調査会　1977『和泉丘陵遺跡分布調査報告書―大阪府和泉市所在』
春木廃寺	上田睦　1992「和泉郡掃守郷　春木廃寺（二）八葉単弁蓮華文軒丸瓦」『摂河泉会報第14号』
	大阪府教育委員会　1975「禅寂寺（坂本寺）跡調査概要」『大阪府文化財調査概要1965・66年度』
秦廃寺	大阪府教育委員会　1997『秦廃寺・麻生中下代遺跡発掘調査概要』
	大阪府教育委員会　1978『畠中遺跡発掘調査概要・Ⅰ』
	貝塚市教育委員会　1981『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅲ』
田治米廃寺	岸和田市教育委員会　1999『田治米宮内遺跡』
禅興寺廃寺	泉佐野市教育委員会　1990『平成元年度　泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ』
	泉佐野市教育委員会　1991『平成２年度　泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』
	泉佐野市教育委員会　1993『平成４年度　泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』
	泉佐野市教育委員会　1994『平成５年度　泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』
海会寺跡	泉南市、泉南市教育委員会　1988『第１回律令の華ひらく泉南シンポジウム　蘇る海会寺　―国史跡指定１周年記念―』
	泉南市、泉南市教育委員会　1995『第８回歴史の華ひらく泉南シンポジウム　仏教の需要と古代国家』
	泉南市教育委員会　1987『海会寺　“海会寺遺跡発掘調査報告書”　（３分冊)』
	泉南市教育委員会　1990『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ　泉南市文化財調査報告書　第21集』
	泉南市教育委員会　1995『泉南市文化財年報　Ｎｏ．１』
	泉南市教育委員会　1997『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』
	泉南市教育委員会、大阪府立弥生文化博物館　1997『重要文化財指定　記念シンポジウム　鼎談「激論　海会寺」　発掘速報展　大阪’97』
	文化庁文化財保護部　1987「新指定の文化財」『月刊文化財』　第291号
	仮谷喜一郎　1987「最近発掘された寺院とその遺物　海会寺（大阪府)」『佛教藝術第174号』毎日新聞社
大庭寺遺跡	大阪府教育委員会・大阪文化財センター　1991『大庭寺遺跡Ⅰ』
大園遺跡	大阪府教育委員会　1974『大園遺跡・豊中遺跡範囲確認調査概要―高石市取石・泉大津市豊中所在―』

まとめ

新堂廃寺に最初に調査の鍬が入ってから41年、府営住宅の建て替えに伴う調査を開始してからもすでに9年の歳月が経過した。その間の様々な事象の積み上げは、大阪府の文化財保護行政の一つの縮図といってよい。

本書単色図版の最初に掲げたのは、1961年に新堂廃寺周辺を撮影したものである。新築なった府営富田林住宅のトタン屋根が光り輝いているだろう。戦後という一つの時代が過ぎ去ろうとしていたこのころ、府内各地域の航空写真に同様の光景が見られる。

今ひとつ、我々の手元に一枚の青焼き地形測量図がある。1959年測量の1/300「府営富田林住宅建設敷地平面図」というこの図は、寺域周辺の往時の微地形を余すところなく示していて貴重である。だがそれだけではない。この図には赤鉛筆で縦横に線が引いてあり、当時府教委の技師であった藤澤一夫先生の筆跡で「要絶對的發掘調査地区」、「要保存部分存在予想地区」、「要發掘調査地区」といった言葉とともに、公園として保存された部分989坪の面積計算が書き込まれている。いわゆる「保存協議図」である。府営住宅建設が先行する中での調査であったため、伽藍中心部を公園と宅地に分断する形ではあったが、こうして新堂廃寺は守られた。今にして思えば府営住宅用地だったことが幸いした。ここ十数年の周辺の開発の波を見ると、ここが民有地のままであったならあるいは今頃は、と考えてしまう。

老朽化した住宅の建て替え計画が具体化した1992年度に実施した確認調査は、当委員会としてはさらなる保存を目的としたものであったが、事業者である建築部にとっては記録保存の予備調査的なものであったろう。それでも頭をひねって保存の必要性を書き連ねた確認調査報告書は、幸いにして建築部の理解を得ることができ、伽藍中心部の存在が予測される約2万㎡について当面住棟建設地から外す形で建て替え事業がスタートした。その後の建築部担当者の奔走と住民代表である建て替え対策委員会の協力には心から感謝している。

建て替え事業と併行して、地元富田林市教委とも保存対策について協議を深めていった。97年から市教委に設置された「新堂廃寺等調査指導委員会」の指導のもと5年計画で実施されている範囲確認調査もようやく指定申請できる段階に達した。しかし、史跡指定それ自体結実ではあるが、保護事業の終結ではないことは言うまでもない。新たなスタートである。

本報告書を編むに当たって、本格的な整理作業を開始した1999年度当初に二つの目標を設定した。第一は、創建から廃絶に至る伽藍配置の変遷について、現在までの調査成果を総括すること、第二は、飛鳥時代から奈良時代にかけてのまとまった瓦類について現在望みうる限りの資料化を行いたいということであった。第二の目標は、次項にまとめたが、寺跡だけの資料としてはおおむね達成できたのではないかと思う。

一方、第一の目標はわからないことが多すぎて方針を転換せざるを得なかった。

たとえば創建時の伽藍配置は四天王寺式だと言い切ってよいだろうか。第3章で概略をまとめ

たごとく、創建時に遡る可能性が極めて高い遺構は、中門と南面回廊以外には確認されていないと言ってよい。59・60年度調査で確認された西方建物は白鳳期以降の建築であることは確かであろうが、その下層の確認はまだ不十分である。97・99年度市教委調査で検出された「東方建物」も実体は不明であるし、00年度に確認された塔心礎の据え付け時期は厳しく検証する必要があると考えている。そもそも創建時の回廊幅すら明らかにはなっていないのである。新堂廃寺の伽藍配置ではっきりしていることは、完成した奈良時代の主要伽藍は、南門、中門、塔、金堂、講堂が南北一直線上に並び、塔と金堂の西方に大型の東向き南北棟建物があったということであり、南門と中門を除けば60年度に判明したことと変わりない。しかし、98年度調査における中門と南門の発見はきわめて重要なことで、これで中心伽藍の南北長が約1町であること、96年度調査時発見の東西溝と合わせて、寺域の南北がほぼ2町であることが確定した。確定はしていないが可能性のあることとしては、西方建物と対称の位置になんらかの構造物があった？、回廊が巡っていた？、南門にとりつく築地から連続して何らかの閉塞施設があった？といったことであろう。

したがって、現時点では創建期の伽藍配置の候補として、「四天王寺式」、「飛鳥寺式」の2者を挙げ、今後の検討課題としておくとともに、「再建」後の伽藍配置が「四天王寺式」を基本とし、東西に「礼堂」のような塔・金堂に向き合う建物を配置した「新堂廃寺式」とすることについては、可能性の域を出ていないと指摘するにとどめたい。

伽藍の変遷については、すでに59年度調査の段階で、多量の焼土の存在から創建伽藍の焼失と白鳳期以降の再建の可能性について言及されているが、上記のごとく、創建時の伽藍配置が未確定なことや、南門も含めた全体整備計画が創建当初からあったと考えられること、瓦の型式の連続性などから、どの時点までを創建期といい、いつを再建とするかは、難解な問題である。その意味で、本書では「修造」・「増築」・「大改修」という用語を使用したりもした。この問題については、瓦類の整理を通して、奈良時代に大きな画期を見いだせたのではないかと思っている。

このことはまた、ヲガンジ池瓦窯操業再開の契機と時期に関わる問題をもはらんでおり、この窯の構造的位置づけも含めて、興味深いテーマを提供する。

いずれにしても、寺域の調査成果については市教委の範囲確認調査報告書の刊行が待たれる。59・60年度に確認された遺構も含めて、これまで確認された遺構のすべてを同一の座標上に割り付けることが可能になるわけで、層位的な調査結果とのクロスチェックにより細かな方位、尺度、遺構相互の時期等についての議論が活発化するものと思われる。

また、瓦類の検討については、今回は寺という消費地のみで行わざるを得なかった。今後ヲガンジ池瓦窯跡出土の瓦類が整理され報告されれば、初期の瓦生産から律令体制下の瓦生産まで、一つの寺院を媒介とした価値の高い資料となるであろう。本報告で整理した資料が活用されることを望んでいる。

なお、本書が新堂廃寺の保存と活用の一助となり、また、今後の研究にいささかでも資することができれば幸いである。

2．座談会「新堂廃寺の瓦を総合的に考える」

堀： 最初に個人的な疑問だが、60年度報告の段階では、一度新堂廃寺は燃えて再建されたという図式があった。今回、「修造」と「大改修」という用語に統一しようとしているが、そのへんの新堂廃寺の変遷を大枠で広瀬さん。

広瀬： 前項で大まかにまとめたように、焼失して再建したということを証明するようなものはほとんどないと言える。何らかの形の火災があったことは確かだと思うが、寺全部が燃えたのかどうかははっきりしないので、焼失・再建という風には断定せずに、「修造」と「大改修」でまとめてみたいと思った。

井西： 補足になるが、要するに2時期なのか、3時期なのかということが一つ問題になると思う。遺構の方から3時期と見る向きがあったが、瓦の出土量から見ると無理がある。例えば白鳳期に塔、金堂、講堂を再建し、同時に西にも東にも瓦葺き建物を建てたと言うほどは白鳳時代の瓦の出土量が多くない。創建の伽藍がどこまでなのかということについては、白鳳時代まで連綿と（「増築」という言葉を使いたいが）建て続けられていたということで、もし画期を求めるとすれば、焼失（したための「建て替え」）なのか「大改修」なのか、状況はよくわからないが、天平期に「再建」もしくは「大改修」の時期が来るだろうという風に考えている。

堀： 確かに、飛鳥時代の明確な遺構というのも（中門・回廊以外には）ない。白鳳時代ないし今見ている遺構が飛鳥以来のものなのか、その辺が問題。では、「増築」というのは東方建物、西方建物のことか。

広瀬： 西方建物が建てられる時期までを創建期と考えれば、その時期に中心伽藍は回廊で閉じたような形になっていればいいのかな。「大改修」の時期は奈良時代になってから。遺構はよくわからないが瓦の量から見てそういう風に言えるという気はする。

梶原： 白鳳時代の瓦は「建て直し」というほどは多くないということか。

井西： そのとおり。

堀： その辺はまた最後に改めてということで。これまで新堂廃寺からは軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦、道具瓦まで各種大量に出ている訳だが、それぞれ個別に検討してきたので、今日の座談会では組み合わせをメインに考えていきたい。まず井西さん、軒丸瓦を時代ごとに。

井西： まず飛鳥時代はⅠA04型式から5笵ある。ⅠA04が飛鳥寺「星組」の流れを汲む角端点珠の瓦で、一番古く位置付けられる。編年は紋様と技法で試みたが、ⅠA04の技法の流れをⅠA05が汲んでいるので次に続くのだろう。ⅠA03、02型式は技法的にはⅠA04型式よりも後出すると考えている。03型式を模して02型式を作笵したのだろう。

白鳳時代になると、山田寺式のⅡA06に黒色瓦があって、それが瓦当紋様の型式では一番古いと考えられる。そのあと川原寺式のⅡA09型式が続いて、次にⅡA10型式になる。以前はⅡA10、11型式と分けていたが同笵だということがわかった。中房と外区が分かれていないⅡA10型式のオリジナルは一見白鳳時代の瓦で技法も歯車接続をするのだが、色調・胎土が平城宮式6667系の唐草紋軒平瓦（ⅣA04）と酷似しているので奈良時代に下ると考えられる。中房を差し替えた笵傷が一番少ないⅡA10型式②の中に平城宮式ⅣA12の1段階と同じ黒色瓦があって、回廊の「修造」用だろうと梶原君が考察している。その後はⅣA12も、ⅡA10の③・④も横置式一本造りになっていくという状況だ。

堀： ⅡA07型式が出てこなかったが、ⅡA06型式の次にそれを模して作笵しているということでいいのか。

井西： そう思われる。

梶原： ⅡA07は搬入ということではなく、ヲガンジ池瓦窯で製作している？

井西： ⅡA06の黒色瓦と笵が搬入され、ヲガンジ池では笵と工人の移動により黒色ではない固有の色調・胎土をもったⅡA06が焼かれる。その笵を模してⅡA07の笵が作られたのだろうと思う。

梶原： そうすると川原寺式（ⅡA10）や平城宮式のⅣA12と同じような様相を呈しているということがいえる。

堀： それではまず、飛鳥時代から見ていきたい。軒丸瓦は「星組」が作った04とその系統の05、それから、ヲガンジ池で作っていた03、02の中房周囲圏線タイプといった笵がある訳だが、飛鳥時代なので当然軒平瓦

というのはない？

広瀬： 端部に沈線をヘラ書きしたもの、沈線を手彫りしたものが一例ずつ以前から知られているが、四天王寺と同じような軒平瓦と考えてよいだろう。それと、非常に厚みのあるものがあって軒平瓦ではないかと考えているのもある。

堀： この段階では厚みのあるものに朱線が入っているものは？

広瀬： 朱線はない。

堀： 話が戻るが、05の軒丸瓦も「星組」の人たちが作ったということになるのか。

井西： あくまで推測だが、新堂廃寺の場合「修造」とか「大改修」といった画期の段階で笵と工人が移動してきている。それが白鳳時代と天平期になるので、そこから考えると創建期には「星組」の工人がつくった04の製品と05の笵が搬入されている可能性があるのではないか。05は製作技法と色調、胎土からみてヲガンジ池瓦窯の製品だろう。

堀： 「星組」から習った人たちが05の笵をもってきていると。「星組」がきているとは考えられないのか。

井西： 「星組」の工人は来ていないと思う。ただ、「星組」の工人を掌握しているところがあるとすれば、そこと新堂廃寺の造営主体に関係があるだろうということは推測できるが、製作技術から「星組」がヲガンジ池に入っているということは言えない。

広瀬： ＩＡ04の製品だけが「星組」のものとして入ってきている。

堀： その辺は岩戸さんが何か言いたいことがあるのでは？鴟尾の最古段階のものというのは「星組」の手になるということだが。

岩戸： 古手の鴟尾の一群の中でも最古段階の、私がＩ型式としたものは青灰色でいわゆる「星組」だ。他にも技術的に古いものが出ているが、それらとは焼きや胎土が全然違う。そういう意味ではヲガンジ池で焼いていないのは確実で、搬入に違いない。「星組」の工人が他に窯をもっていたのか、どこから運んできたのかはわからないが、軒丸瓦と同じ動きをするのではないかと思っている。

堀： あるいは摂津まで来ていた「星組」から来ていてもいい訳か。

岩戸： 推測になるが（そういうこともあり得る）。

堀： 確かにあれ（Ｉ型式）はヲガンジ池では焼いてないだろう。

梶原： 鴟尾が来ているということはそんなに遠くから運んだということではないのだろうか。

堀： いや、それは高丘から四天王寺まで行ってるのだから、運べないわけではない。

広瀬： もっと古く、埴輪の移動なんか考えても、大きな埴輪があっちこっち行ってることを考えれば運ぶ手段はあったと思う。問題は技術者と土、土作りという点で初期の鴟尾は「星組」のいた場所でしかたぶん作れないから、何が何でもそこから運んでくるということを考えたと思う。

岩戸： あり得ると思う。

堀： あの薄い鴟尾は習ったからといってすぐ作れるわけではないから、「星組」がいたところから運んできたというのは確かだろう。ただ、「星組」がどこまで来てるのか。製品だけ来たと考えた場合、新堂廃寺の創建プロジェクトを立ち上げるための最初の技術伝習というのはどの辺で行われるのだろうか。03とか02の紋様系統が斑鳩とか片岡王寺から来るということ、「星組」の援助があるということは、蘇我氏系のところで新堂廃寺は始まっているんじゃないかなと思っているのだが。

井西： 確かに03、02というのは斑鳩、片岡王寺の瓦当紋様だが。製作技法は全然違うし、その当時の造営主体が直接蘇我氏と関係があるのか近しい関係にあるのかというのは難しい。

堀： 創建期の平・丸瓦はどうだろうか。飛鳥寺では星組の平・丸瓦がわかっていたと思うが。

井西： 04型式については有段式を接続するので、飛鳥寺と同じ。

梶原： 分割指標は？

井西： 分割界線だった。

梶原： それだと花組だが。

堀： 分割界点もあったのではなかったか？

井西： 界点はない。すべて分割界線。

梶原： 花組、星組というのは、飛鳥の終わりの頃までそれぞれの技術系譜を維持していたという説があるが、新堂廃寺の場合は必ずしもそうではないということか。

井西：（技術系譜は）崩れてきている。有段式で接続するのは星組の技術系譜だが。

堀：ある程度星組の資料がまとまって出ているなら、星組の工人の技術指導も考えられるが、出土量が少ないのであれば、今想定しているように鴟尾と04だけが持ち込まれたと考えられるかもしれない。

梶原：胎土・焼成では04と丸・平は一式運ばれていると考えていい？

井西：ヲガンジ池では有段式は出ていないから。

梶原：ヲガンジ池でというのではなく、色調・胎土だけで考えてもそうか？

井西：04の組み合う瓦は一式胎土・色調が違うと考えていいと思う。

岩戸：鴟尾も。

堀：04と鴟尾ね。

　では白鳳時代に入るが、いわゆる山田寺式の登場と川原寺式。ここでも色調黒色のⅡA06が搬入される。06の導入によって、増築がはじまるということで、軒平瓦ではどうか。

広瀬：重弧紋軒平瓦は3型式5種に分類した。ⅡA06の黒色の一群に組み合うのはⅡB02・05両型式の黒色の一群であることはすぐわかった。ⅡB01はこれより後出と考えられるので、川原寺式ⅡA09にはこれが組み合うだろう。ⅡA06の新段階のものと、ⅡA07に組み合うのは、状況としてはⅡB02・05の両方あるいはいずれかと推定できるが確証はない。最も長く作り続けられたⅡB01がⅡA06・07に組み合わないということも言い切れない。逆にⅡB02・05の中に川原寺式ⅡA09に組み合うものがある可能性もある。白鳳時代の軒丸瓦は製作時期が重なっている可能性があり、重弧紋軒平瓦との組合せはなおのことわかりにくい。川原寺系ⅡA10は奈良時代に下ることが明らかになったから、重弧紋は組み合わない。考察の中ではⅡA10①と胎土・色調が共通する均斉唐草のⅣB04が組み合うだろうとした。

堀：続けて丸・平を梶原さんから。消去法で決められるのかな？

　端面叩きの平瓦があるが、あれは橿木原遺跡の資料があるので、新堂でも白鳳時代でいい？

梶原：白鳳は白鳳だろう。甘い焼きの無段式の丸瓦と組み合うのではないかと考えている。

井西：粘土紐巻き上げで製作された丸瓦の胎土は山田寺式と似ている。白鳳の有段式は確認されていないので、山田寺式にも無段式が接続すると思う。

堀：例えば近江も白鳳期創建の寺院が多いが、主流は無段式だ。地方では無段式が主流なのかな？新堂を地方と言っていいかどうかもあるが。

梶原：飛鳥に話を戻すが、04だけが有段式で他は無段式なので、ⅡA06・07を補修と考えれば、無段式になるのも当然かなという気がしないでもない。

堀：鴟尾から見た白鳳時代というのは？

岩戸：飛鳥・白鳳の中で鴟尾は収まる。その中で技術的には2群に分かれる。創建期の星組が最初で、その残りの群と新段階のものとは確実に技術的な断絶があるのだが、鴟尾で細かい年代をいうのは無理なので、7世紀前半と後半に分けた。後半の中には川原寺式と胎土が似たものがあるが、これしか要素がないので、その話に入るのは無理がある。

堀：7世紀前半というのは、薄い鴟尾でも白鳳時代に入るものもあるのか？軒丸瓦では飛鳥時代には、星組とそれ以外という話があったが、鴟尾ではその辺はどうか？

岩戸：星組の搬入品をふくめて、薄手の鴟尾が7個体あり、出土量の多さから、薄手の鴟尾が白鳳に入ってくる可能性もあるのかなという気もする。

広瀬：金堂・講堂・中門に鴟尾があるとすれば、6個体なら問題ないのでは？薄さからいうと飛鳥の鴟尾でもいいのでは？

岩戸：市教委資料にも薄手の鴟尾があり、個体数は確実に増えるだろうと思う。それならば6個体以上の鴟尾が確認されるということになるが。

堀：時代でいくと軒丸瓦と鴟尾はうまく組み合わないということか。

岩戸：鴟尾では、薄い段階と厚い段階でしかわからない。

堀：一応白鳳時代まで説明してもらったが。いよいよ大改修の時期に入りたい。軒丸瓦はⅡA10①が奈良時代に下がることが判明したということで、②～④に至るまで平城宮式ⅣA12と同じ時期でよい？

井西：そう考えてよい。

堀：大改修は平城宮式の時期に並行するということで、軒平瓦は？

広瀬：ⅡA10①を奈良時代に下るとしたのは、軒平瓦の検討から。もともと蓮子が見えないほど笵はへたっていたから、オリジナルはあるいは新堂以外の場所で白鳳期に使われていたのかも。軒平瓦で胎土・色調が非常に似ているのがⅣB04（6667系）で、重弧紋には似たものはなく、また重弧紋で奈良時代に製作されたものはない。

堀：そうすると②以降は6664系と組み合う？

広瀬：そうだと思うが、軒丸瓦は製作技法でも笵傷に対応していくのに対して軒平瓦でどうなるのかは検討しきれていない。

堀：ザッと見た感じでは、6664系の軒平瓦は安定した技術で製作されていると思うが。

広瀬：数点段顎があるのが気になる。

堀：色調・胎土ではどうか？

広瀬：どっちかというとⅣB04と類似する。もしかしたら段顎もⅡA10①と組み合うかもしれない。

堀：興福寺式はどうなるのか。

広瀬：あれだけだから。一点しかないので・・・その後1点も出ていない。

堀：あれこそ搬入品と考えられる。

広瀬：屋根に葺かれていたと見ていいのかどうか。搬入前に没になった見本の可能性もある。

堀：丸・平瓦をずいぶん詳細に検討されていたので、それについて梶原さんから。

梶原：丸瓦でよくわかるのだが、南門瓦落ちで出土した丸瓦と他で出土した丸瓦は形が違う、また平瓦のタタキでもその違いがでてきたので、作り分けではないか。時期差ととれなくもないが、大きく時期差があるわけではないので、作り分けだと思う。

堀：所用の場所によって作り分けがされているということか。南門では普通の平瓦を軒先に使っている？

広瀬：朱線が入っているのがあるのでそうだと思う。

堀：他の平瓦との違いは？

広瀬：違いというのは、なかったと思うが。

堀：大改修時に南門の建設はメインだと思うが、軒瓦がないというのはどうも・・・。

広瀬：軒丸瓦・軒平瓦を葺かないのは建物の構造にはあまり関係ないだろうと思う。柱径が25cm程度と細いので最初は重量の問題かと考えたが、軒瓦のあるなしでそう重量が変わるわけでもなし。門としては華奢だと思う。

堀：瓦の落ち方から隅棟がある建物と見ていい？

岩戸：倒れ方にもよるが、熨斗がたくさんあったから、屋根の隅が落ちたということであればそうだろうが・・。隅棟があるとしたら入母屋か寄せ棟だが、切り妻よりは重量がかかるだろう。

堀：あれくらいの門では切り妻と考えたいようにも思うが・・・。

広瀬：あの柱径から見ると、あることに意味があったというような門なのでは？宝幢遺構も確認されていることだし、落慶法要をしたのだろうから、南門は必要だったのだろう。落慶法要の段階ではもう右肩あがりの状況ではなかったのでは？

堀：ものを贅沢に使う状況ではなかったということだろうか。

岩戸：鴟尾を比較すると7世紀を通じて紋様を省略しないのは珍しい。畿内でもかなり崩れが見られるものだ。それにくらべると鬼瓦については笵さえ新調しない、という時期に入っていくのでは。

堀：数はたくさんあるが。

岩戸：必要数は作るだろう。

堀：軒丸瓦・軒平瓦は中央系だが、鬼瓦は手が及ばなかったのか。

梶原：奈良の瓦は伽藍の北からも出土しているし、そう強調するほど力がなくなったわけではないだろう。

岩戸：瓦製作を全体で考えての情報を集めてくる力がなくなるということかもしれない。

井西：北側の集落もかなり大規模だし、出土遺物を見ても他の集落と比べて見劣りするものではない。

堀：奈良時代の鴟尾が存在する可能性は？。

岩戸：南門掘方出土の復古鴟尾が、頭部の幅と腹部の幅との比でいけば奈良に入る可能性があるが、南門の掘方に入っていたことと、紋様構成から奈良とは考えにくい。

広瀬：天平期には寺造りは終わりということで、一時にかける財力としては南門に手を回さなかった可能性もあるのでは？経営氏族が傾いているわけではないと

は思う。突飛な話だが、（石川郡衙と考えられる）中野遺跡に存在する中野廃寺が郡の尼寺で新堂廃寺が郡寺になった可能性もあるのでは。国分寺における国家の援助と郡寺では違い、郡寺はある程度在地の力が必要だったのではないかとも思う。

岩戸：南門の規模と鬼瓦に関しては、軒丸瓦・軒平瓦とはリンクしないと思う。

梶原：直接それらを新堂廃寺の造営氏族に持っていくのは無理があるのではないかと思うが、基本的に奈良時代はシステマチックなものが進んだ時代で、必要のあるものを必要なだけ作る時代ではないかとみている。必要のない労力はかけない。そういう意味では中央系の紋様を導入しているから財力があって、導入していないから羽振りが悪いのではなく、中央に頼らなくてもたとえば鬼瓦など自分で作る力があったという見方もある。南門の規模にしてもそれが直接力に反映するのではなく、別に南門を大きく作る意味がなかったとも考えられ、必要に応じた省力化と考えたい。北東部の集落については、維持・管理施設と捉えられているが、建物などがかなり大きいので、単にそれだけのものではなく、この地域ではこの時期まで力を持っていた集落なのではないかという気もする。

井西：「寺」と書かれた墨書土器や舞楽装束の帯金具などが出土しているので、寺院と密接に関係する集落だとは思うが。

堀：時期的にも寺と関係する。

岩戸：新堂のように、軒瓦が中央系で鬼瓦が中央系でないという例は他の寺院ではあまり確認されない。

梶原：逆はよくあるのだが。鬼の方は中央の意匠をひっぱるが軒は在地の紋様を使用するという。

堀：時間も押してきたので、まとめたいと思う。まとめにくいが・・・

だいたい飛鳥創建期と白鳳の増築改修期、奈良時代の大改修期がある。その時々に造営氏族がどう変わったのか等の問題はあるが、創建期には星組の技術導入と製品の搬入で事業が立ち上がる。山田寺式の時期は時代に応じた新しい紋様を携えて製品の搬入・工人の応援があって増築事業が立ち上がる。さらに大改修期には平城宮で使われている紋様とほとんど違わないハイレベルな軒瓦を導入しつつ、また組織の面で新しい仕組みを取り入れて事業が興されている。在地の工人たちがずっと新堂にいたのか断絶するのかはこれからの検討課題としたい。新堂廃寺の場合は、遺構の残りが必ずしもよくないので検討するのはむずかしいとは思うが、富田林市教委の報告書（伽藍配置）とあわせて検討する必要があると思われる。その結果、その辺もおいおい明らかになっていくことだろう。

お疲れさまでした。

座談会参加者　堀大輔（司会）・梶原義実・岩戸晶子・広瀬雅信・井西貴子・八柄あさ代・東英美子・中村祐子・西村香織・矢倉嘉人・藤丸祐子

本座談会は、何度かの検討会、個別討議を経て各人の考察が完成し、それを読み合わせた後に行ったもので、往々にして軒丸瓦中心に偏りがちな瓦研究にあって、新堂廃寺という一つの遺跡を媒体に瓦類を総合的に捉えようとする試みであった。論議は2時間以上に及んだ。話題は多岐に渡り、新たな視点、問題点もいくつか抽出されたが、各々の今後の課題として受け止めることができたと思う。また、討論参加者のみならず、調査員・補助員諸君にとっていささかなりとも成長の糧となったとすれば、望外のことである。この記録をもって瓦のまとめにかえたい。参加者のさらなる活躍を祈念するものである。

（編者）

報告書抄録

ふりがな	しんどうはいじ
書名	新堂廃寺
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０００－１
編著者名	井西貴子・広瀬雅信・堀大輔・岩戸晶子・栄原永遠男・梶原義実
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL 06-6941-0351
発行年月日	2001年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新堂廃寺 （しんどうはいじ）	富田林市 （とんだばやしし） 緑ヶ丘町 （みどりがおかちょう）	27214	17	34° 30′ 27″	135° 36′ 15″	1995年４月 ～ 1996年３月 1998年７月 ～ 1999年３月	5400㎡ 3800㎡	府営住宅 建て替え

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新堂廃寺	寺院跡 集落	飛鳥時代 ～ 奈良時代	南門、中門、回廊、築地、宝幢遺構・区画溝	土師器・須恵器・瓦類	新堂廃寺出土瓦集成
		奈良時代 ～ 平安時代	掘立柱建物・溝・塀	土師器・須恵器・瓦器・瓦類	

Research Report on Buried Cultural Property in Osaka Prefecture 2000-1

Shindou-Haiji

- Report on the Excavation prior to Reconstruction
of
Tondabayashi-Midorigaoka Prefectural Apartments-

English Summary

2001.3

Osaka Prefecture Board of Education

CONTENTS

Preface

Explanatory Notes

Introductory Remarks

Chapter I Location and Surroundings of *Shindou-Haiji* ····· 3

1. Location and Natural Environments ····· 3

2. Historical Background and Adjoining Sites ····· 3

Chapter II Method of the Excavation ····· 6

Chapter III Outline of the Excavation ····· 9

1. Preliminary Research in 1959 (Arrangement of Buildings within Corridor) ····· 9

2. Research in 1960 (Main Buildings Surrounded with Corridor) ····· 13

3. Research in 1991 (Territory of the Temple) ····· 17

4. Research in 1995 (Northeast Area outside of Corridor) ····· 18

5. Research (96067) in 1996 (East Area outside of Corridor) ····· 18

6. Research (98021) in 1998 (South Gate and South Area outside of Corridor) ····· 18

7. Research (00031) in 2000 (North Area outside of Corridor) ····· 51

Chapter IV Roof Tiles

1. Types of Round Eave Tiles and Flat Eave Tiles ····· 58

2. Round Eave Tiles ····· 60

3. Flat Eave Tiles ····· 84

4. Round Tiles ····· 86

5. Flat Tiles ····· 102

6. Constructional Roof Tiles ····· 104

Chapter V Studies

1. The Arrangement of *Go-Village* in *Ishikawa-Gun-County, Kawachi Province* (SAKAEHARA Towao)

2. The Lineage and Movement of the Roof Tile Artisans Group for *Shindou-Haiji* (INISHI Takako)

3. The Way of Making Round Eave Tiles in One Piece with Horizontal Stand for Shape Formation (INISHI Takako)

4. The Way of Making Concentric Circle Pattern on the Brim of Round Eave Tiles of *Yamadadera-Temple-Style* (HORI Daisuke)

5. Flat Roof Tiles with Concentric Arc Pattern (HIROSE Masanobu)

6. Roof Tile Artisans Group of *Sindou-Haiji* in *Nara* Era (KAJIWARA Yoshimitsu)

7. *Shibi* Pieces Found from the Post Holes of the South Gate and Its Reconstruction (IWATO Akiko)

8. A View of *Sindou-Haiji* Based on the Investigation of *Shibi* and *Onigawara* (IWATO Akiko)

9. Reconstruction of *Shibi* (Studio 33)

Appendix: Ancient Temples in Osaka

Extract from the Report 263

Conclusion

FIGURES

1 Arrangement of Grids in 1998 (98021)

2 Surroundings of *Sindou-Haiji*

3 Location of Main Buildings

4~7 Roof Tiles Found in 1959

8~51 Structural Remains and Findings in 1998

52 Structural Remains and Findings in 2000

53 Models of Eave Tile Endpiece Mold and the Way of Connecting an Endpiece to a Round Tile

54~71 Round Eave Tiles

72~82 Flat Eave Tiles

83・84 Round Tiles

85 The Flat Tile with Line Written with a Spatula

86~88 Flat Tiles

89~98 Roof Tiles at Area A and C

99~103 Filler Tiles and Ridge Tiles

104 *Sen* Tiles

105 Tiles

106 11Types of Round Eave Tiles, and the Way of Connecting to Round Tiles

107 Introductory Remarks on Angles (A to C) of Round Eave Tiles

108 Imaginable Form of a Horizontal Stand for Making Round Eave Tiles in One Piece

109 Traces of Brim Patterns with a Wave Shaped Tool

110 Process of Making a Flat Roof Tile with Concentric Arc Pattern by a Cylindrical Pail

111 Process of Making a Flat Roof Tile with Concentric Arc Pattern by a Top-Cut Conical Pail

112 Introductory Remarks on Round Roof Tiles

113 Ink Squeezes of the Inside of Round Roof Tiles

114 Ink Squeezes of the Outside of Flat Roof Tiles

115 Introductory Remarks on Flat Roof Tiles

116 *Shibi* Pieces Found from the Inside of the Post Holes of South Gate

117 Process of Making a *Shibi*

118 *Shibi* Reconstructed to Its Original State

119 Measurements of *Shibi*

120 *Onigawara* Reconstructed to Its Original State

PLATES

1 Views of *Shindou-Haiji* from the Sky (in 1961)

2~19 Structural Remains in the Researches through 1959 to 2000

20~30 Potteries Found in 1998

31~35 Potteries and Stone Implements Found in 1998

36~42 Round Eave Tiles

43~48 Flat Eave Tiles

49~55 Tiles Found from the South Gate in 1998

56~62 Round and Flat Tiles and Filler Tiles in 1998

63~68 *Shibi*, *Sumikibuta-Gawara* (a Cover Tile of Hip Rafter) and *Onigawara*

69~71 Relics Found in 1959 (Being Kept at Osaka University)

Sindou-Haiji

Shindou-Haiji is an ancient temple site located in Midorigaoka-Cho, Tondabayashi-City, Osaka, Japan. It was discovered in 1930s and excavated in 1959 and 1960. Many of roof tiles, which have the character of *Paekche-Style,* were found there. And it became clear that this temple was one of the oldest temples in Japan, constructed in *Asuka* era (at the beginning of the 7th century).

There is *Woganji-Ike-Gayo* (roof tile kilns) near the place. At that time artisans had made roof tiles for *Shindou-Haiji* through *Asuka* and *Nara* era. *Okameishi-Kofun* (a mounded tomb in the end of the 7th century) is situated at the top of the hill in the northwest of this temple site. Around a stone coffin many of flat roof tiles are piled up. It is presumed to be a tumulus of the lineal group of the builders of *Shindou-Haiji*, because those roof tiles are similar to those of this temple. Prof. FUJISAWA Kazuo regards this temple as *Woganji-Temple,* for it corresponds to geographical names *"Woganji"* in Puyo, Paekche, pointing out the possibility that this temple might have been named after *Woganji-Temple* in Paekche.

In this report, dealing with the researches in 1998 and as for roof tiles, we will focus on findings from 1959 onward. It will help us to have better understanding of the tiles.

1. Structural Remains

Some building remains of the temple compound of *Shindou-Haiji* are revealed. The researches in 1959 and 1960 proved that a foundation platform of a Pagoda, a Golden Hall and a Lecture Hall were lined up from south to north. And at the west of the Pagoda and the Golden Hall, a large embedded-pillar building with long north to south axis was also found. These remains are not from the buildings of the oldest time but from those of the following era, that is, after

Hakuhou era (at the end of the 7th century). In 1995, we surveyed a settlement site in *Nara* era at the north of the temple. It is obvious that people operating temple had lived there because ink-inscribed pottery pieces with a Chinese character "*Temple*" were found. And was also discovered a ditch running from east to west, which might indicate a north end of the territory of this temple.

In 1998, a Middle Gate and a Corridor connecting with it, a South Gate and a tamped earth wall with roof joining to it, and pit holes for flagpoles were found. It was certified that the Middle Gate and the Corridor of south side were built in *Asuka* era, and the temple compound was situated facing south at first. We cannot say, however, whether the Corridor surrounding compounds were there from the beginning or not. The South Gate and the tamped earth wall with roof were built in *Nara* era. Before building the South Gate, a large ditch from east to west had been dug. It shows the outline of the temple territory.

The South Gate was posthole-type building with four (from east to west) and three (from north to south) posts. At the south of the South Gate, six postholes probably for erecting flagpoles of Buddhist ritual banners were found. Two gutters paralleled each other from south to north between the South Gate and the Middle Gate. This might have been a *Sando* (an alley for walking in a temple). The discovery of the two gates revealed the temple compound was facing south. And it could be estimated the distance of the temple compound was about 108 meters from north to south, and the length of the territory was approximately 216 meters.

2. Relics

Main findings at *Sindou-Haiji* are roof tiles. Many roof tiles, dating through *Asuka* and *Nara* era, were found.

At the beginning, simple lotus petal design of *Asukadera-Hosigumi-Group*, of *Paekche-Style* was used in *Sindou-Haiji*. Round tile with ⅠA04 type has a lip on the butt end for pipe joint. Those of ⅠA02 and ⅠA03 type, of *Old-Silla-Style*, have slightly tapering at butt end. ⅠA05 type is quite similar to round eave tiles of *Sitennouji-Temple,* and a rafter end tile ⅠC01 type was made with the same mold of *Asukadera-Temple*.

In the latter half of the 7th century, round eave tiles of ⅡA06, ⅡA07 and ⅡA09 type were used. The former two types have single lotus petal design with smaller one inside, *Yamadadera-Temple-Style*. The latter one, ⅡA09 type, has double lotus petal design of *Kawaharadera-Temple-Style*. Flat eave tiles have four-concentric-arc pattern.

In *Nara* era (through almost all of 8th century), they mainly used round eave tiles of *Heijokyu-Palace-Style,* ⅣA12 type with compound lotus petal design, and ⅣB04 type flat eave tiles with symmetrical intertwining floral design. But some ⅡA10 type round eave tiles have been made, which imitated ⅡA09 type. A flat roof tile with incised *"Ohkuni-Go-Village, Ishikawa-Gun-County"* was found.

There were discovered many constructional roof tiles: *Onigawara* (a terminal ridge-end tile of Demon-Mask), *Shibi* (a curved fish-tail-shaped roof tile), and *Sen* tile. Some *Shibi* pieces have the oldest pattern of *Asukadera-Temple-Style*, and one piece was incised lines.

Besides roof tiles, other relics were also discovered: *Hajiki* (a earthenware) pieces, *Sueki* (a stoneware) pieces, inkstones with a flat and round surface, Buddha images in relief on a tile made in a mold, pieces of clay statuary, metal belt fittings, a stone ornament of leather belt, iron axes, nails, and stone tools in *Jomon* and *Yayoi* era.

3. Studies

This report includes eight studies.

Prof. SAKAEHARA Towao, Osaka City University, used the flat roof tile of incised to examine a location of *Ohkuni-Go-Village* in *Ishikawa-Gun-County*, *Kawachi Province* under the control of *Ritsuryo-System*.

INISHI Takako, Osaka Prefecture Board of Education, referred to introduction of the technique of making roof tiles, movements of artisans group or influx of eave-tile-endpiece molds and products. And pursuits relations among the lineal group built up this temple, a group of roof tile artisans, and Central Power.

HORI Daisuke, Kyoto City Culture and Citizens Affairs Bureau, wrote about the way of making three-concentric-circle pattern on a brim of *Yamadadera-Temple-Style* round eave tiles. This pattern was carved with a wave shaped tool on a rotating table. This technique is unique to *Sindou-Haiji*.

HIROSE Masanobu, Osaka Prefecture Board of Education, considers flat roof tiles with four-concentric-arc pattern carefully. He thought out about techniques of making flat roof tiles, and seriates those roof tiles relatively with others of *Shindou-Haiji* and shows the combination of ⅡA06, ⅡA07 and ⅡA09 type round eave tiles and those flat eave tiles.

KAZIWARA Yoshimitsu, Kyoto University Graduate School, deals with round tiles and flat tiles discovered collectively close to the South Gate. He compared those tiles to those of the Corridor or the tamped-earth wall with roof and argued that roof tiles were supplied from a few workshops and there were some production units for every building of the temple, although in the same workshop.

IWATO Akiko, Kyoto University Graduate School, examined *Shibi* pieces found from the postholes of the South Gate closely and estimated the unique process of its formation. She shows the basis for restoration to its original state.

And she also tried to classify and seriate *Shibi* and *Onigawara*, and states that the artisans belonged to *Asukadera-Hoshigumi-Group* related to production of *Shibi* for *Shindou-Haiji* in *Asuka* era, so that since then the artisans kept highly the level of technique, those of *Onigawara*, on the contrary, became poor in *Nara* era. She thinks over the causes of it in terms of social political background and getting independent of every unit in roof tile artisans group.

4. Appendix: Ancient Temples in Osaka

It lists basic data as to ancient temples built through *Asuka* to *Nara* era in Osaka—the location and the old administrative division, the birth date of the temple, the arrangement of buildings in temple, neighboring settlements or tumulus, relics. And we summarized aspects at every old division in *Settsu, Kawachi,* and *Izumi* in Osaka. This appendix was written by NISHIMURA Kaori, YAGURA Yoshihito, NAKAMURA Yuko.

Translated by NISHIMURA Kaori

大阪府埋蔵文化財調査報告 2000－1

新　堂　廢　寺

－府營　富田林緑ヶ丘住宅　개축에 따른 조사－

한국어 요지

2001.3

大阪府教育委員會

1. 머리말

新堂廢寺는 大阪府 富田林市 綠ヶ丘(미도리가오카)町에 위치 하고 있는 古代寺院遺蹟이다. 이 사지는 1930년에 발견되었으며 1959년과 1960년에 실시된 발굴조사 결과, 百濟樣式의 기와가 다량으로 출토 되어 7세기초 飛鳥時代에 창건된 일본 초창기 사원의 하나인 것으로 판명되었다.

사지 부근에는 ヲガンジ(오간지)池瓦窯址가 있어 飛鳥時代부터 奈良時代까지 新堂廢寺의 기와를 생산한 것으로 알려져 있다. 또한 寺域 북서 구릉 위에 위치한 終末期 古墳인 お龜石(오카메이시)古墳은 석관 外周에 新堂廢寺에 사용된 기와와 동일한 암키와가 쌓여 있어 사원을 건립한 氏族의 고분으로 추정되고 있다.

藤澤一夫는 ヲガンジ라는 지명에서 이 사지의 寺名을 「烏含寺」로 추정하고 백제 北岳烏含寺의 사명이 전래되었을 가능성을 지적하였다.

본 보고서는 1989년의 조사결과를 중심으로 보고하였으며, 특히 기와류에 대해서는 1959년 이후 조사에 의해 출토된 유물을 정리하여 현단계에서 판명된 것을 보고하였다.

2. 遺構

지금까지 新堂廢寺에서는 伽藍을 구성한 많은 건물유구가 밝혀졌다. 1959·1960년 조사에서는 남북선상으로 늘어선 탑·금당·강당으로 생각되는 基壇遺構와 탑과 금당의 서쪽에서는 대형 南北棟建物이 존재하였던 것을 알 수 있었다. 다만 이들 유구는 창건 당시의 것이 아닌 7세기말 白鳳時代 이후의 것이다.

1995년에는 사역 북쪽을 조사해 奈良時代의 취락지를 확인하였다. 「寺」라고 쓰여진 墨書土器가 출토된 점 등으로 보아 新堂廢寺의 경영에 관계된 취락으로 생각된다. 이때 寺域의 北限으로 추정되는 東西溝도 확인되었다.

1998년 조사에서는 새로이 중문과 이에 연결되는 회랑, 남문과 이에 연결되는 토담, 寶幢遺構 등이 확인되었다. 중문과 남쪽 회랑의 건축연대는 飛鳥時代로 창건기의 가람이 남향이었음이 확인되었다. 그러나 창건기의 가람이 회랑으로 둘러쌓여져 있었는지에 대해서는 아직 미확인 상태이다.

남문과 이에 연결되는 토담의 건축연대는 奈良時代이다. 남문 축조 이전에 東西方向의 大溝가 굴착되어 있었는데 이것은 사역 전체의 計劃線과 같은 것으로 생각된다. 또한 남문은 礎石建物이 아닌 掘立柱建物로 桁行 3間, 梁行 2間의 東西棟이다. 남문의 남쪽에서는 寶幢遺構로 추정되는 6기의 掘立柱穴이 동서방향으로 검출되었다. 남문과 중문 사이에서는 남북방향의 溝가 2

개 검출되었는데 參道로 생각된다.

중문과 남문의 발견은 매우 중요한 것이다. 이 발견으로 가람이 남향이었던 것이 확실히 밝혀졌을 뿐만아니라 중심가람의 남북 길이가 약 1町(108m)이라는 것과 1996년도 발굴조사시에 발견된 東西溝와 아울러 사역 남북 길이가 거의 2町(216m)인 것이 확정되었다.

3. 遺物

新堂廢寺의 주요 출토유물은 기와류이다. 飛鳥時代부터 奈良時代까지의 다양한 기와와 瓦製品이 출토되었다.

초기의 수막새는 素弁蓮華紋으로 飛鳥寺 星組系 百濟樣式인 ⅠA04형식에는 유단식, 古新羅의 영향을 받았다고 생각되는 ⅠA02·03형식에는 무단식 수키와가 접합되었다. 또한 ⅠA05형식은 四天王寺의 素弁蓮華紋 수막새와 매우 유사하며 서까래기와 ⅠC01형식은 飛鳥寺와 同笵이다.

7세기후반에 사용된 기와는 山田寺系 單弁蓮華紋 수막새 ⅡA06·07형식과 川原寺系의 複弁蓮華紋 수막새 ⅡA09형식이다. 이와 셋트관계를 이루는 암막새는 三重弧紋이다.

奈良時代에는 平城宮式 複弁蓮華紋 수막새 ⅣA12형식과 均齊唐草紋 암막새 ⅣB04형식이 주류를 이루고 있으나 川原寺系 ⅡA09형식을 모방한 ⅡA10형식도 사용되었다. 이 시대의 암키와 중에는 「石川郡大口(國?)」라 線刻된 銘文瓦가 있다.

道具瓦에는 鬼面瓦, 鴟尾, 隅木蓋瓦, 착고기와, 암마루장기와, 塼 등이 있다. 치미 중에는 飛鳥寺에 필적하는 古式의 것과 銘文이 새겨진 것도 포함되어 있다.

그외에도 각 기형의 土師器·須惠器, 圓面硯, 塼佛, 塑像片, 帶金具, 石帶, 鐵斧, 釘, 繩文時代와 彌生時代의 石器 등이 있다.

4. 考察

본서에서는 7편의 고찰을 수록하였다.

大阪市立大學 榮原永遠男教授는 「文字瓦について」에서 奈良時代 암키와에 새겨진 「石川郡大口 (國?)」라는 銘文으로 본 律令制下의 河內國 石川郡內에 있어 大國鄕의 위치와 그에 관련된 氏族에 대해 논하였다.

大阪府教育委員會 井西貴子은 「新堂廢寺出土軒丸瓦」에서 新堂廢寺에 造瓦技術의 도입, 工人과 瓦笵의 이동, 제품의 반입 등 여러가지 측면에서 飛鳥寺가 조영될 당시에 백제로 부터 전래된 조와기술이 전개되어 가는 과정

에 있어 新堂廢寺가 받은 영향과 독자성, 사원조영주체와 공인집단 및 중앙과의 관계를 추구하였다.

京都市文化市民局 堀大輔은 「山田寺式軒丸瓦における外縁の挽型施紋について」에서 폭넓게 전개되는 山田寺系 수막새 중에 新堂廢寺에서만 사용된 기법적 특징인 外縁 三重圈紋의 回轉施紋에 대해서 고찰하였다.

大阪府教育委員會 廣瀨雅信은 「新堂廢寺の重弧紋軒平瓦」에서 三重弧紋 암막새를 제작기법과 그밖에 다른 기와와 비교 검토하여 상대적 편년을 제시하고 山田寺系와 川原寺系의 두종류 수막새와의 셋트관계에 대해서 예찰하였다.

京都大學大學院 梶原義實은 「奈良時代における新堂廢寺の造瓦組織一丸瓦・平瓦の分析より一」에서 落下한 상태로 출토된 남문의 일괄 수키와・암키와를 상세히 분석하고 회랑과 토담 그리고 그밖에 기와를 비교하여 奈良時代 기와가 複數의 窯로 부터 공급되었으며 同一窯에서도 기와를 사용한 건물에 따라 제작공인의 단위도 구분되었다는 것을 논증하였다.

京都大學大學院 岩戶晶子은 「南門柱掘方出土鴟尾とその復元」에서 南門柱穴 안에서 출토된 白鳳時代 鴟尾의 편년과 전체의 형태를 복원하기 위한 근거를 제시하였다.

또한 岩戶晶子은 「道具瓦から見た新堂廢寺」에서 鴟尾와 鬼面瓦에 대한 형식분류와 편년을 시도하고 飛鳥時代의 鴟尾 제작에는 飛鳥寺 星組工人이 관여하였고 그후에도 鴟尾의 제작에 관해서는 높은 기술 수준을 지녔으면서도 奈良時代의 鬼面瓦 제작기술이 치졸한 것에 대해서 사회적 정치적 배경과 공인의 분화 등 그 동향에 대해서 논하였다.

5. 付章「攝河泉の古代寺院」

大阪府에 소재하고 있는 飛鳥時代에서 奈良時代까지의 사원유적에 대해서 소재지, 舊國郡名, 창건연대, 가람배치, 취락과 고분과의 관계, 출토유물 등에 관한 기초 자료를 일람한 것이다. 攝津、河內、和泉의 각 개요도 첨부하였다. 大阪府教育委員會 조사보조원 矢倉嘉人、西村香織、中村祐子가 담당하였다.

(訳 大洞真白 校訂 李다운)

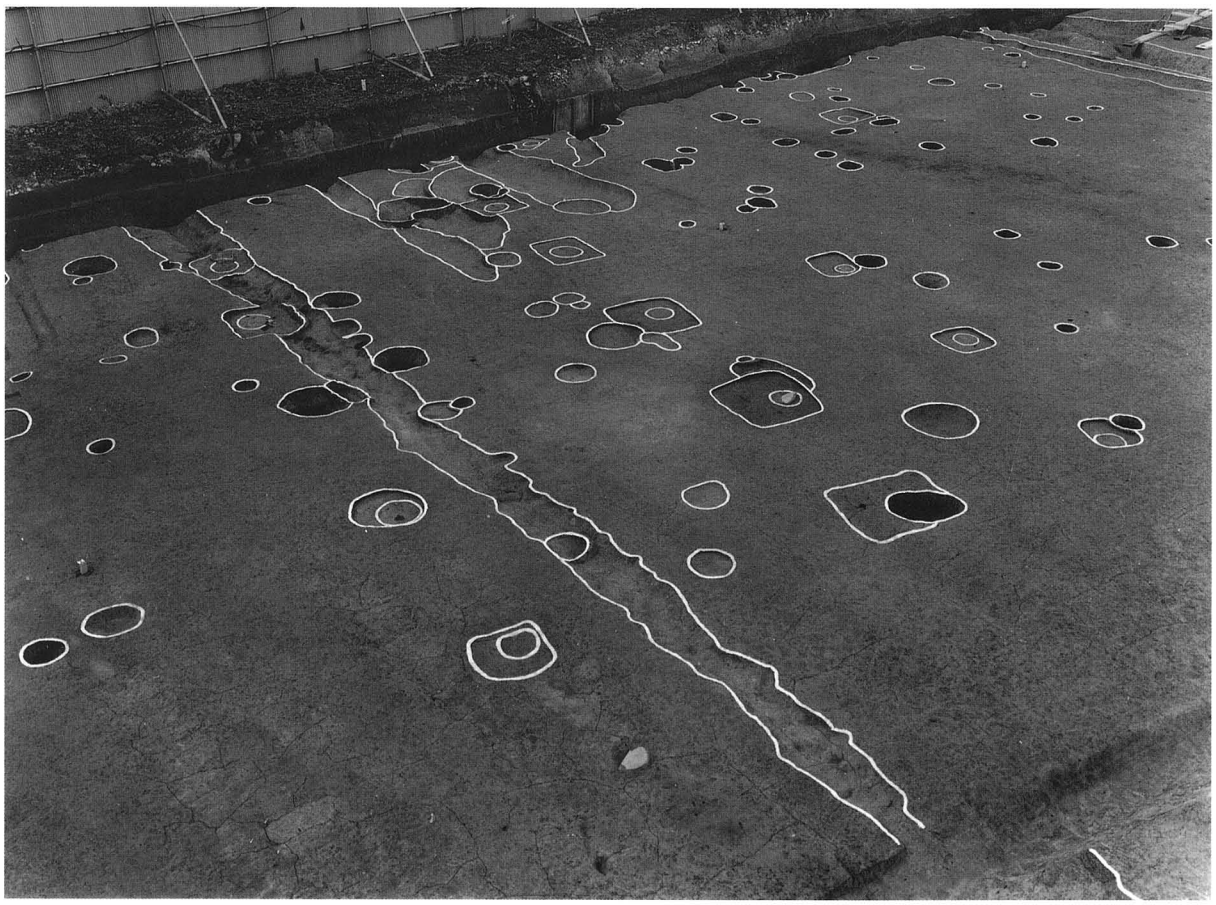
図　　版

図版一　新堂廃寺周辺航空写真（一九六一年撮影）

中央建物（金堂）（南西から）

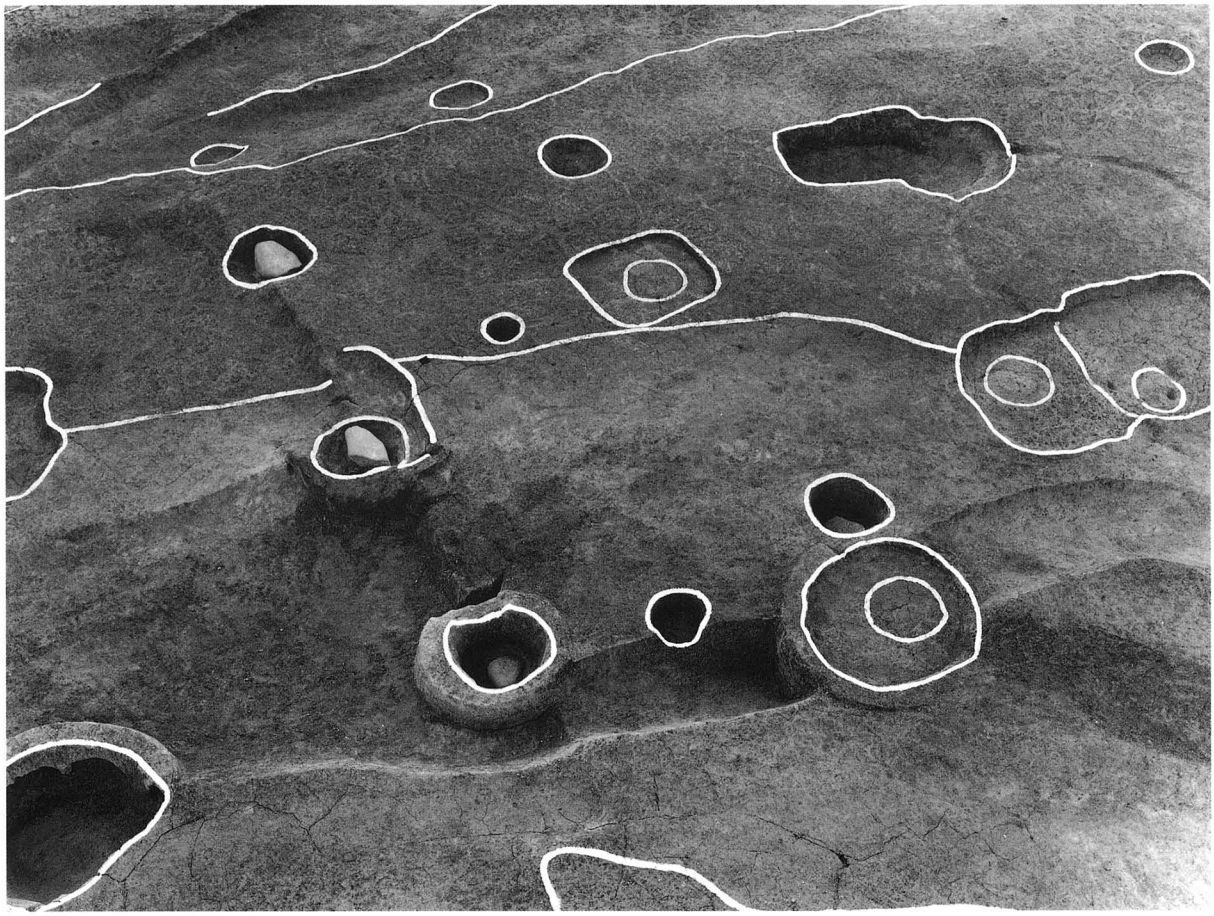
南方建物（塔）（南西から）

A区全景（西から）

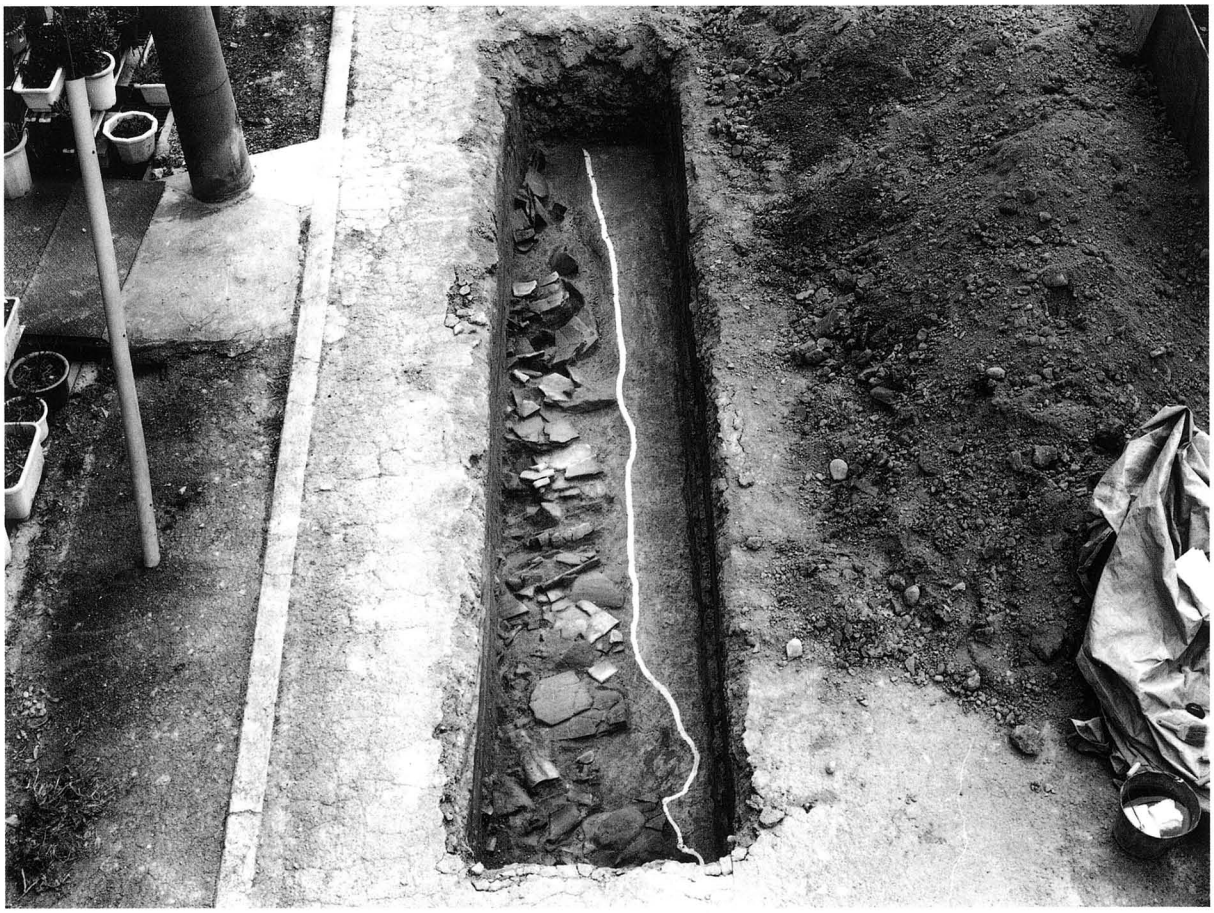


建物02検出状況（北から）

図版四　九五・九六年度調査（九六〇六七）



建物10検出状況（北から）



96年度D区落ち込み（北から）

図版五　九八年度調査地全景（九八〇二一）（一九九八年十一月撮影）

図版六　九八年度調査A区（九八〇二一）

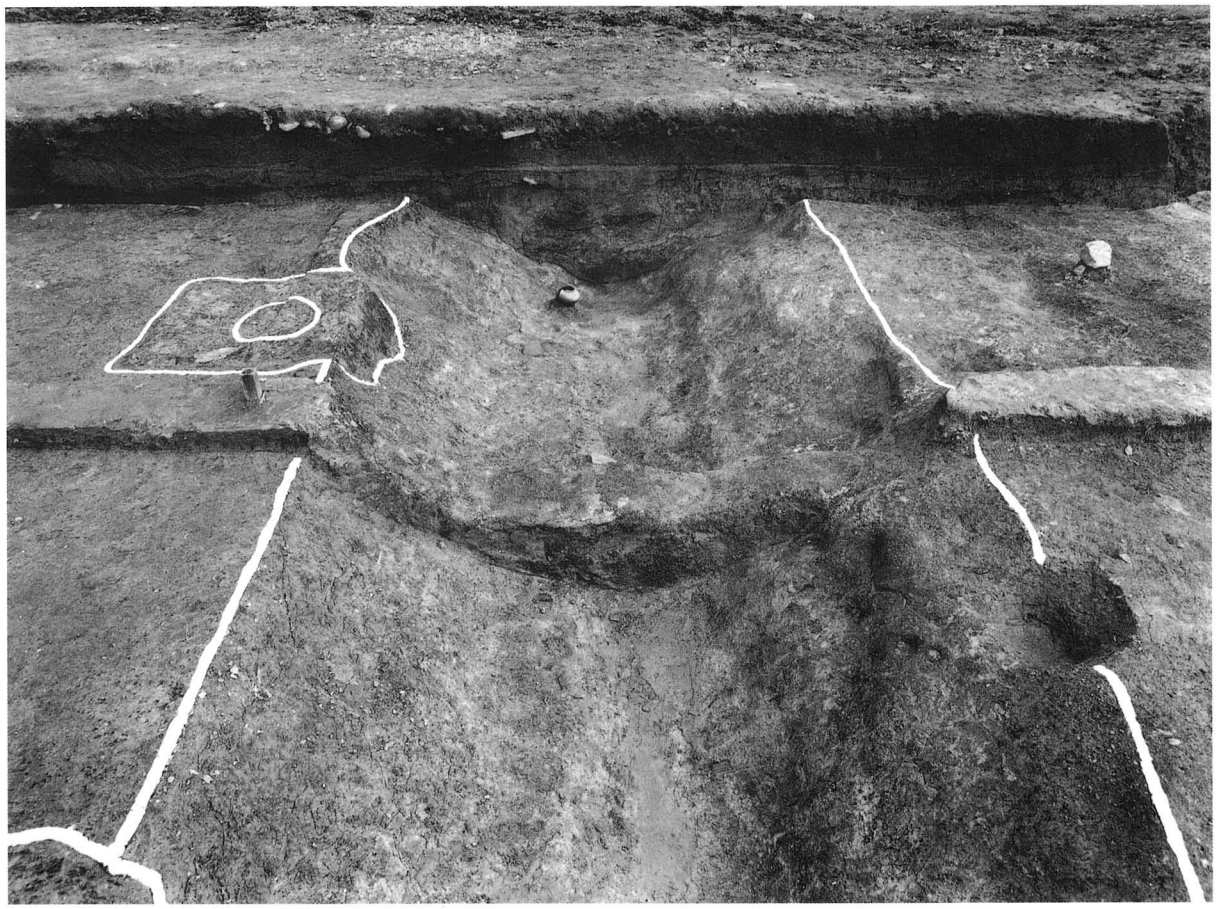
中門・南面回廊・参道側溝（上が北）

南面回廊基壇（西から）

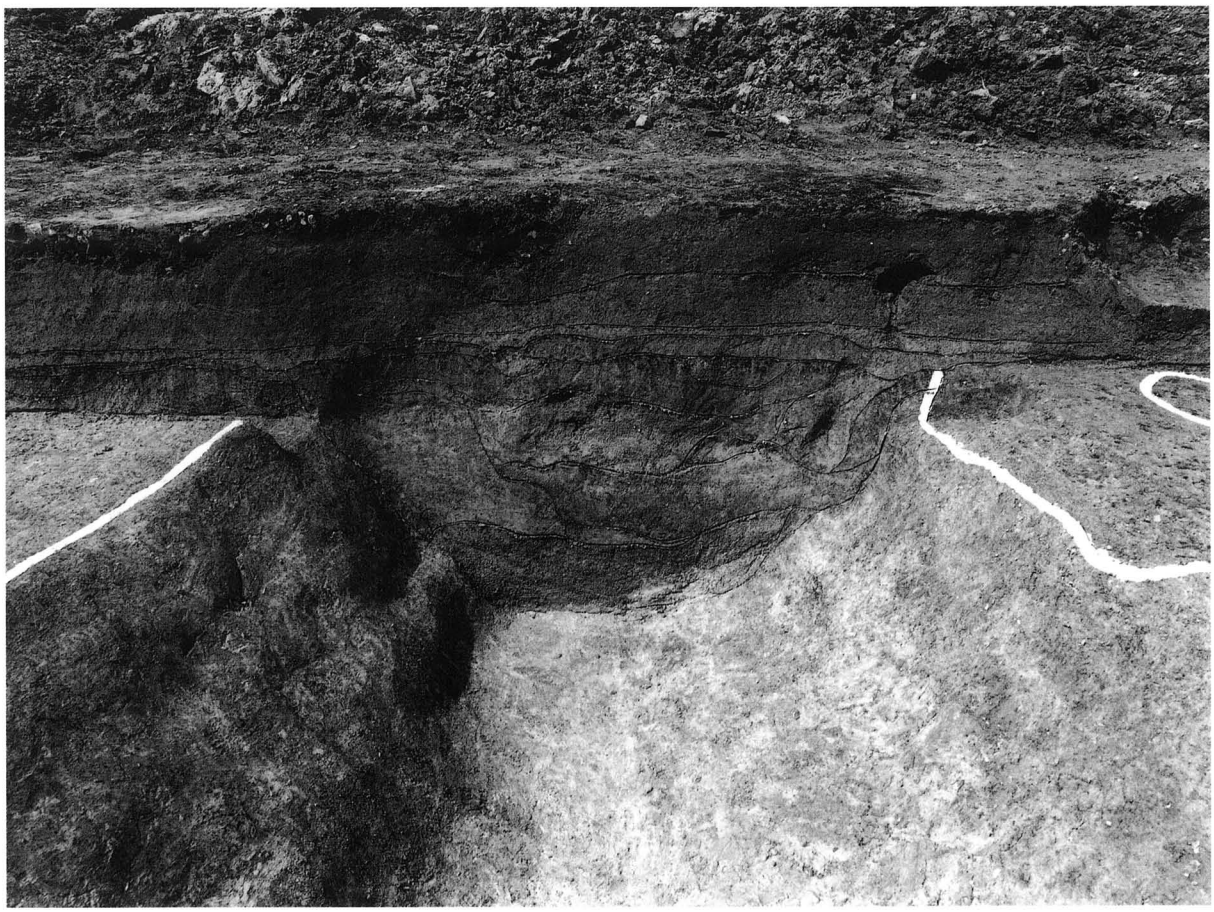
図版七　九八年度調査A区（九八〇二一）

A区東端落ち込み・整地土断面（西から）

南面回廊南側　奈良時代瓦堆積（西から）



溝53・南門柱穴（西から）



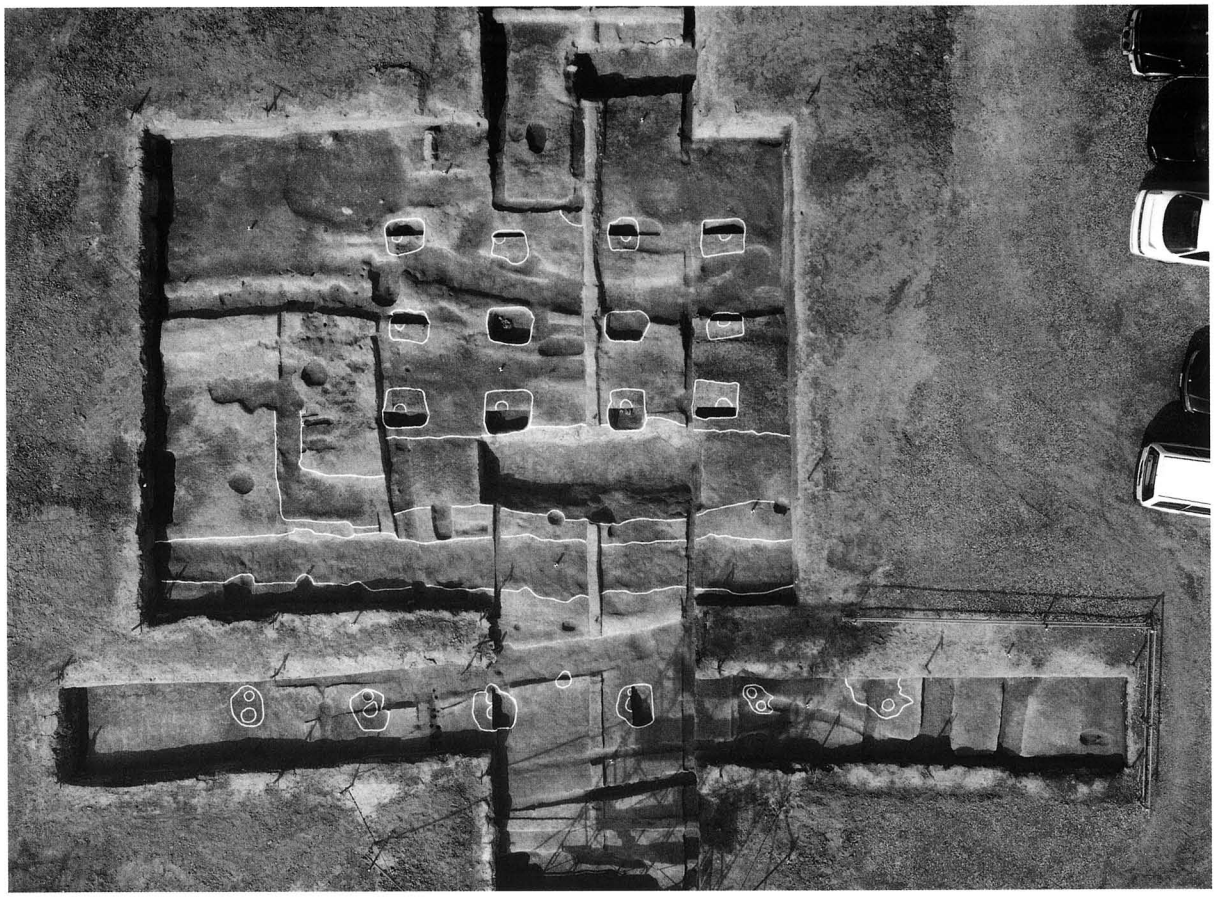
溝53覆土堆積状況（東から）

図版九　九八年度調査D・E区（九八〇二一）

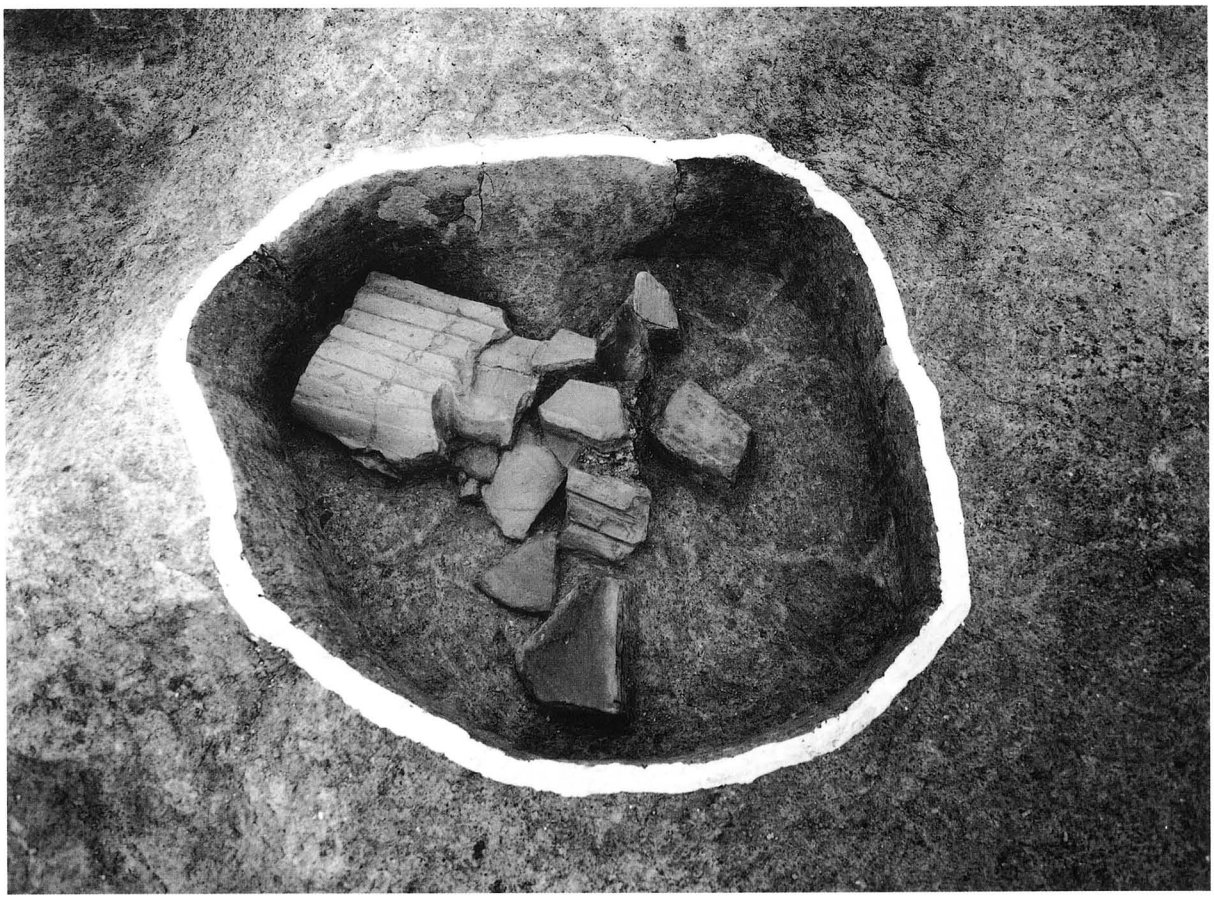
D区溝53遺物出土状態・覆土堆積状況（南東から）

E区溝53（南から）

図版十　九八年度調査C区（九八〇二一）

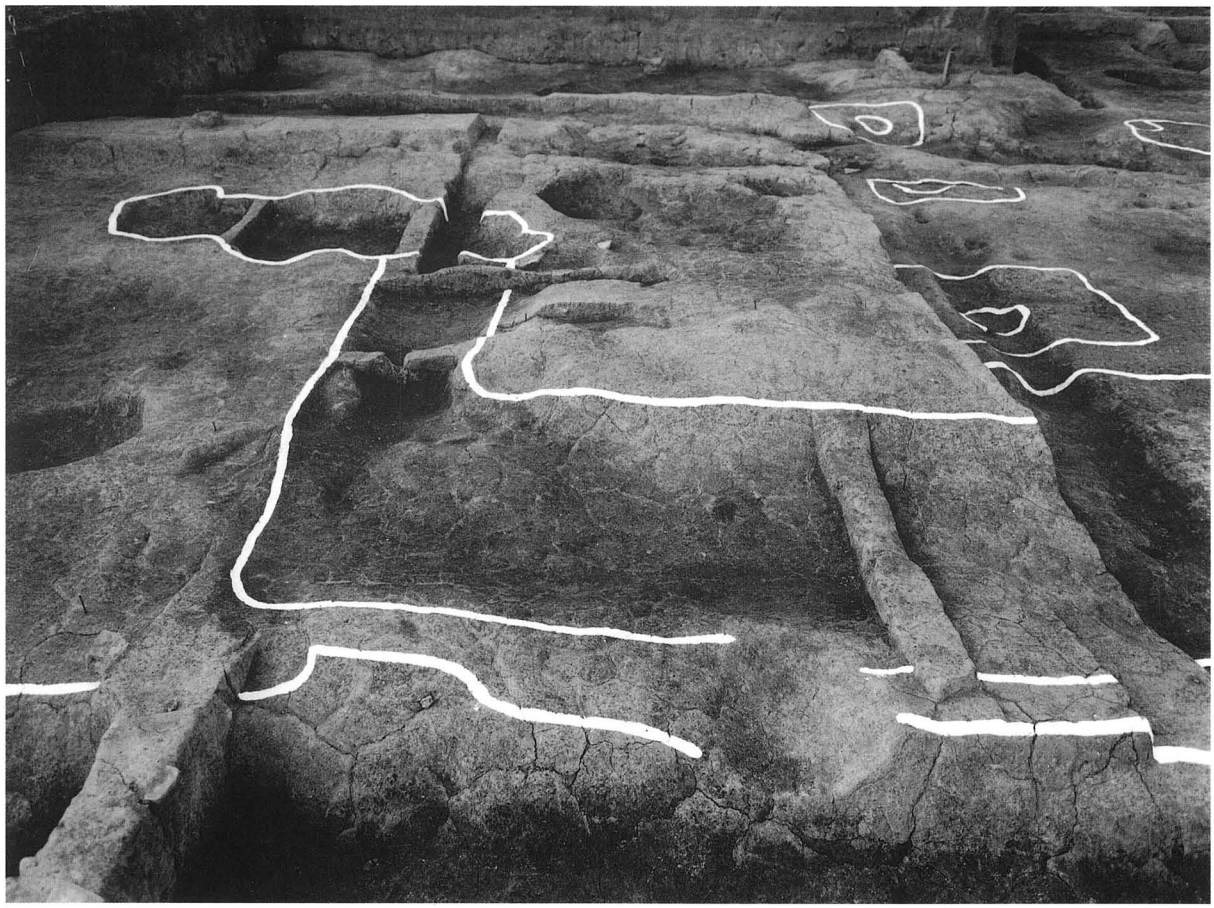


南門・築地49・宝幢遺構全景（上が北）



南門柱穴26　掘方内鴟尾出土状態（南から）

図版十一　九八年度調査C区（九八〇二一）



南門南東角　雨落ち溝55（南から）

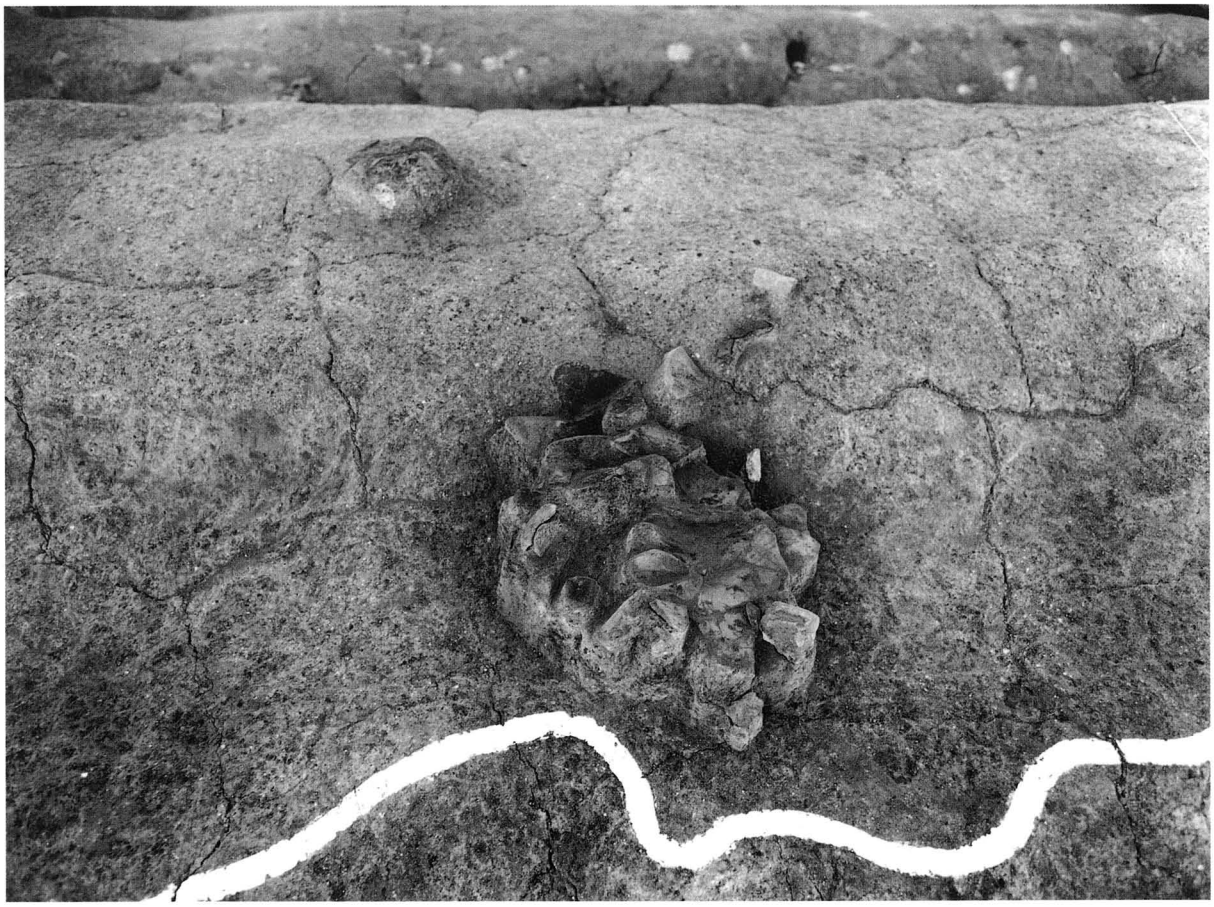
南門・築地49落下瓦・溝52検出状況（南から）

図版十二　九八年度調査C区（九八〇二一）

南門落下瓦組部

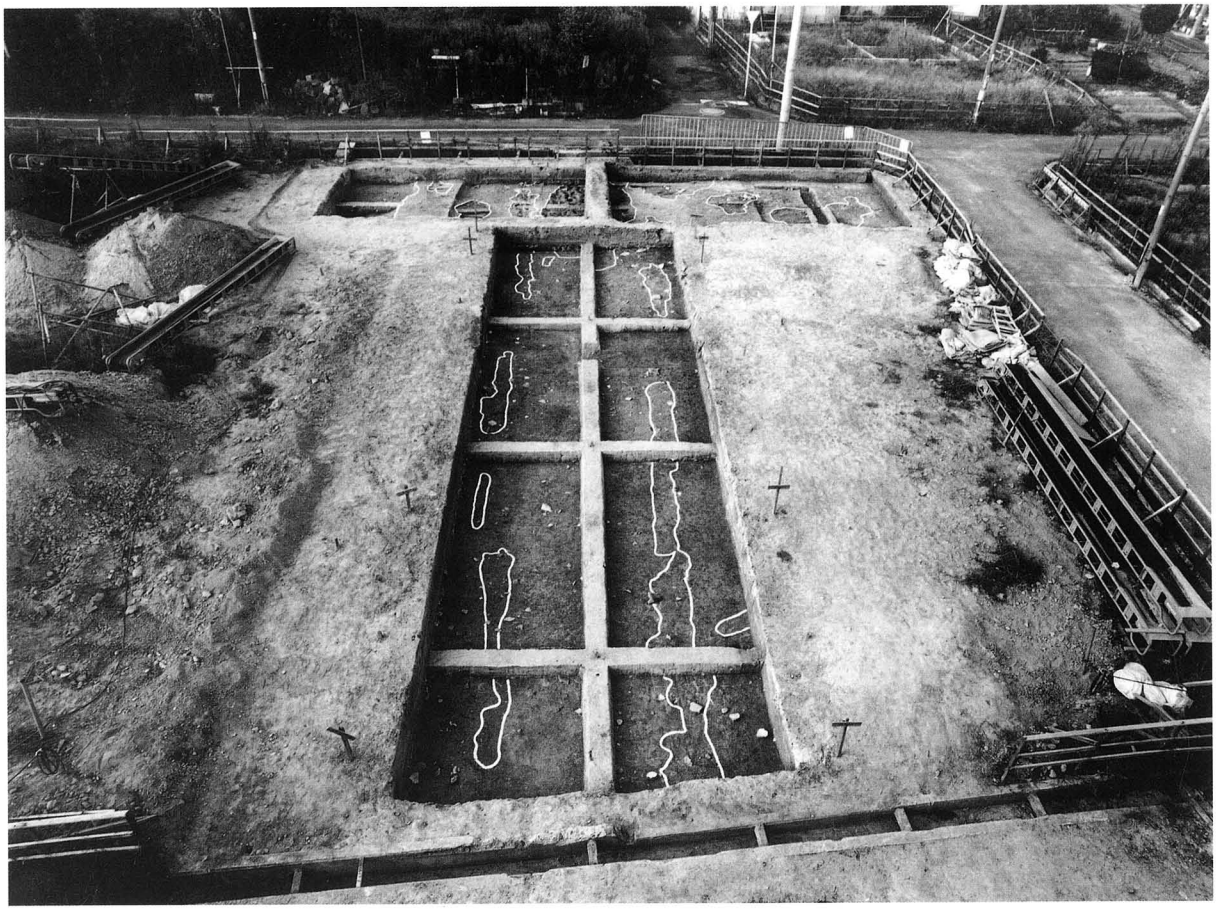
同上

築地49・犬走り検出状況（南東から）



築地49・地鎮土器出土状態（南から）

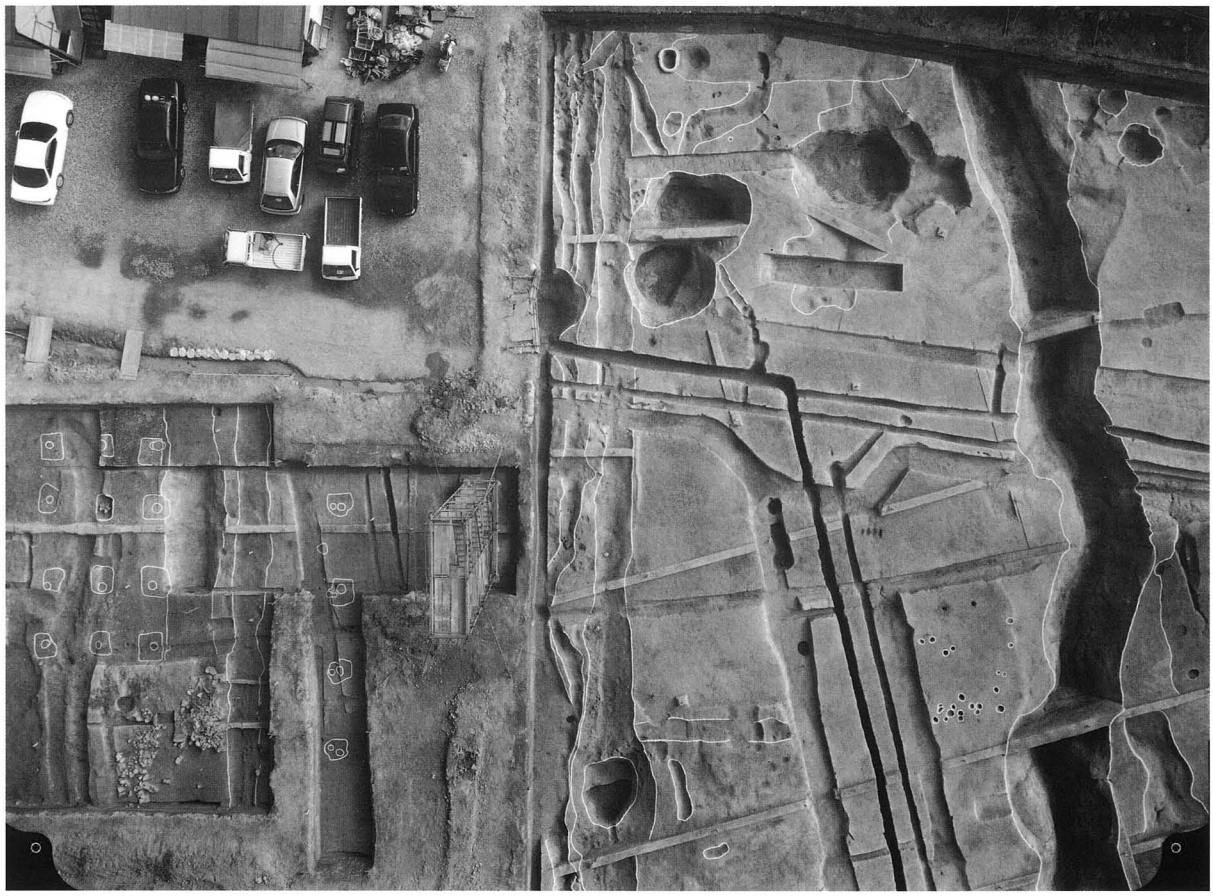
図版十四　九八年度調査B区（九八〇二一）



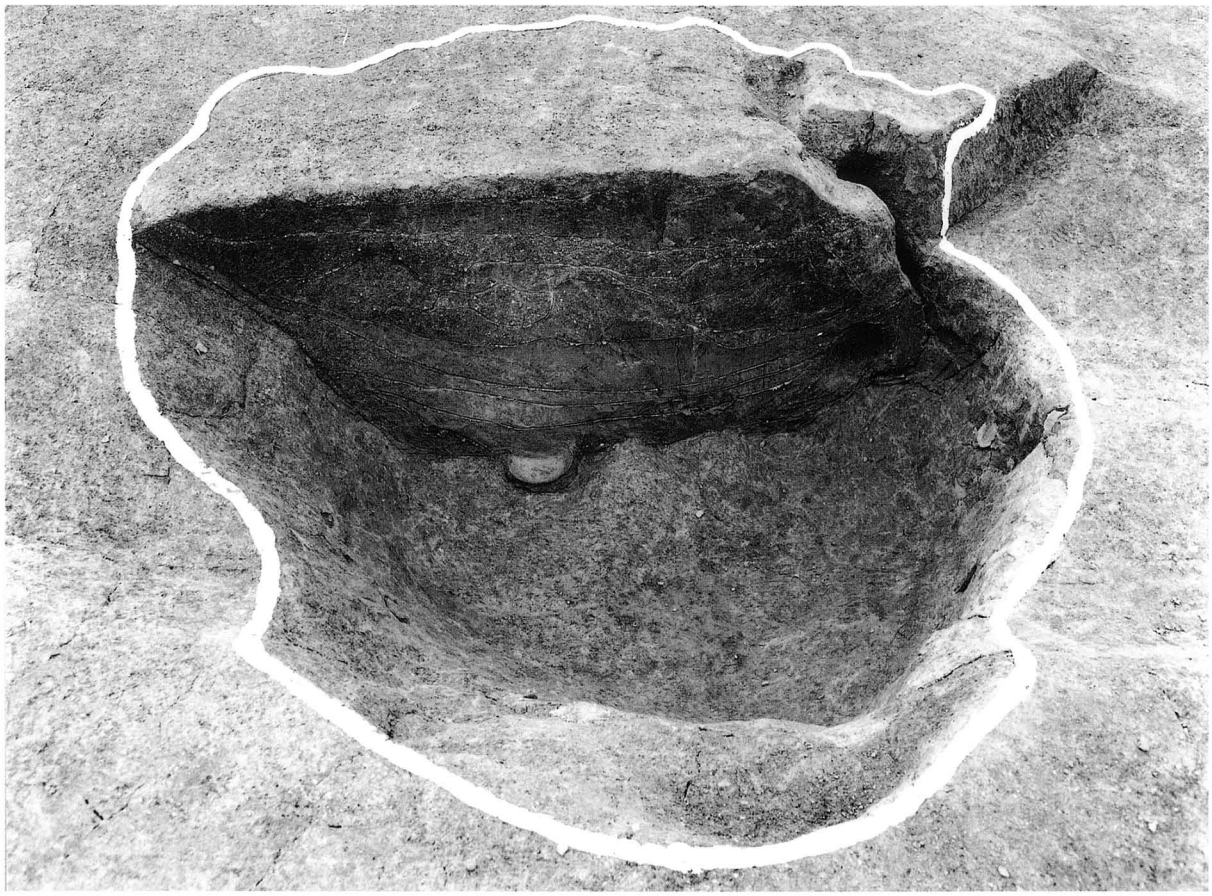
中門以南参道側溝（溝５～13）検出状況（南から）

中世以降の耕作に伴い畦下に集積された瓦（南から）

図版十五　九八年度調査G区（九八〇二一）



G区東半全景（左が北）



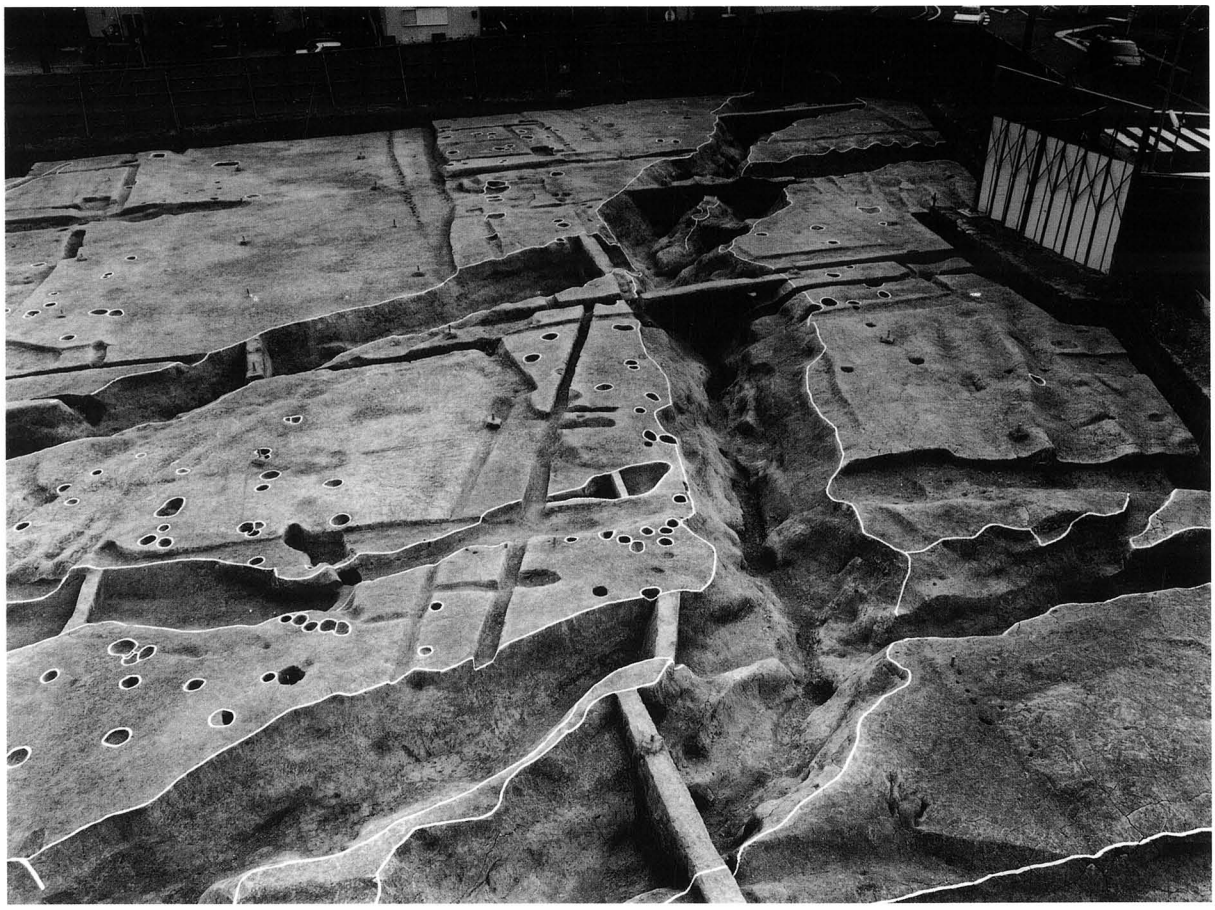
井戸68（東から）

図版十六　九八年度調査G区（九八〇二一）

土坑70遺物出土状態（西から）

東西溝58・59（西から）

図版十七　九八年度調査G区（九八〇二一）



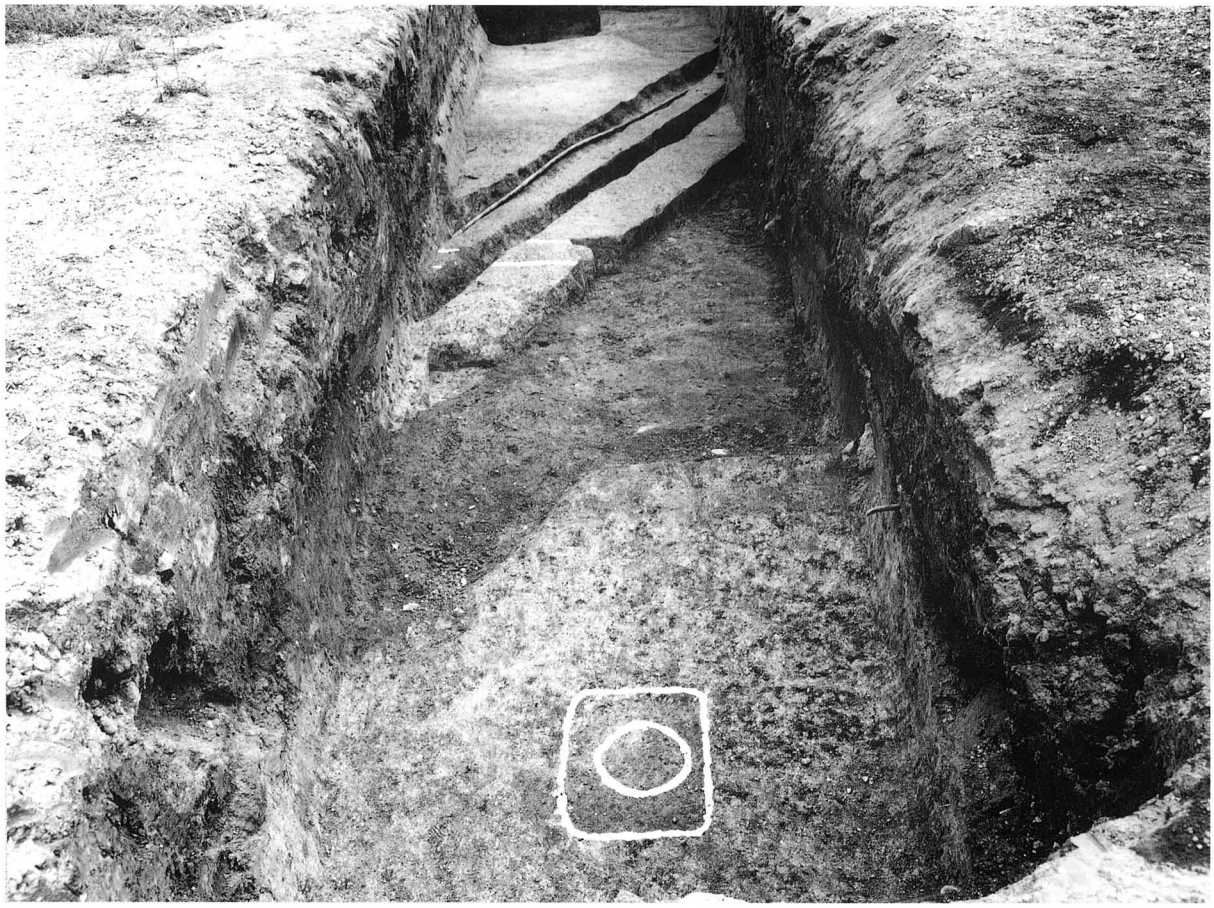
溝67・84、自然流路62（北から）

溝67覆土堆積状況（北から）

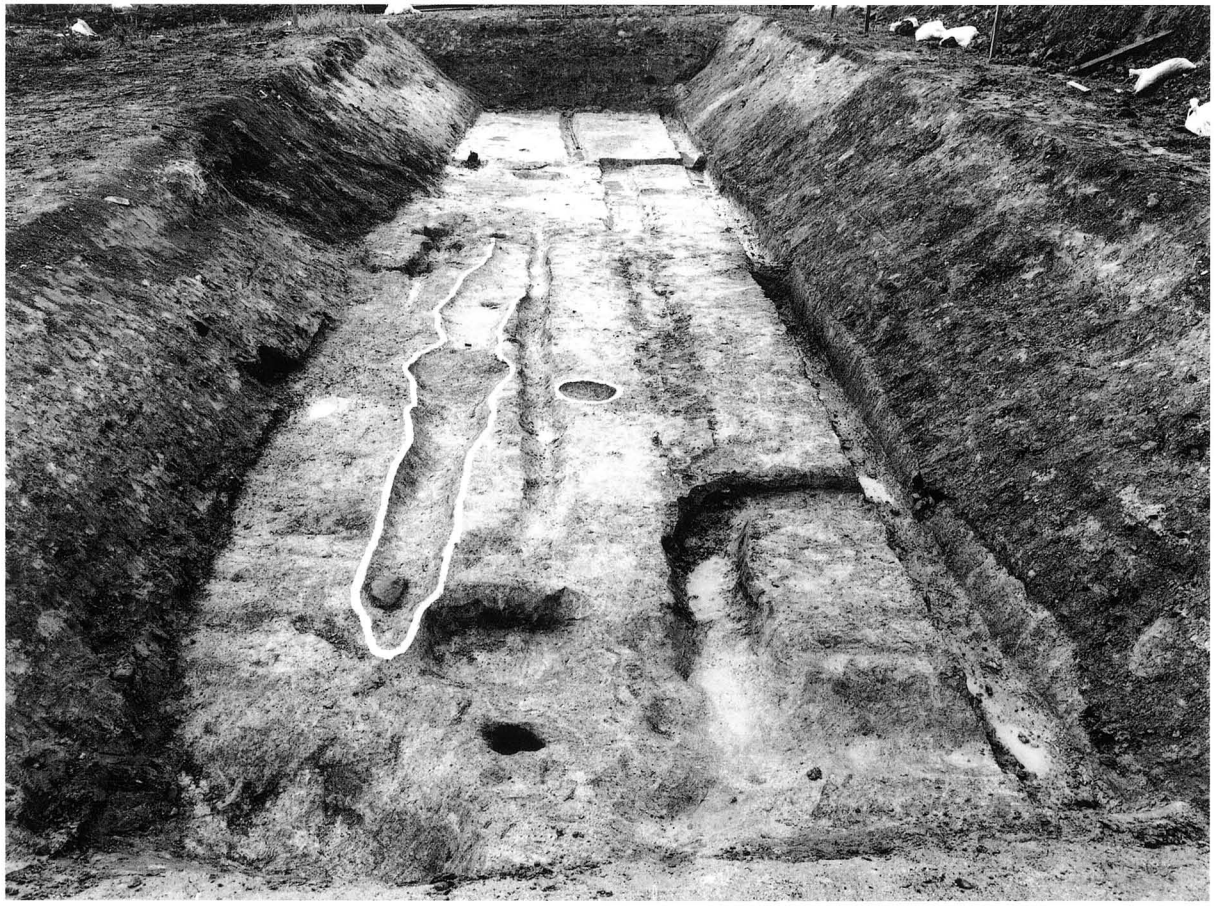
図版十八　九八年度調査G区（九八〇二一）

自然流路62覆土堆積状況（西から）

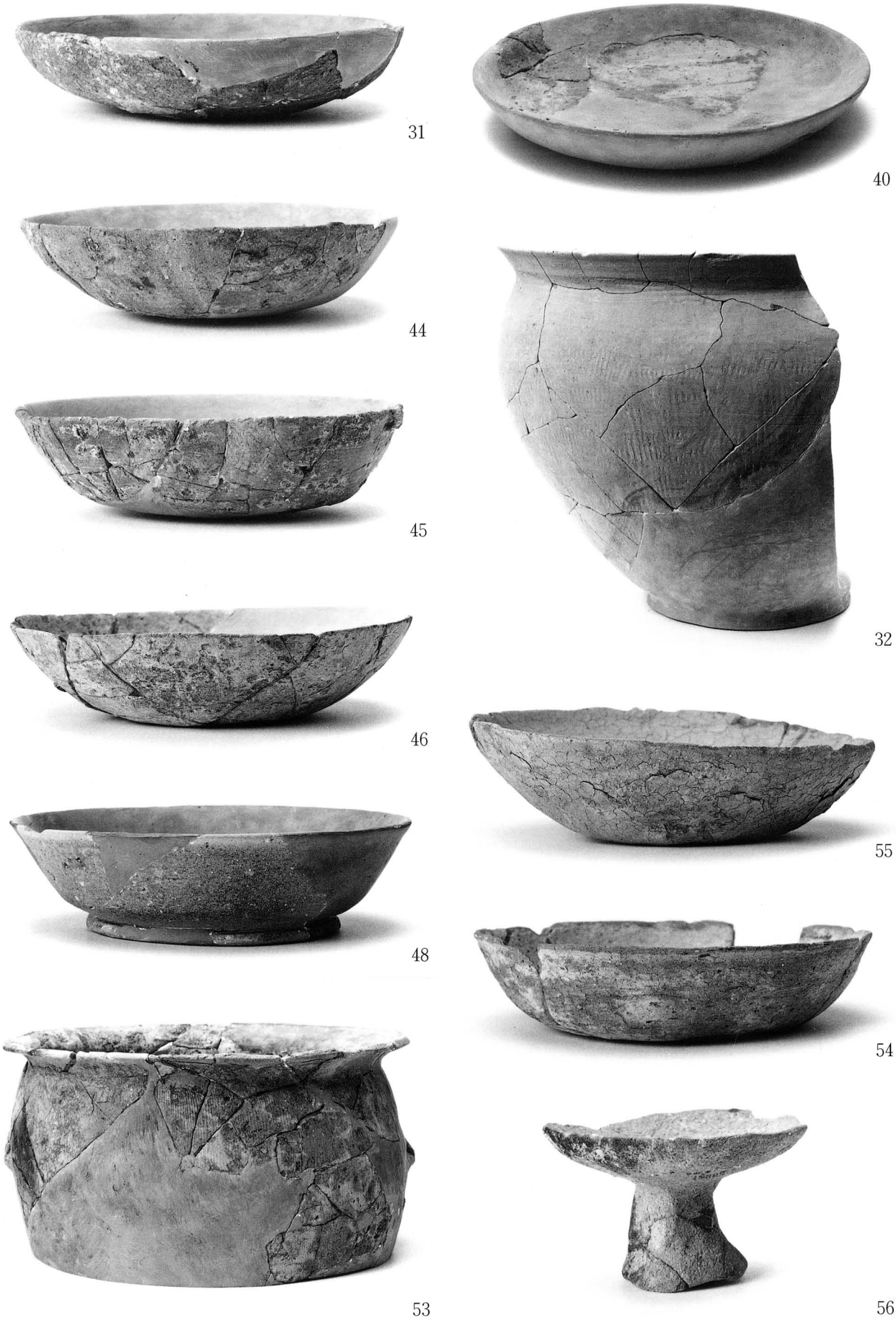
G区南端整地土堆積状況（北東から）



Aトレンチ掘立柱穴検出状況（北から）



B区全景（東から）



整地土出土遺物（31）、瓦溜出土遺物（32）、南門瓦落ち出土遺物（40）
築地49出土遺物（44～46）、溝52出土遺物（48）、包含層（築地南辺付近）出土遺物（53）
土坑70出土遺物（54、55）、土坑83出土遺物（56）

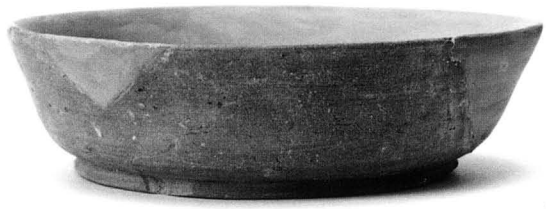
35

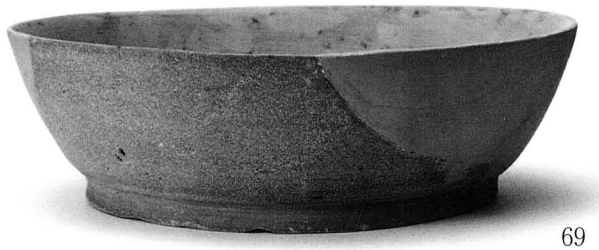
36

37

58

65


68


69

70

75

78

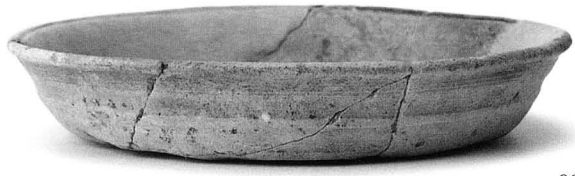
溝53出土遺物（35～37）、溝58出土遺物（58、65、68～70、75、78）

79

86

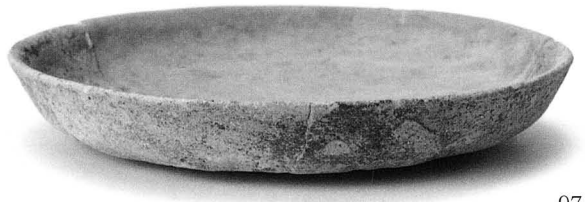
90

89

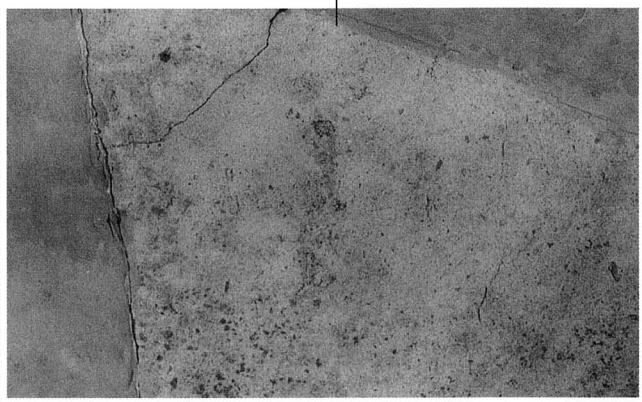


93

91



97

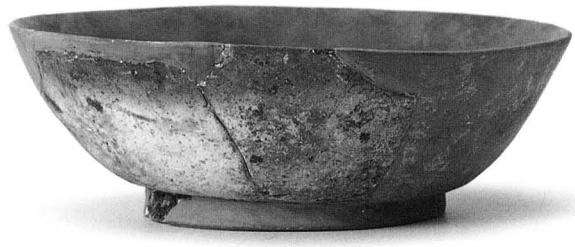


溝58出土遺物

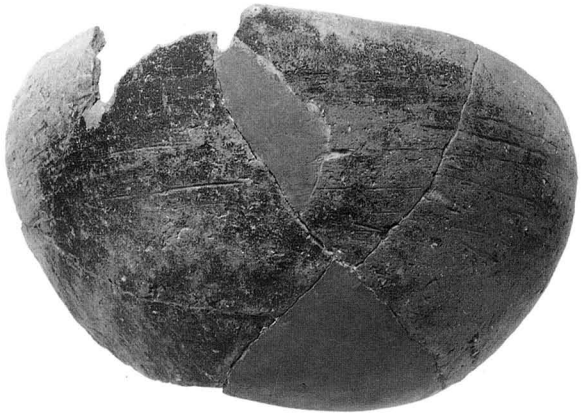
95

129

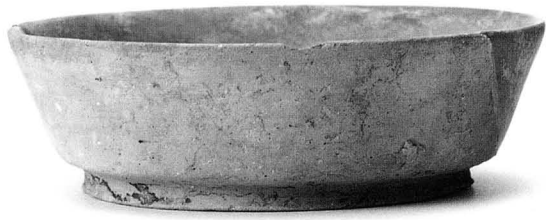
100



130



106



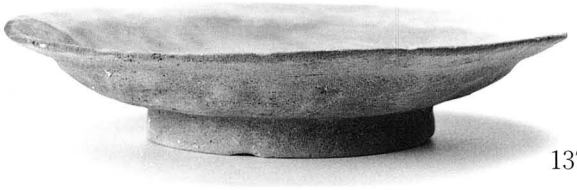
131

120

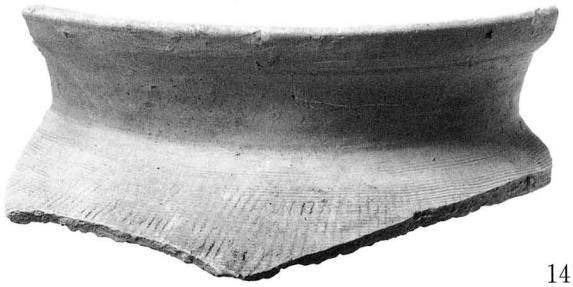
溝58出土遺物（95、100、106、120、129、130）、溝59出土遺物（131）

135

136


137

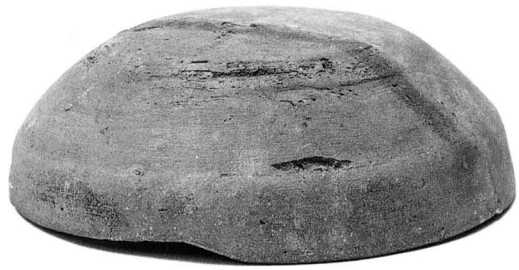
140


141

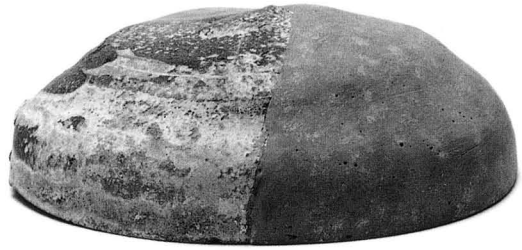
145

144

146


147

148


149

溝59出土遺物（135～137）、溝65出土遺物（140）、溝66出土遺物（141、144）
溝67出土遺物（145～149）

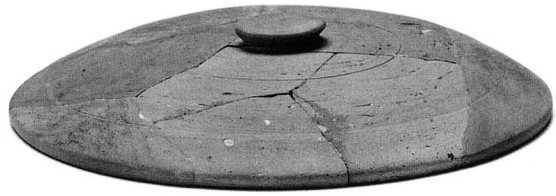
150

151

152

153

154

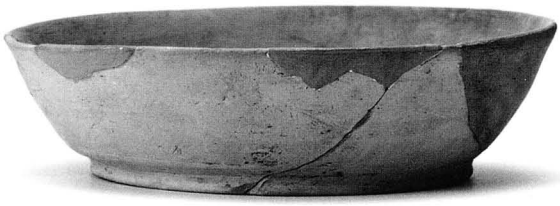

157

158

160

161

164


165

166

溝67出土遺物

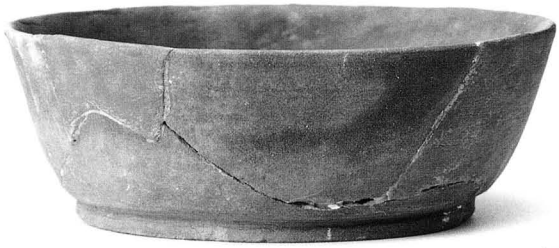
169

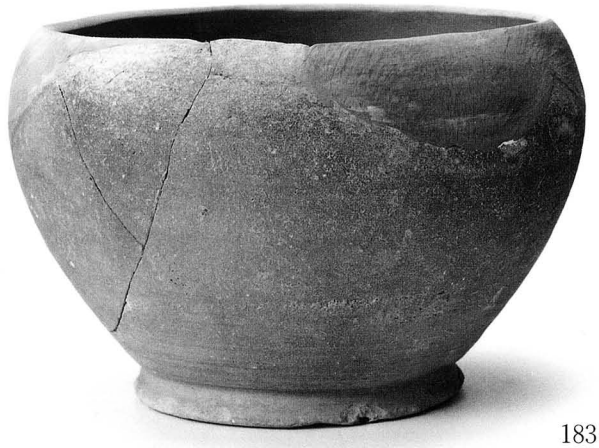
177

170

181

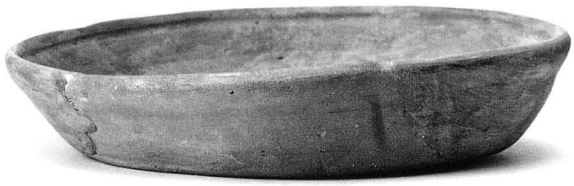
172


173


183

174

184

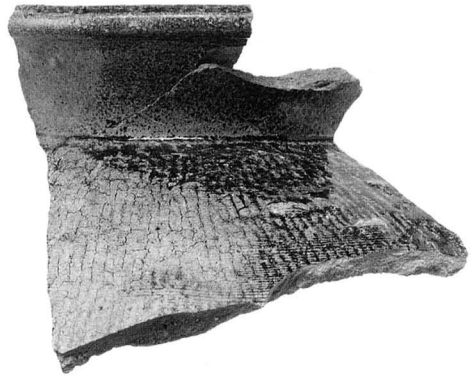

175

溝67出土遺物

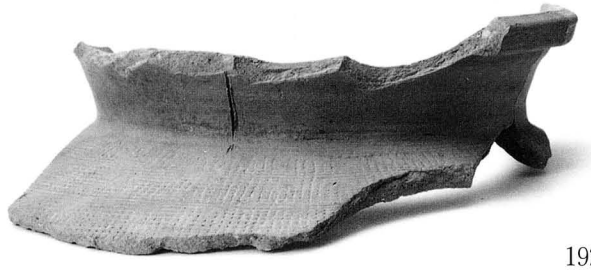
187

187′

188



191

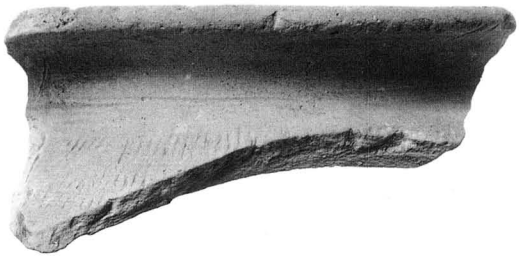


192

194

193

溝67出土遺物

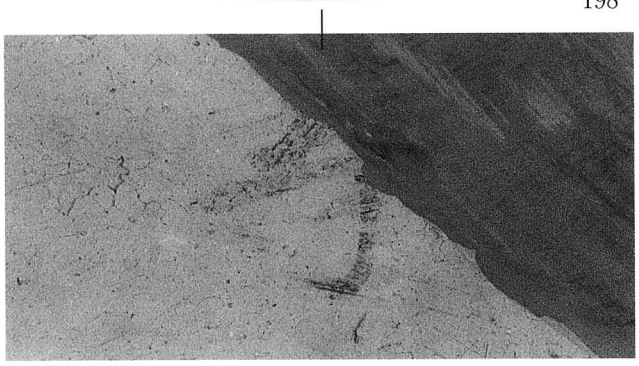


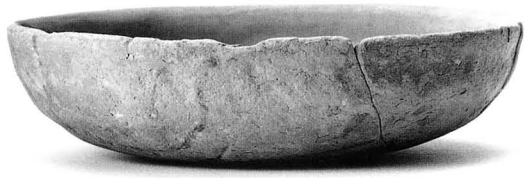
196

202

198

205





206

197

溝67出土遺物

207

212

213

216

220

224

232

225

236

237

238

溝67出土遺物

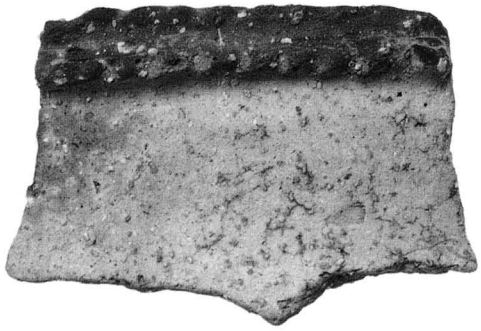
239

240

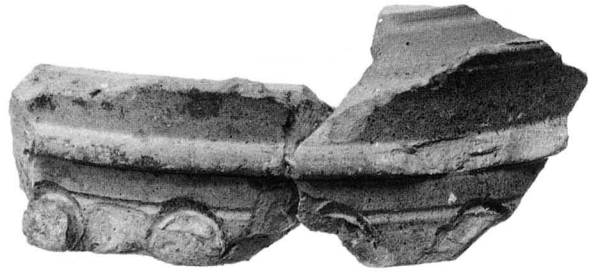
242

241

243



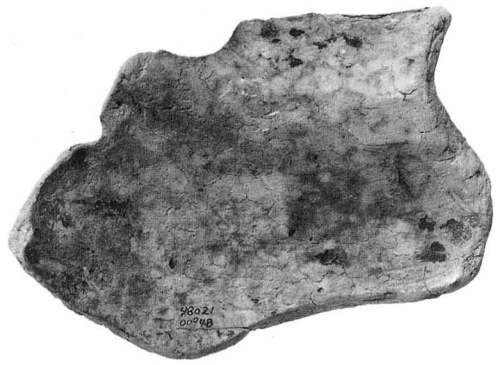
251



254

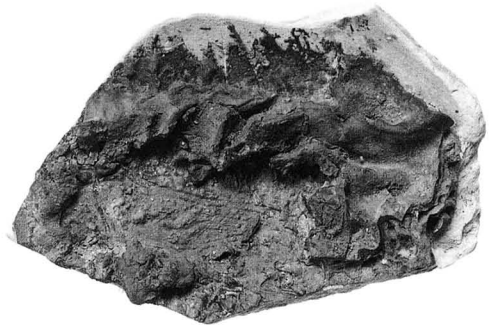
溝67出土遺物（239～243）、自然流路62出土遺物（251）、硯（254）

255

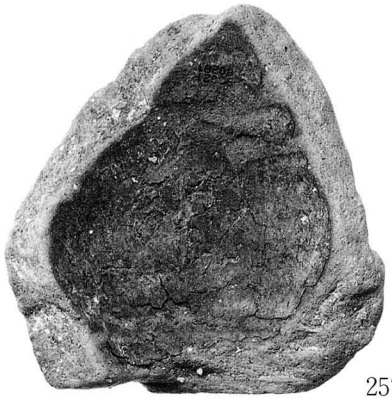


255′

256



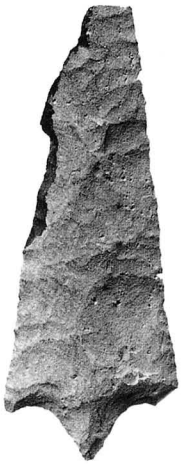
258



257

269

269′



268

268′

270

270′

271

271′

漆容器（255～258）